ファンタジーランド

TVゲーム世代のためのコミック&小説マガジン

# Fantasy Land

ファミコン必勝本 11月30日増刊号
680YEN（税込）
Vol.1



読み切り！書き下ろし！

クインティ
チェイスH.Q.
ありがちRPGマンガ
死を叫ぶ者

●巻頭カラー
今ひとたびの夢に誘われ

FINAL FANTASY II ファイナルファンタジー

ウィザードリィ外伝 Wizardry

●ベニー松山書き下ろし小説
虚影の海〜Silent Blue〜

TVゲームを超えたコミック誌が今!!

ファミコン必勝本 11月30日増刊号
TVゲーム世代のためのコミック&小説マガジン
FANTASY LAND ファンタジーランド VOL.1
JICC



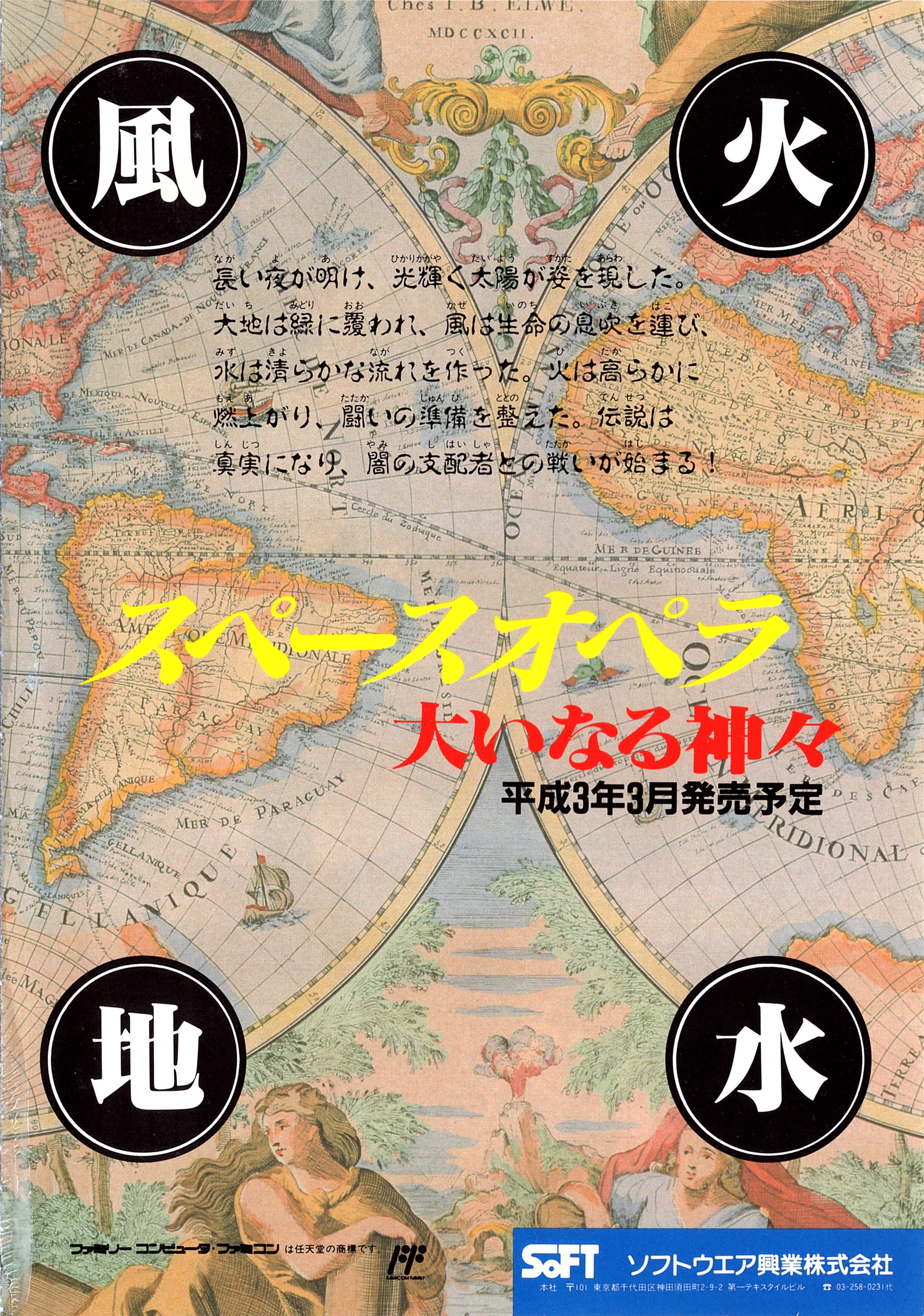
ファミリー コンピュータ・ファミコン は任天堂の商標です
FAMICOM FAMILY
幾千億年の間、母なる神の下
夜も昼もなく、宇宙は赤く輝いていた……
そして、今、
暗闇が生まれ
物語は始まる
スペースオペラ
大いなる神々
平成3年3月発売予定
SoFT ソフトウエア興業株式会社
本社 〒101 東京都千代田区神田須田町2-9-2 第一テキスタイルビル ☎ 03-258-0231(代)


耳はいいわ
誰だ?!
でも声はだめね
弦奏王シリーズ・プロローグ
今ひとたびの夢に誘われ
画・飯田晴子
原作・手塚一郎

# 今ひとたびの夢に誘われ




ラナンシーよ
名をおしえてくれ
知ってたの……
それでも…？
月よ　愛しい男……
見とどけたくなったわ
王となるべき貴方の一生を……
それが全ての初まり
短き意識と永き無意識
人はいくつの夢をみるのだろう……
End


風
火
地
水
長い夜が明け、光輝く太陽が姿を現した。
大地は緑に覆われ、風は生命の息吹を運び、
水は清らかな流れを作った。火は高らかに
燃え上がり、闘いの準備を整えた。伝説は
真実になり、闇の支配者との戦いが始まる！
スペースオペラ
大いなる神々
平成3年3月発売予定
ファミリーコンピュータ・ファミコンは任天堂の商標です。
SoFT ソフトウエア興業株式会社
本社 〒101 東京都千代田区神田須田町2-9-2 第一テキスタイルビル ☎ 03-258-0231代

ファミコン必勝本増刊
# ファンタジーランド Vol.1

# CONTENTS

## COMICS



## COLUMN



## NOVEL



## COMMENTS

●飯田晴子
ひえ〜っ！新参者には荷が重過ぎました〜。せめて足を引っぱらないようにガンバリたいとはりきっている飯田です！どぞ♡ヨロシク。

●手塚一郎
幻奏王シリーズ、今回は絵物語風となりました。たった3ページですがお楽しみください。小説版の方は近いうちに書くのでヨロシク。

●海明寺裕
あのFF IIがマンガになったぞ。「んなものどんなゲームか忘れちまったぜ」とゆー困ったちゃんは今すぐ！カセットをつっこもう!!

●石垣 環
何と言っても今回はヒロインのマナと、ニュー・キャラのフィルのデザイン。描いた本人が言うのも何ですが、・・・ひどいわ。

●鈴木みそ
朝うんこをしたら、紙に血がついてた。これでボクも立派なマンガ家になったのだと思ったりした。ま、そういうマンガです。

●駒澤よしとし
240km/hの壁を超えていない私にとって、300km/hはまさにファンタジーであり、チェイスするべきものです。

●杉森 建
今回は一応、ファミコン版のゲームストーリーをベースにして描いてみました。えっ、バレリーナの出番が少ない…？ しまった。

●高橋政輝
イラストレーター高橋政輝がマンガ家高橋に初チャレンジ。ストーリーは前からあたためていたものなんだけど。どーでしたか？

●ベニー松山
仕事として初めてのウィズを離れた小説です。舞台は1940年代、しかし我々とは違う歴史を辿った世界です。感想お待ちしてます。

## ★編集部より

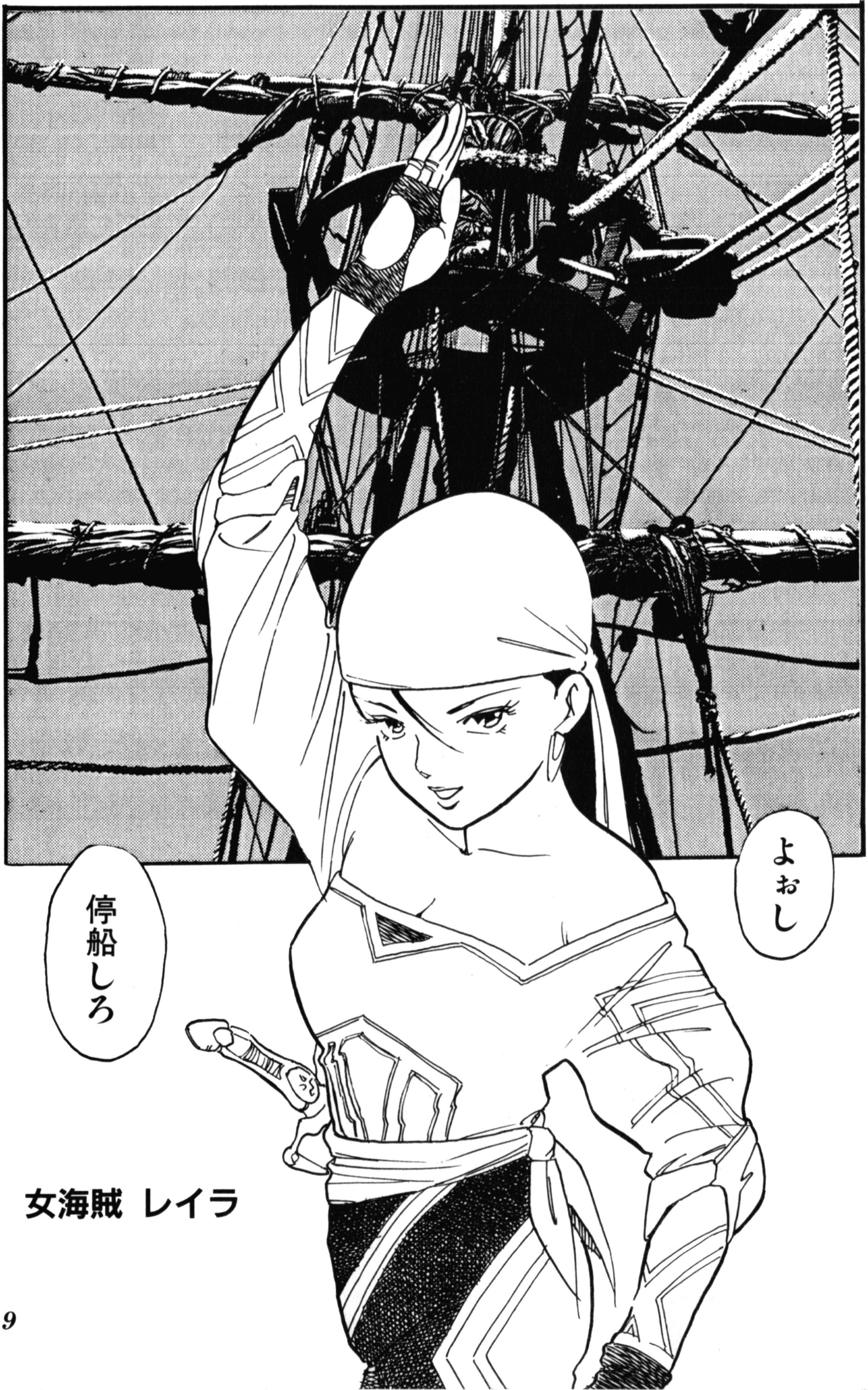
「ファミコン必勝本」の中のコーナーとしてスタートした『ファンタジーランド』が増刊号として独立、記念すべき第1号が発売の運びとなりました。編集部では、定期刊行を目指し、皆様からの原稿を募集しています。未発表のコミック・小説をお持ちの方はどしどし編集部へお寄せください。あて先は、千代田区麴町5－5－5 JICC出版局 ファンタジーランド編集部まで。TVゲームよりおもしろいファンタジーの世界、お待ちしています。


表紙イラスト／佐藤仁彦
表紙AD／バナナグローブスタジオ
本文レイアウト／遊デザイン室
編集／ファミコン必勝本編集部




FINAL FANTASY II

◆魔物を繰り世界征服を企むパラメキア帝国V.S.フィン帝国の反乱軍の戦いが始まった!!



JICC PRESENTS
BASED ON THE PLOT OF T.V. GAME
"FINAL FANTASY II"
RELEASED FROM
SQUARE

堂々65ページコミック化!!
ファミコンRPGの雄

この辺(あた)りで
いいだろう

ファイナルファンタジーII

# FINAL FANTASY II

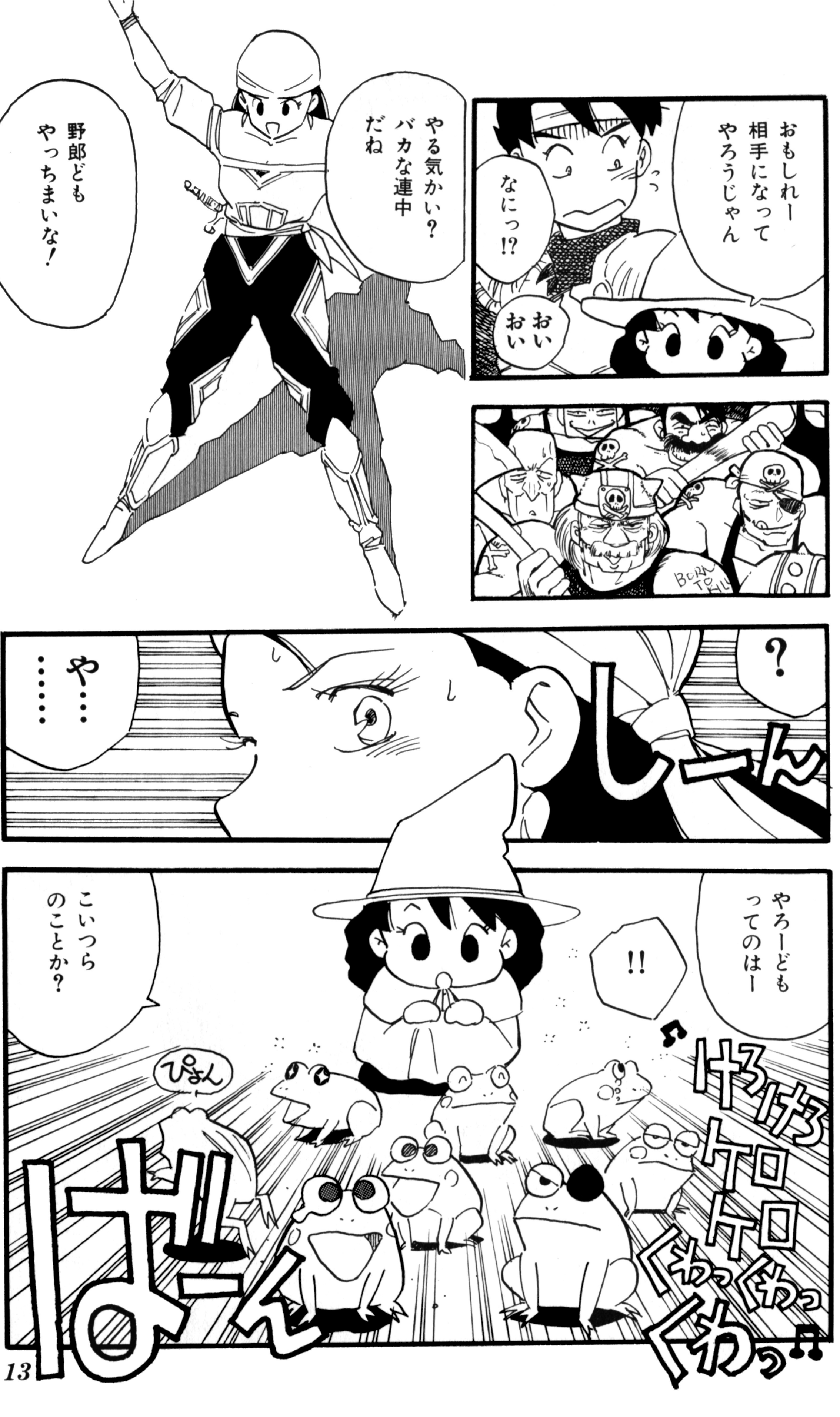
CARTOONED BY
海明寺 裕




△フリオニール

△マトーヤ

△マリア



おもしれー相手になってやろうじゃん
なにっ!?
おいおい
やる気かい? バカな連中だね
野郎どもやっちまいな!
BORN TO KILL
?
しーん
や……
……
やろーどもってのはー
!!
こいつらのことか?
けろけろ
ケロケロ
くわっくわっ
くわっ
ぴょん
ばーん


な
何だ!?
何をしたんだ!!
トード(かえる)の魔法を使ったんだよ
ケロケロ
ねーちゃんもかえるにしてやろーか?
わーバカよせっ!もったいない
何がもったいないんだ!なにが!!
ねーちゃんだよっ!!
ふ
ふざけるなっっ!!
おおっと



!!
君のよーな美しい女に
こんなぶっそーなものは…
さっ
えーと
何でも似合うぜちくしょー!!
めらめら
くどきながらケンカするなよ
↑マリアだ

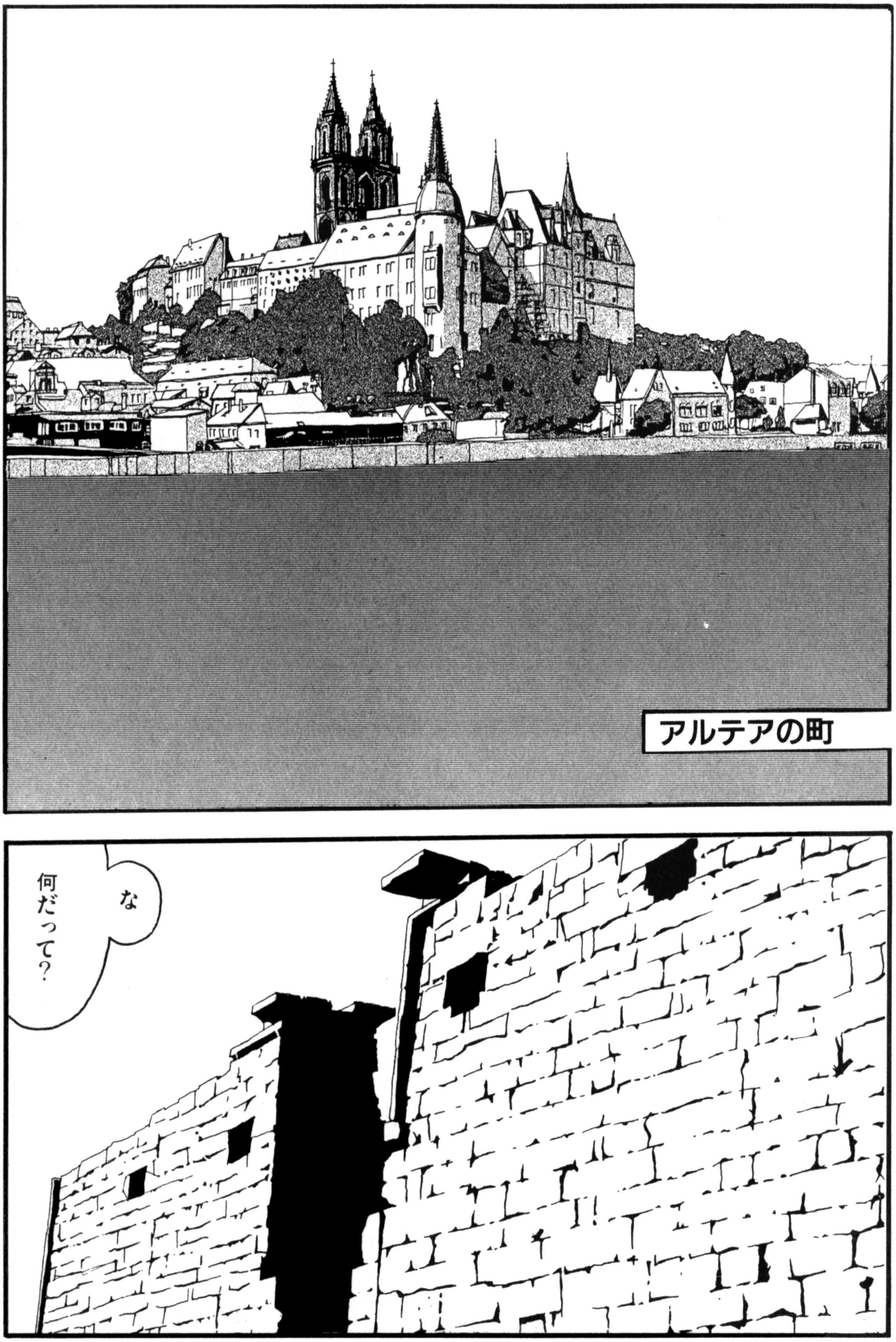

!!
どいて マトーヤ!
マリア!
二人とも かえるにして 食ってやるー
うわー んまそー
ま 待て!
話せば わかる!
話し合おうよ お互いオトナなんだし、ね?
おのれが売ったケンカだろーが!
ボケー!!


りゃあっ!!
ドッ
ま……
まいった!


ふうん じゃ
あんたたち フィン王国から 来たんだね?
ああ マトーヤは ミンディア出身 だけどね……
こーみえても オレたち 反乱軍の コマンドなんだ
王国と 言っても城は 皇帝のヤローに とられちまうし
王さまは 病気でさー
あたしたちも 命からがら 逃げる途中
ヒルダ王女に 助けてもらって 反乱軍に 志願したんだ


フィンで反乱軍が立ちあがったってウワサは本当だったんだねー
まーね
フリオニール
どう、あたしと取り引きしないかい？
取引(バーター)？
この船はあんたたちにあげようじゃないか
え!?
その代り
あたしも仲間に入れとくれよ

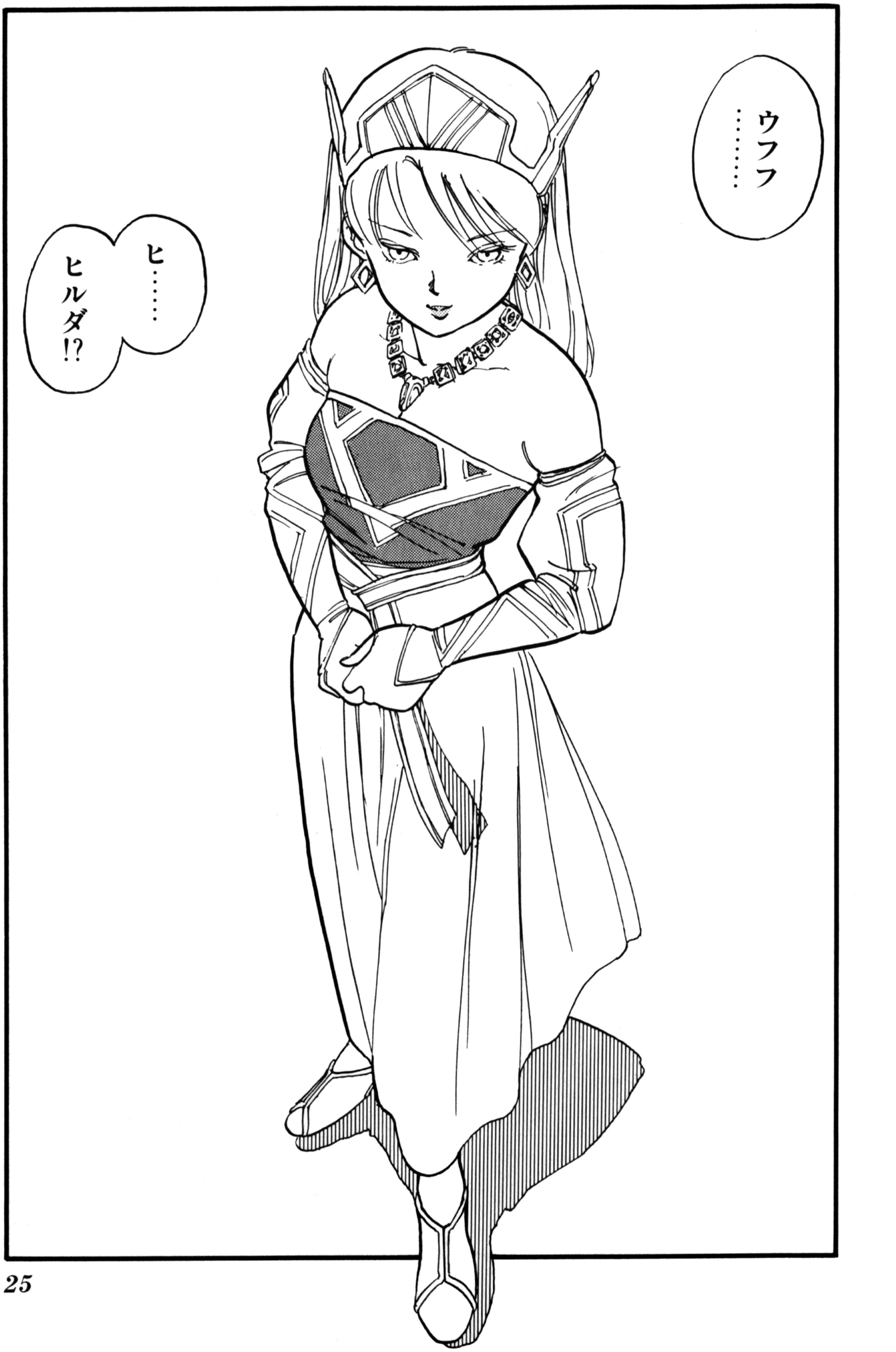

で
どうだった？ 陸の様子は
どうも こうも
大騒ぎ だぜー
？
何だか妙な ウワサが 流れてんだ
妙な ウワサ？
うん
確かな ことは わからない けど……
フィンの 王女は気が へんになったって ………


アルテアの町
な
何だって？

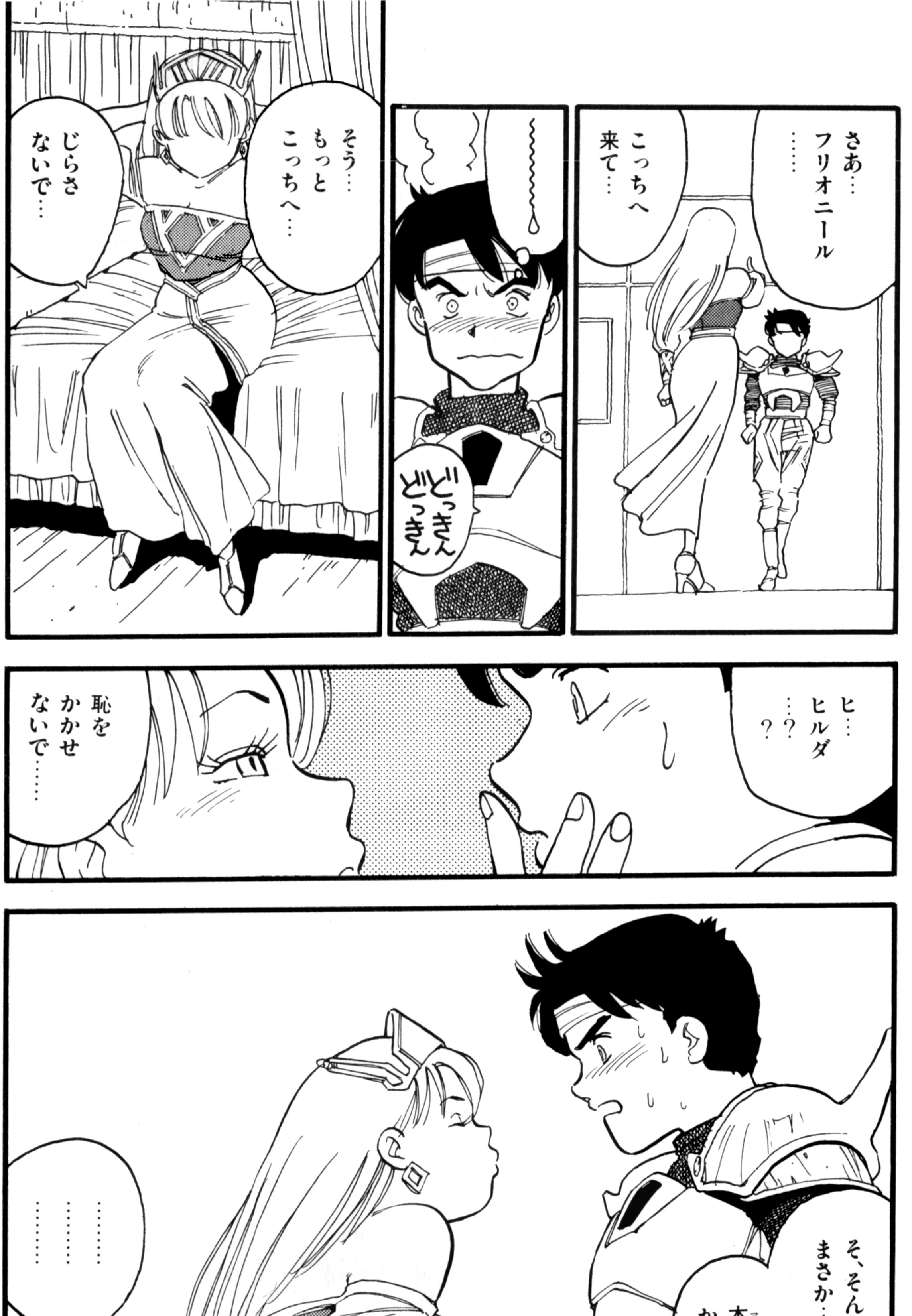

じゃ本当か?
ああ すっかり変になっちまってよー
どういうふうに?
何を話しかけても笑ってばかりなのさ
とにかく会ってみろや
………
反乱軍指揮官
ゴードン

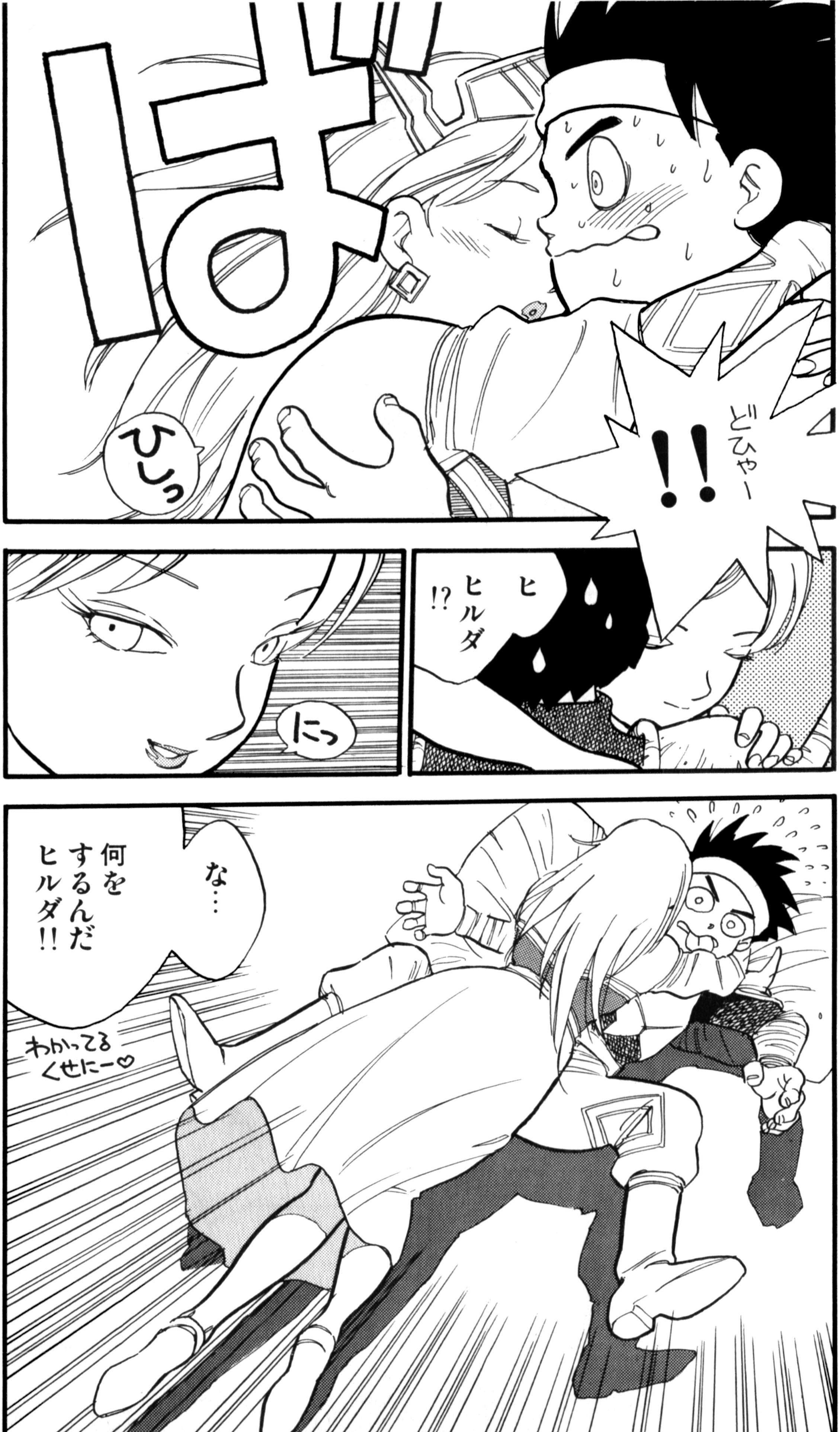

やあ
ゴードン
マリア
フリオニール
待ってたんだ!
ウワサを
聞いてね
ヒルダが
どうか
したって?
そう
なんだ
ヒルダは
すっかり
おかしくなって
しまった……
わたしには
どうすれば
いいのか……
とにかく
一度会って
話をして
くれないか?
ゴードン
さん……
わかった
様子を
みてこよー

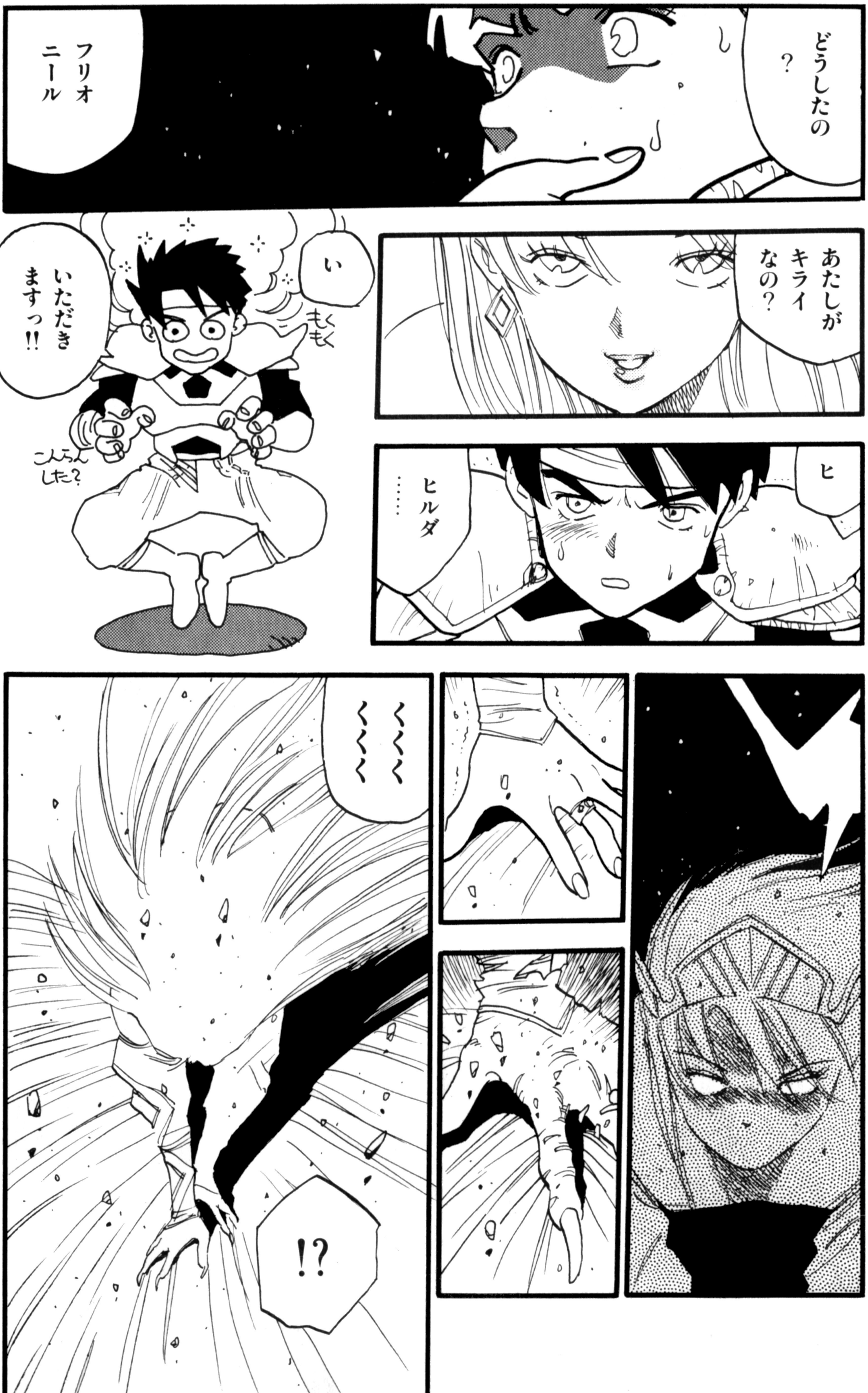

キィイ
……
ヒ……
ヒルダさん?
ウフフ

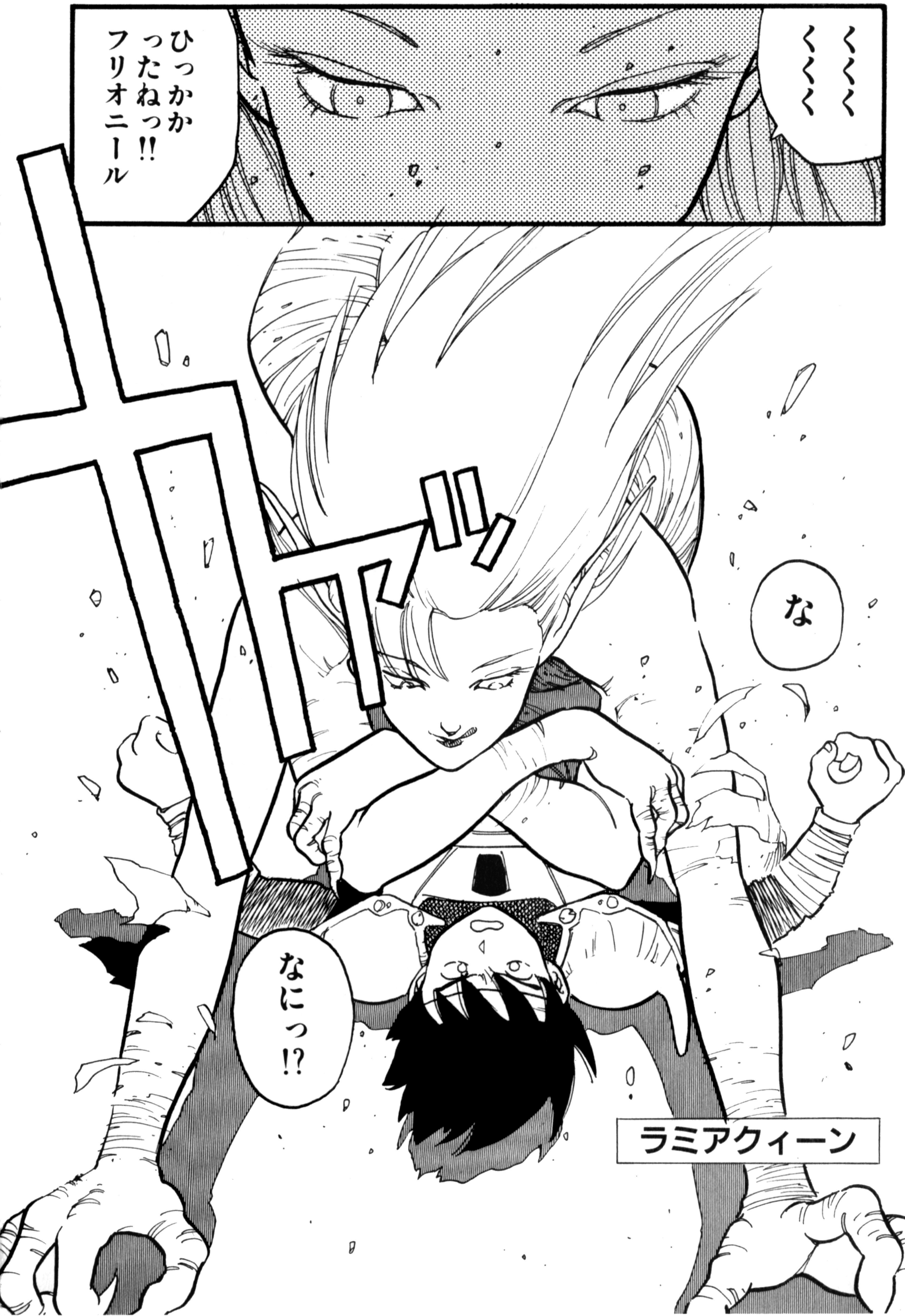

ウフフ………
ヒ………
ヒルダ!?


フリオニール
あなたにお話があるの……
え?
…………
…………
フリオニール
ドキドキ
ほんじゃあたしたちは退散するかな?
外にいるよ
あ…ああ
マリア?
うん
やっぱり変だな……
フリオニール
カチ


さあ…フリオニール……
こっちへ来て…
どっきんどっきん
そう…もっとこっちへ…
じらさないで…
ヒ…ヒルダ…??
恥をかかせないで……
そ、そんなまさか…
本気(マジ)かよー
………………


ぼ
ひしっ
!!
どひゃー
ヒ
ヒルダ!?
にっ
な…
何をするんだヒルダ!!
わかってるくせにー♡


どうしたの
？
フリオ
ニール
あたしが
キライ
なの？
ヒ
ヒルダ
……
い
いただき
ますっ!!
もくもく
こんらんした？
くくく
くくく
!?

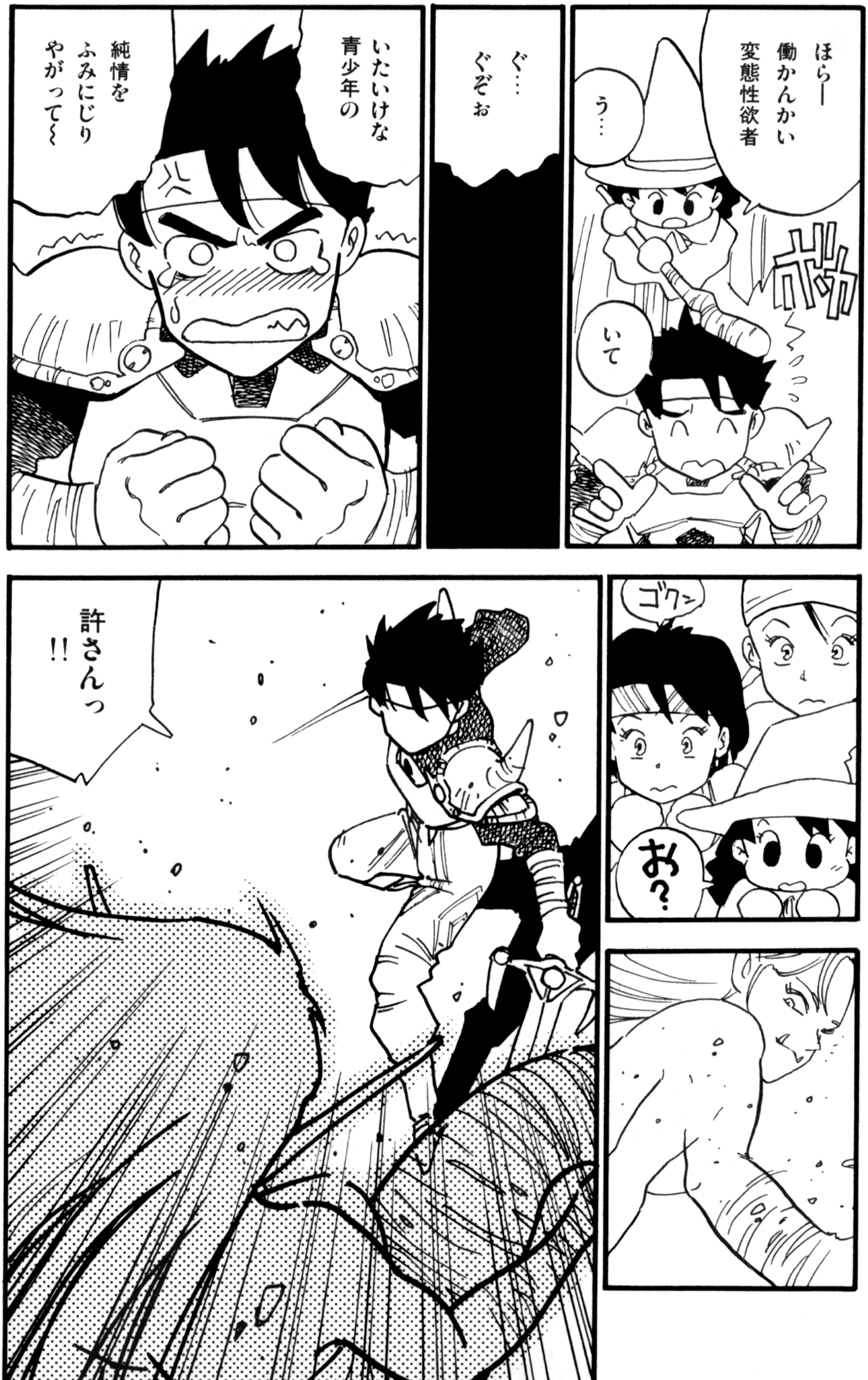

くくく
くくく
ひっかかったねっ!! フリオニール
な
なにっ!?
ラミアクィーン

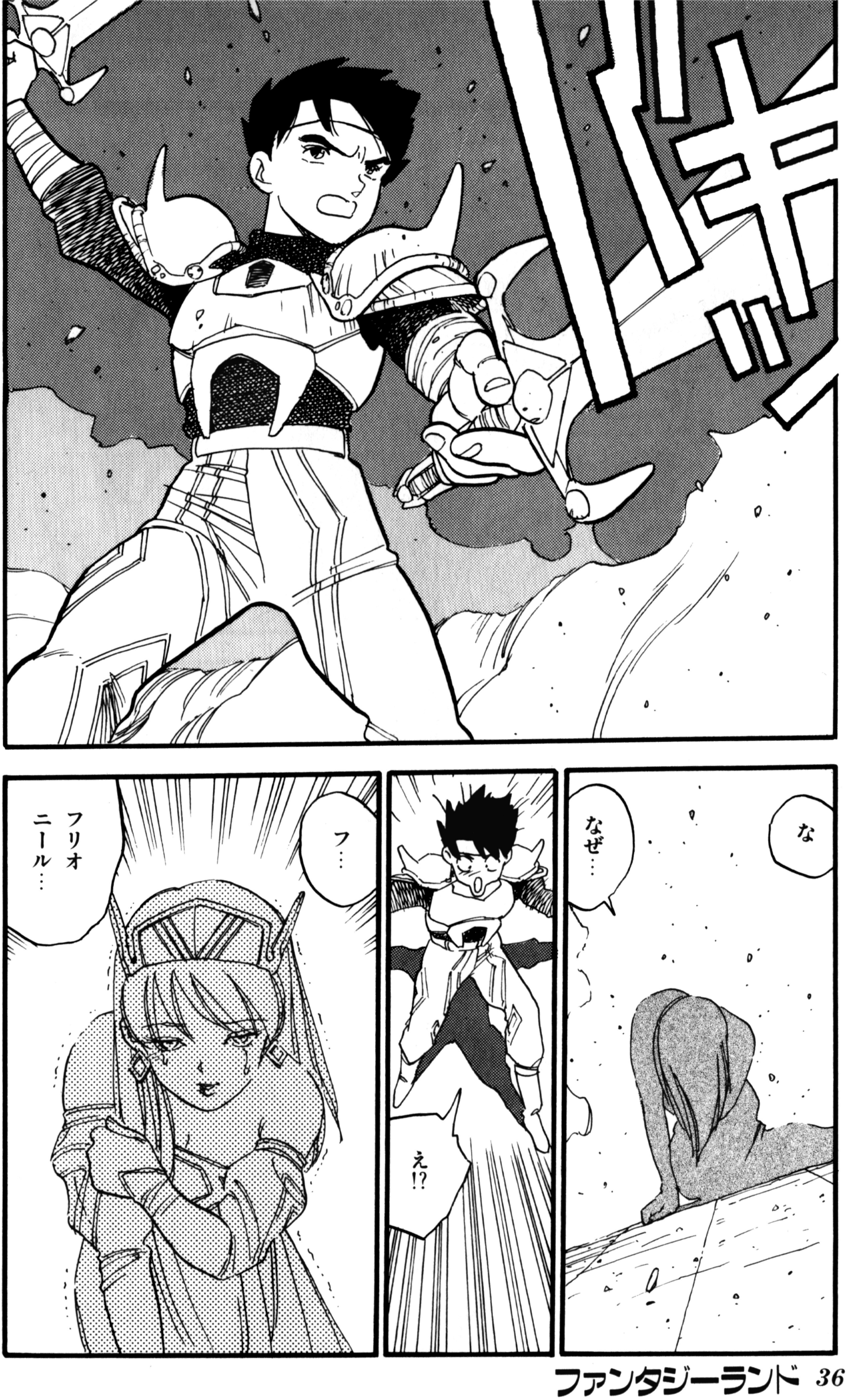

お、お前はっ!?
王女じゃねえな!?
ヒルダをどうしたんだよっ!?
くくく…本物の王女は今ごろ…
こんなふうに
八つ裂きだろうよ!!
はしっ
ぱっ
!!


キーン
そうはさせないよばけものっ!!
!?
下がんなフリオニール!
レイラ
ふんっだいたいこんなこったろーと思ったよ!
こんなばけもんの色じかけにかかりやがって……
んとーにすけべなやろーだなおまえは
マトーヤ!
女ならなんでもいーのか?
あのなー
あたいだろ
そこまで言っちゃかわいそーだよ
たいてーの男はすけべなんだし…
ある程度
マリアちゃん!!

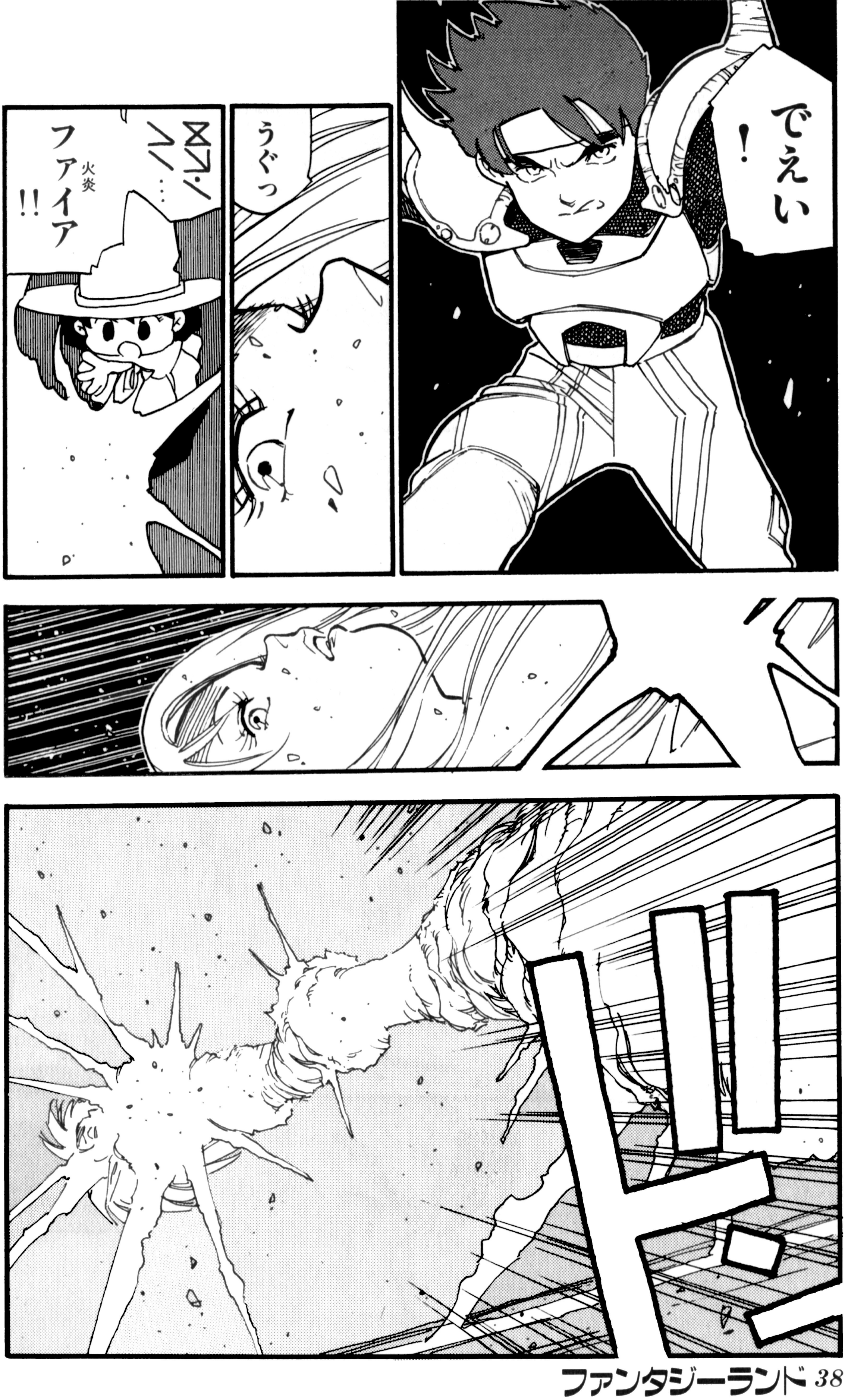

キミだけはわかってくれるんだねっ？
ええい近寄るなへんたいっ!!
一般論だよ一般論っ!!
大丈夫か？変態性欲者
!!


ドドーン
あまいっ!
!!
カッ
あぶない
レイラ!
ドガッ
ちっ!
マトーヤ
援護してっー
フリオニールは!?


ほらー
働かんかい
変態性欲者
う…
ボカ
いて
ぐ…
ぐぞぉ
いたいけな
青少年の
純情を
ふみにじり
やがって〜
ゴクン
お?
許さんっ!!


な
なぜ…
フ…
え!?
フリオ
ニール…

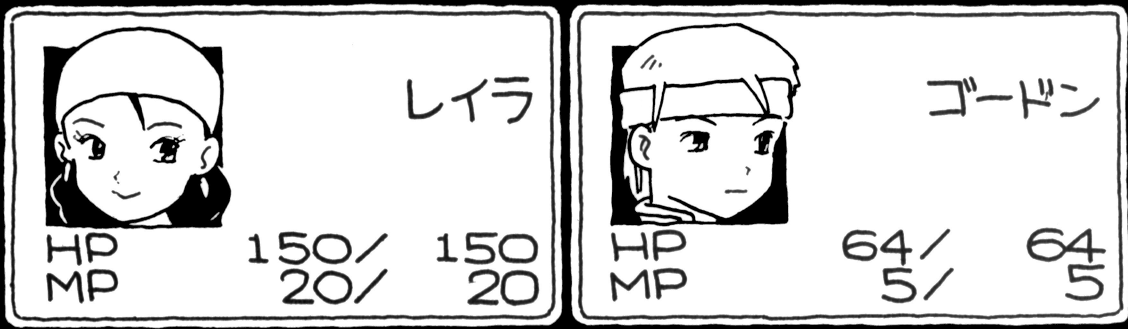

へっ二度も同じ手が通用すると思ってるのかよ!!
やーいアホー
ヒ…ヒルダー
ぽ
こんらんした?
通用してるみたいだぞ
ええいアホかあの男は!!
バスナ!
おしおき（パーティ・アタック）っ!
バキ
よ……
よーもおちょくってくれたのー




JGのファンタジー小説
『小説ウィザードリィ 隣り合わせの灰と青春』
ベニー松山
大好評発売中!!


ふう
ちくしょー きたねー手を 使いやがって
！
じぃー
や、やだなー そんな目で みるなよお
だ、だけど
本物の 王女は どこなの？
フリオ ニール！
マリア ！


大変ですっ!!
ゴードン!
?
どーした?
はっ
はっ
パラメキアで闘技会が開かれて…
そ、その賞品がなんと…
ヒルダなのだそうです!!
!?
王女が……
賞品!?


レイラ
HP 150/ 150
MP 20/ 20
ゴードン
HP 64/ 64
MP 5/ 5


ドドドドドドドドド
りゃあっ!!
急げチョコボ!!
ピー
ドドッ


闘技場
どうする？
正面からつっこむか!?
ひとまず客のフリして潜入しようよ
OK
……

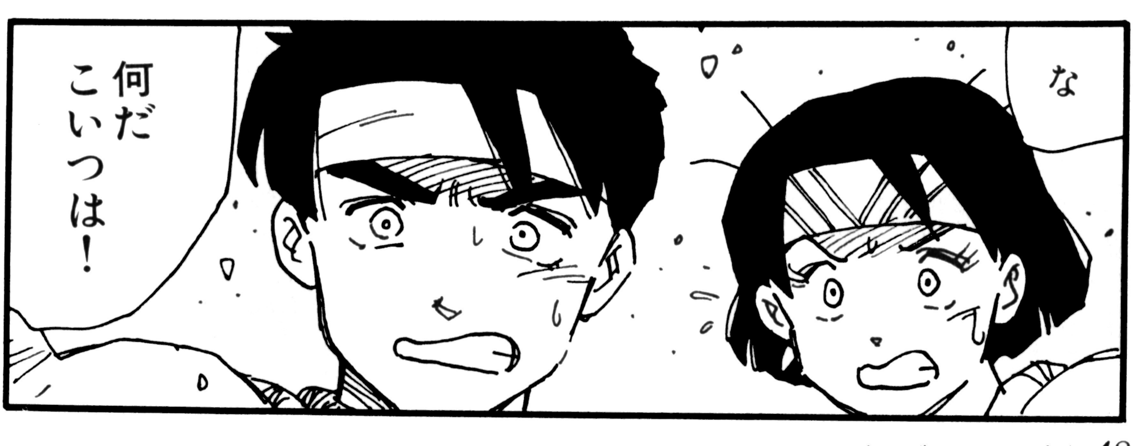

くくく　くくく…
そうか…
連中が来たか
ダークナイト


歓迎の仕度は出来たか？ボーゲン
は 万全に
王女は？
地下牢です
よし
見物させてもらおうか
反乱軍の様子はどうだ？
は
王女がいないせいか大人しいもので
ふむ
この上あの連中を排除すれば……
反乱軍などクズの集団にすぎぬ
ゴードンまでついて来たとは…
ますます好都合だ


フィン城の指揮官はゴートスだな
は
反乱軍の動きから目を離させるな
やけくそにならんとも限らん
まあ、やがてあの程度の城など問題でなくなる
その時は
お前にくれてやろう
ははっ
ねえ
変だと思わない？
闘技会とか言ったけど、人の声がしないし…
ああ
王女をエサにしたワナか？
でもよー
あたしらってそんな重要人物なのか？


!!
ははは
ははは
ようこそ
諸君
!!


!!
ベビーモス


な
何だこいつは!


さあ戦うのだ！
勝者にはフィン王女ヒルダを与えよう！
く…くそぉ
やはりワナか!!
やっぱ重要人物だったのか！
どうした？王女を取り返しに来たんじゃないのかね？
ば
ばーろー!!
そいつが勝ったら王女はどーすんだ!!
それならそれで、使い道はある
見たまえ
彼はおなかをすかせているのだよ


こりゃやるしかないぞ
フリオニール
ああ
王女のことは、こいつを倒してからだ
さあ、がんばってこいよー
がんばってこいよぢゃねーーーい!!
ま、魔法はどうした!?
マトーヤ!!


うーん
トードかなー ファイアかなー どっちかなー
どっちでも いーから 早くしろっ!!
うーん しかし…
カエルにして 食うのと あのまま食うのは えらい違いだぞ
あほか おのれはー
ええい ミニマム!!
あ、ダメ!! 量が減るっ!!


ゴードン!
こいつは我々が片付ける!!
君はヒルダを!!
わかったフリオニール!!
!
あたしも一緒に行くよゴードン
!!
ギロ


ケリをつけるぞマトーヤ!!
う
とりあえず倒してから…
料理法を考えよー
!!
サンダー(雷撃)!!


フリオニール!
レイラ
ゴードンは王女を連れて脱出したよ
敵は?
逃げたらしいね残りはザコばかりさ
よし
いったんアジトへもどろう
どうだった?
ダメだ誰もいないよ…


変だな……
何かあったのかしら？
？マトーヤ？
し…
死んでしもたのだ!!
!!
あたしらがベヒちゃんを食べてるあいだに……
皇帝の軍がやって来て
一人残らず
食ったのはおまえだけだって〃
くわれてしもたのだっ!!
おいしい辛(カラ)ミソ仕立てでっ!!
てってってっ
おいおい
ちゃ
ちゃいまんがなダンナ!!
ぬ

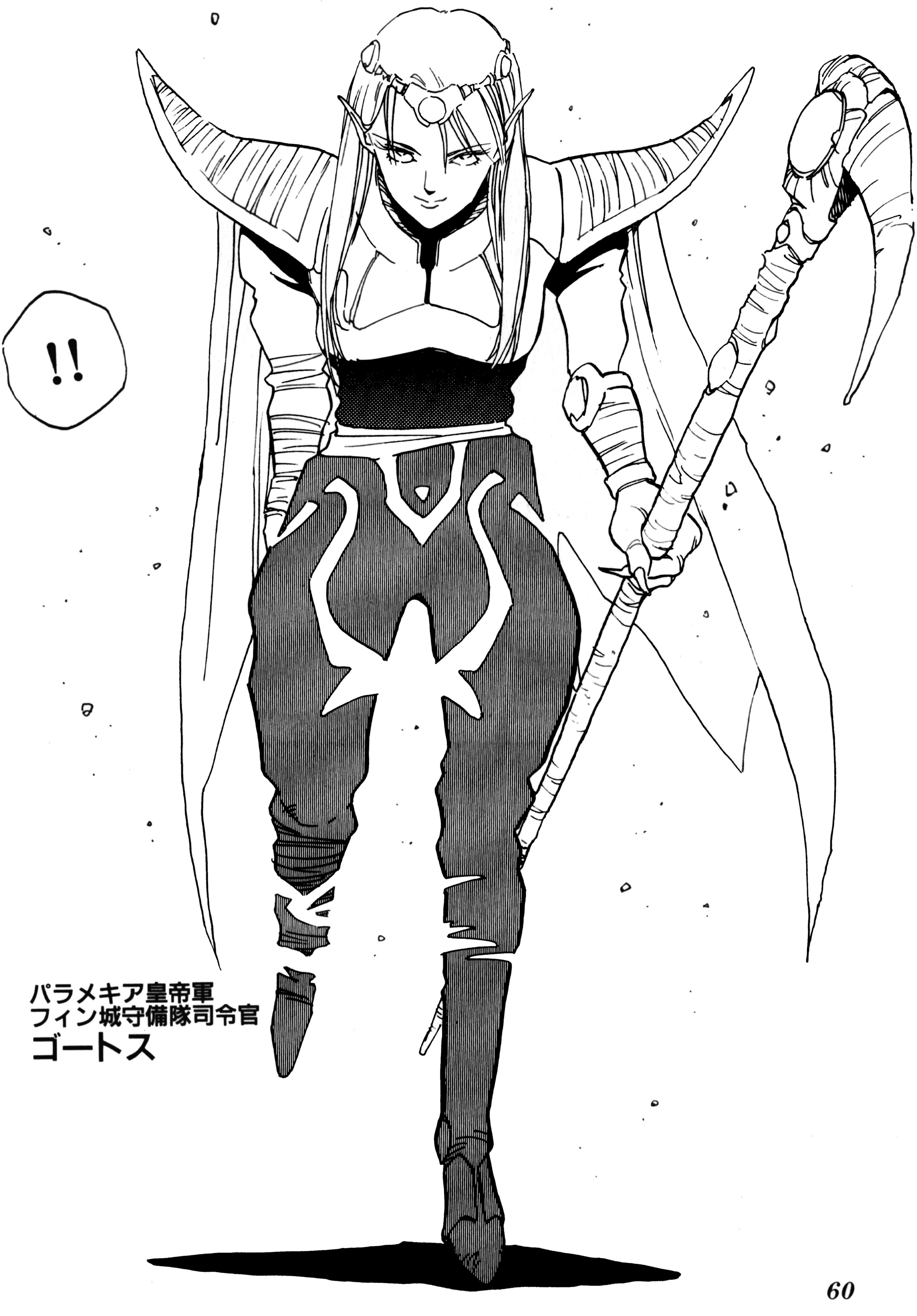

なーんだ
そーかー
ガテアの
西に…
まずは
フィン城を
奪回するって
ハラでしょう
いよいよ
決起する時
が来たか！
よし
あたしたち
も行こう!!
キャンプ


はぁい♡
フリオニール!!
!
ヒ…
ヒルダ!!
ヒルダ王女（ホンモノ）



…だいたい現在の戦況はこうなってる
正面の門はすでに突破した
敵の混乱をついて、我々は主力部隊と交戦する
そのスキに君たちは城に潜入し敵の司令官を倒してほしい
ボソボソ
聞いたわよフリちゃん
あたしって…
そんなにブサイクかなー
い、いやそれはね〜
あたしに化けたバケモノにゆうわくされたんだって?
ま……
もくもく
!!
マジメに聞かんかーいっ!!
ぐき

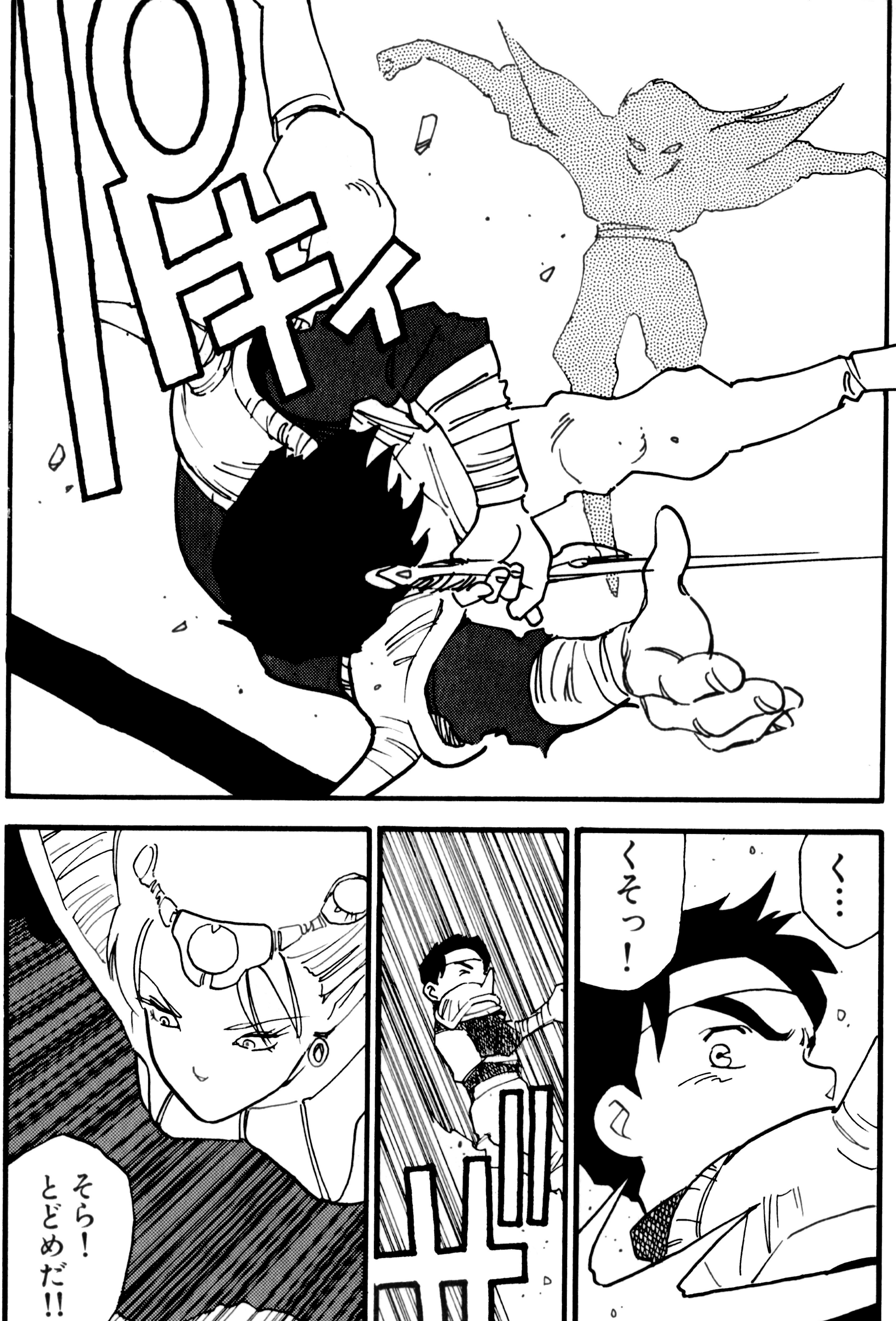

急げ！この上が王室だ！
おー 宝箱がいっぱいあるぞー
あとにしろ！あとに！



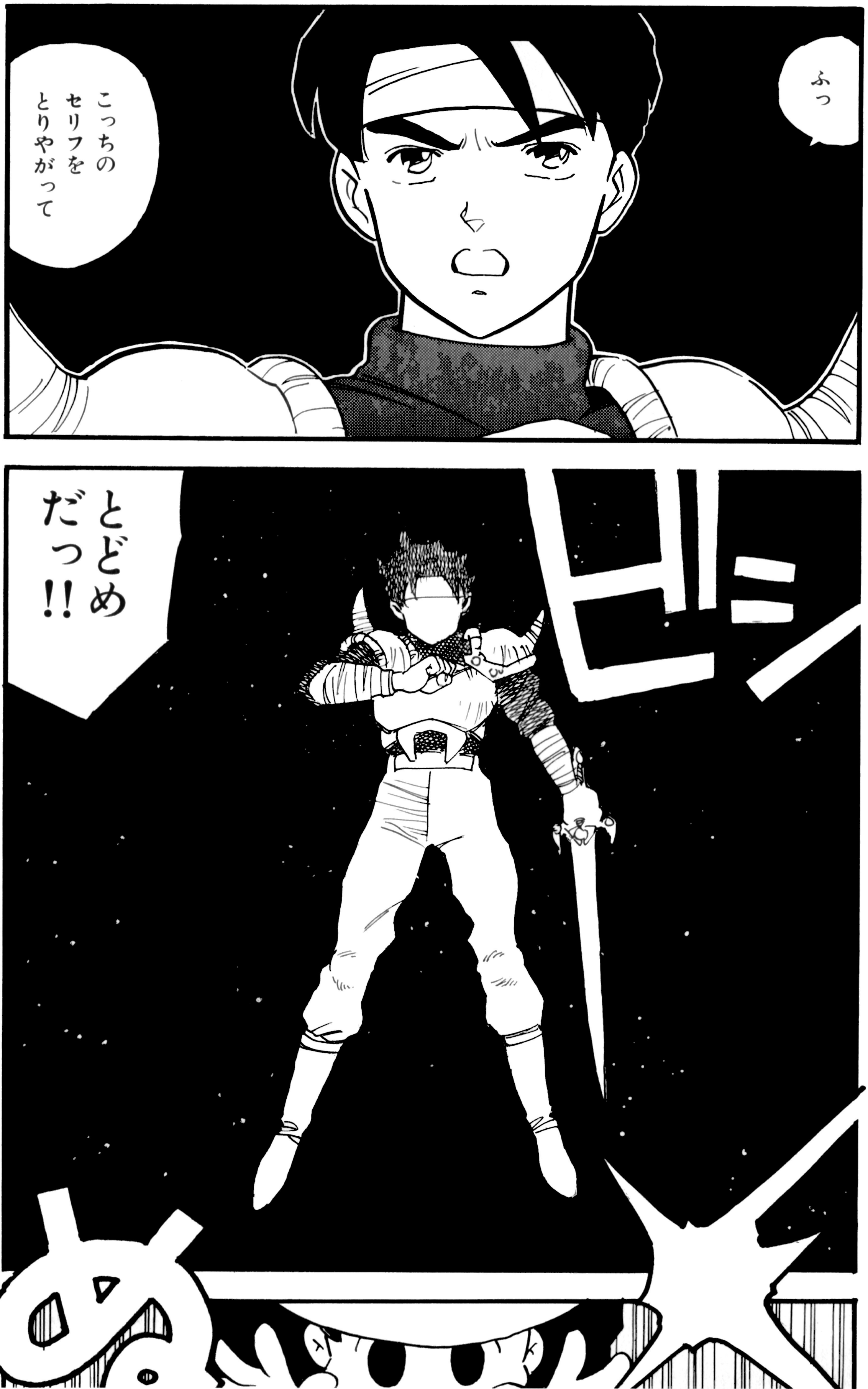

パラメキア皇帝軍
フィン城守備隊司令官
**ゴートス**


ついに来たな 反乱軍の こわっぱども
お… お前が
ゴートス かっ!?
マリー
ふふふ いかにも


ヘイスト(加速)!!
ヒュウン
!!
あぶねー
キン
そらどうした!?
これがお前たちの実力か!?

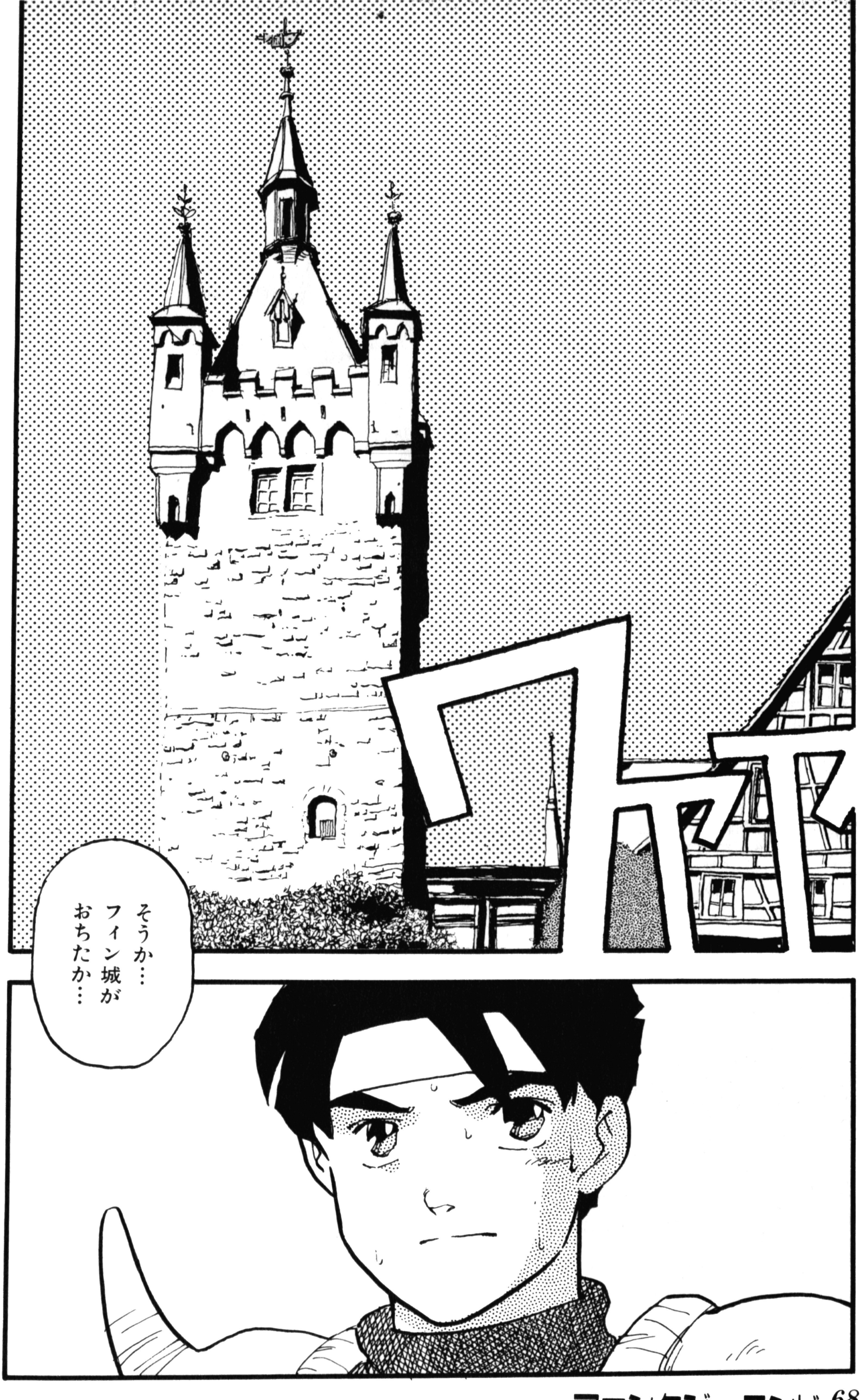

パキィ
く…
くそっ!
そら! とどめだ!!


させるかっ!!
クラウダ!!
(毒雲)
ぼ
ウガァ!!


ふっ
こっちのセリフをとりやがって
とどめだっ!!


ミミマム(こびと)!!


ぼ
どひぇー
(ミニマム後▶)


そうか…
フィン城が
おちたか…


◆ゴートスは倒した!しかし、フリオニール達の闘いは終ることなく、続く……
くくく…今の内にうかれているがよい
フリオニール
本当の戦いはこれから始まるのだからな…
End



おまけのぺえじだよん
みなさん こんにちわ。ボクは さすらいのまんが屋 「シルバーホークA」くん（仮名）どえす
仕事中はよくBGMにCDをかける
ズンズン♪
カリカリ
「ガンダム」のマンガの時は「ガンダム」のサントラだった
とーぜん、今回（FFII）は
ゲーム音楽だ!!
Konami GAME MUSIC vol.1
FAMICOM MUSIC 2
namcot GAME À LA MODE
namco BEST HIT PARADE
this is namco
とくにこれがすき♡
RRR RRR
へーい
カリカリ
ゲンコーできたー？
ピコピコ ピー ピシュ ピシュ ピシュ
あー ゲームなんかやって!! ゲンコーはっ!?
ひえ〜 ちがうよー


ぐぞー
世の中には ミョーなCDが あるもので
カリカリ
パチンコの BGMなんてのも ある!!
ザ・パチンコミュージック フロム・三共
THE PACHINKO MUSIC FROM SANKYO
FEVER
SANKYO
キングレコード
ホントだよ
RRR RRR
へーい
ゲンコー できたァ?
プイン プイン
あー パチンコなんか やってて!! ゲンコーはっ!?
ぐ、ぐっすん
いつでも 誤解される 不幸なヤツである
カリカリ
とほほ
ううっ いいんだい きっと…
きっと 神サマは わかってくれる♡
カリカリ
ムラムラ
もしもし?
あ、これ?
やだなー BGMですよ BGM!!
ピシュン ピシュン
ファミコン

JICC PRESENTS

ファミコン必勝本編集部



CARTOON

海明寺　裕



EDITOR

ふりはた　まさこ

FINAL FANTASY II

© SQUARE



ASSISTANT ①

しげまつくん



ASSISTANT Ⅱ

ぐんぱんせんせえ


キャン 霊雷球(ウィルオーウィスプ)は頼むぞ
わ、分ってるけど――フィル……
私に解呪(ディスペル)しろとでも云うのか それともマナさんあなたがやってくれるかな?
こ、戸外での攻撃呪文は――
非常時は許可されている!
こーなると止めてもムダだ……




ウィザードリィ外伝
Wizardry®
召換の書
俺達は守護者として、
魂が不滅である限り、
よみがえる!!
石垣環


召喚の呪文
そのような危険なものを何故？
危険——？確かに——
されど我ら寺院の者呪文の探究も仕事の一つ
ヤマの国タカマの村の一族は——
古来より召喚の能力を有していたために
かの呪文の探求の場として我ら寺院の許可を得ていたのです
将軍の異形のものに対する警戒心御理解致しております
——が我らの役割にも御理解のほどを

◆イズモにおけるギルの反乱収拾後、イズモの残党はホウライ統一に乗り出し……








＊ 現時点において、ルーシィディティは新生「ホウライ」の女皇として祭上げられている。そのため反対勢力と交戦中である。


将ー
しょーぐん さまァ……
火を放った・・・ 少しはできる 奴らしいな
寄せつけねば それで良い ――


汝一人でも充分なはずだが――どうした？
うっ……
この時空域・・・例の奴がまだ生存しているはず――
二度に渡り我らが宿願を妨害した彼奴が察知せぬと思うか？
あ……
この娘を完全に我らがものにするに今しばしの時間(とき)が必要
それに彼奴の気配は感ぜぬ来たのは雑魚同然――
――
続く眷属がために――
この世界に帰還するためにも回廊を築き上げねば
――
了解した




＊ 寺院や城塞は外部からの攻撃による被害を最小限に抑えるために、外壁には障壁（シード）効果を持たせている。また同時に魍魎や転移（マロール）による直接の侵入を妨ぐため結界も張り回らしている。


村を囲んでいた結界を破った化物の一部が外界に出没せねば
異変には気付かなかったな
私は——サクヤ様に転移していただいて何とか……
お願いしますサクヤ様を——
一族の生き残りが私一人なんて——
解っている
変異の原因追求及び住人の救出が私達の任務だ
もー少し柔い云い方できねーのかなァ……
何か云ったかキャン?
なーんも

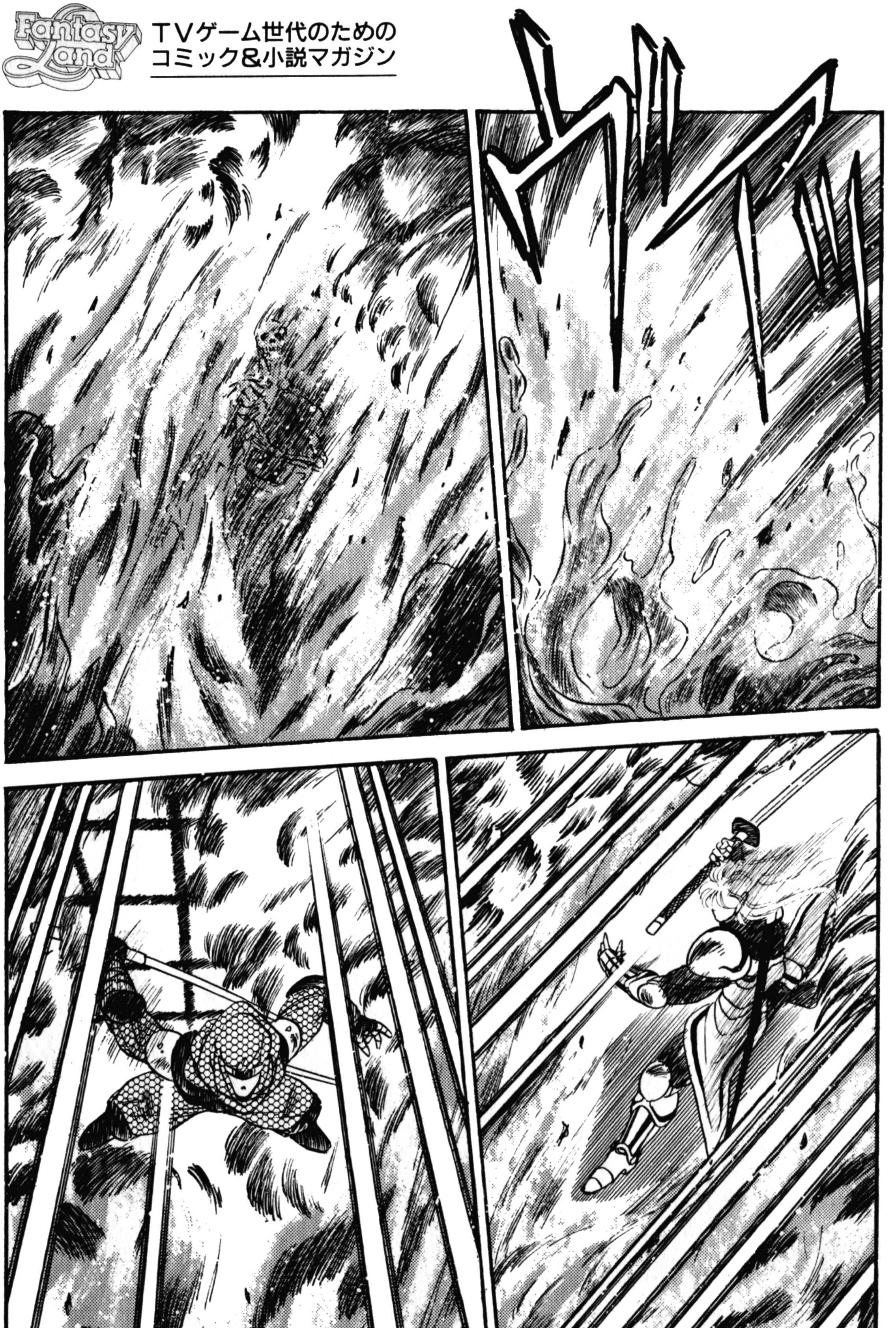

しかしこれで将軍様が我ら二人をこの地に遣わした理由が解ったな
あん?
鈍いな
私も・お主も・経験者だからだ
そっかあ
他の皆は前戦に行ってるし――
留守居役の我ら以外適任者はおるまい
そうだホウライ統一間近の現在――女皇様と将軍様は迂闊には動けぬ
け、経験者って?
ああ――異形のものとの
戦闘け――


溶腐体(スライム)!
溶解人(ワーアメーバ)も!
ん!
あ、あれは・・・……
・・・あれがこの村を──!

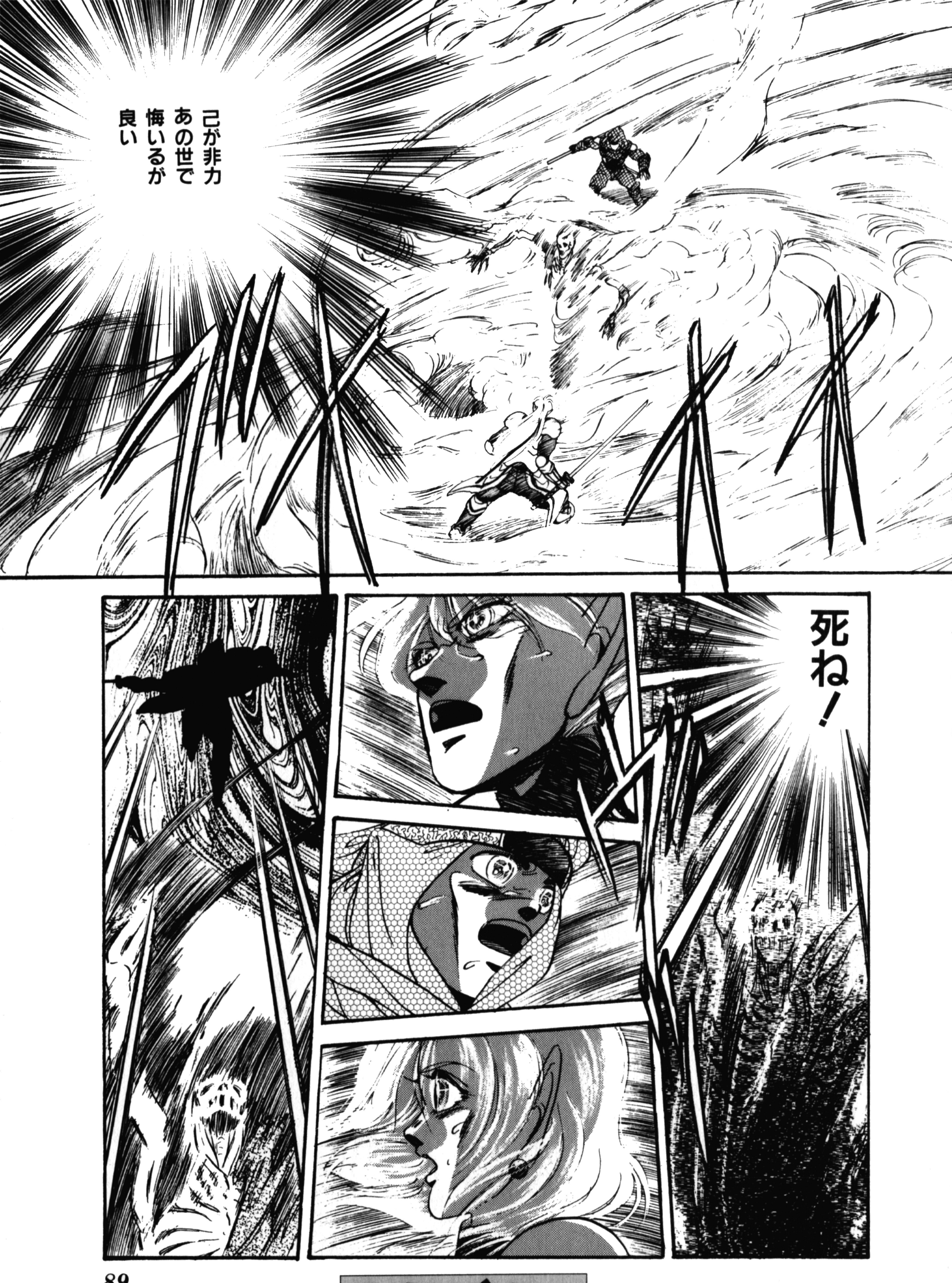



＊ マナは司教・属性善。フィルは侍・属性善。キャンは忍者・属性中立。


マナさん
雑魚は
頼むよ
ハ、ハイ
いくぞ！
猛炎！
大炎！




思い出したわ
かの時の
雑魚どもか
――
腕を上げたな……
だが一撃で
斃せぬは
まだまだ
未熟――

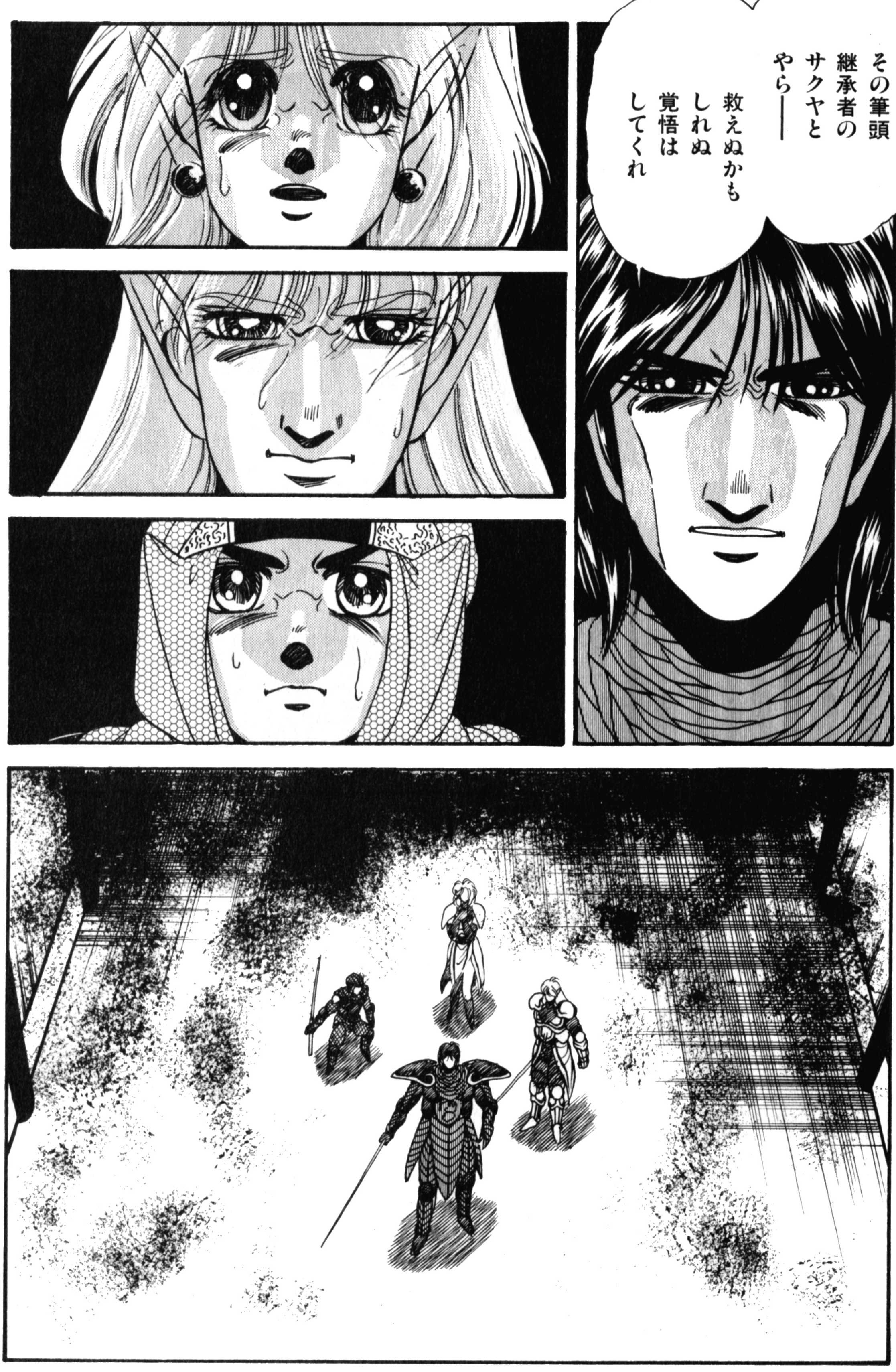

己が非力
あの世で
悔いるが
良い
死ね!


シ……
ショウ様


き、貴様 また… …しても 我ら…の 邪……
き、貴様が ——我らの ——で……
それが 守護者(ガーディアンズ)たる者の 役目だから な……
あっ……
間に合った な——
ど、どうして ——


キャッ
――気になって
そろそろ障壁(シールド)も限界だ
急いだ方が良い
し、しかしショウ様
召喚の書――か
こ、この方は――?
将軍様
ど、どうして
ショウ様 ホウライの将軍様
大僧正はこの地で探求している呪文で
結界を破る程の魑魅(すだま)が出現するはずがないと云う
ではその呪文以外であ奴らをこちら側に呼び出せるものは――


召喚の書以外存在しないことになる
まあな——
それにしても腕を上げたなフィルキャン
そ、それでは我らの身を案じて——
は、はっありがたきお言葉——
生真面目は変らぬなフィルは——
この部屋が最後か——
ハ、ハイ
マナと云ったな——
ハ、ハイ


その筆頭継承者のサクヤとやら——
救えぬかもしれぬ覚悟はしてくれ


わ、解り……
……ました
……
すまん
キャッ
一刻の猶予もならぬ——
行くぞ




クッ！


流石だな
選ばれし守護者(ガーディアンズ)が一人――
飽くまでも我らが宿願妨げるつもりか
スーーッ
サ、サクヤ様
完全に憑依(ひょうい)されたか――


くっ……
う………
不覚――
一瞬の幻影に
惑わされる
とは……
サクヤ様
如何なされた
のです!
マナです
妹のマナ
です
サクヤ
――?
確かに以前は
そのように
呼ばれていた
かもしれぬ
――が
現在は我らの
走狗に過ぎぬ


無駄だ マナ――
で、でも――
それより 二人の 治療を頼む――
あっ……
ご、ごめん なさい――


何度同じことを繰り返せば気がすむ
この地は元我らが世界――
我らが手に戻すためならば幾度でも――
その結果人の心を弄ぶ――
仮令以前この世界を支配していた超越者かもしれぬが
現在は人の世界だ貴様ら異形の者の入る余地など無いと知れ!
愚かなり――
守護者と云っても所詮人の身を纏いし者――


我とは・その・人に・よって
産み出されし
存在なのだ
気付かぬ
とはな
―

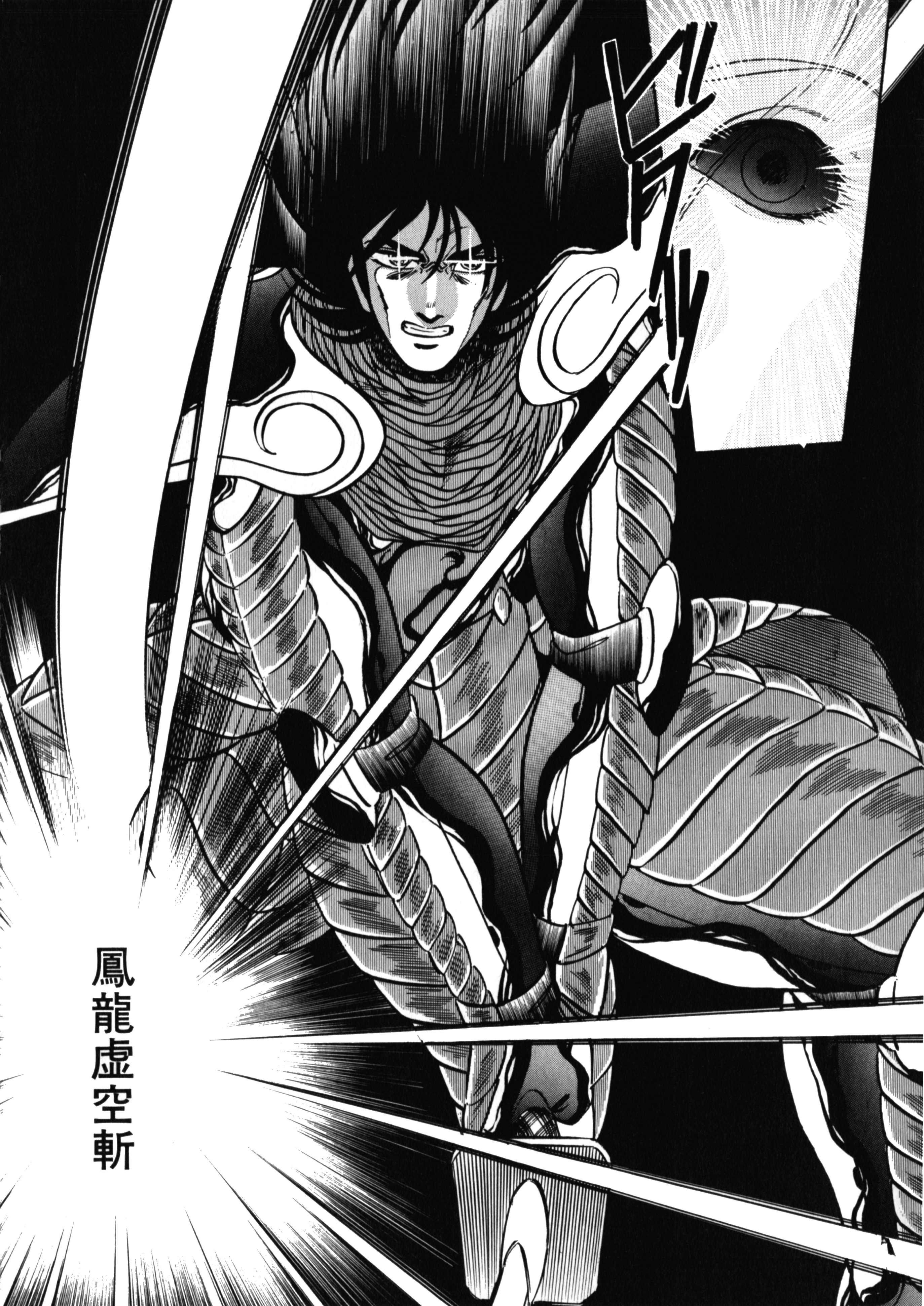

人の欲望
嫉妬・虚妄
蒙昧・怨嗟
厭悪——
心の澱が
集いたる
ものが
我なのだ
皆下れ
シ、ショウ様
下れ！
命令だ

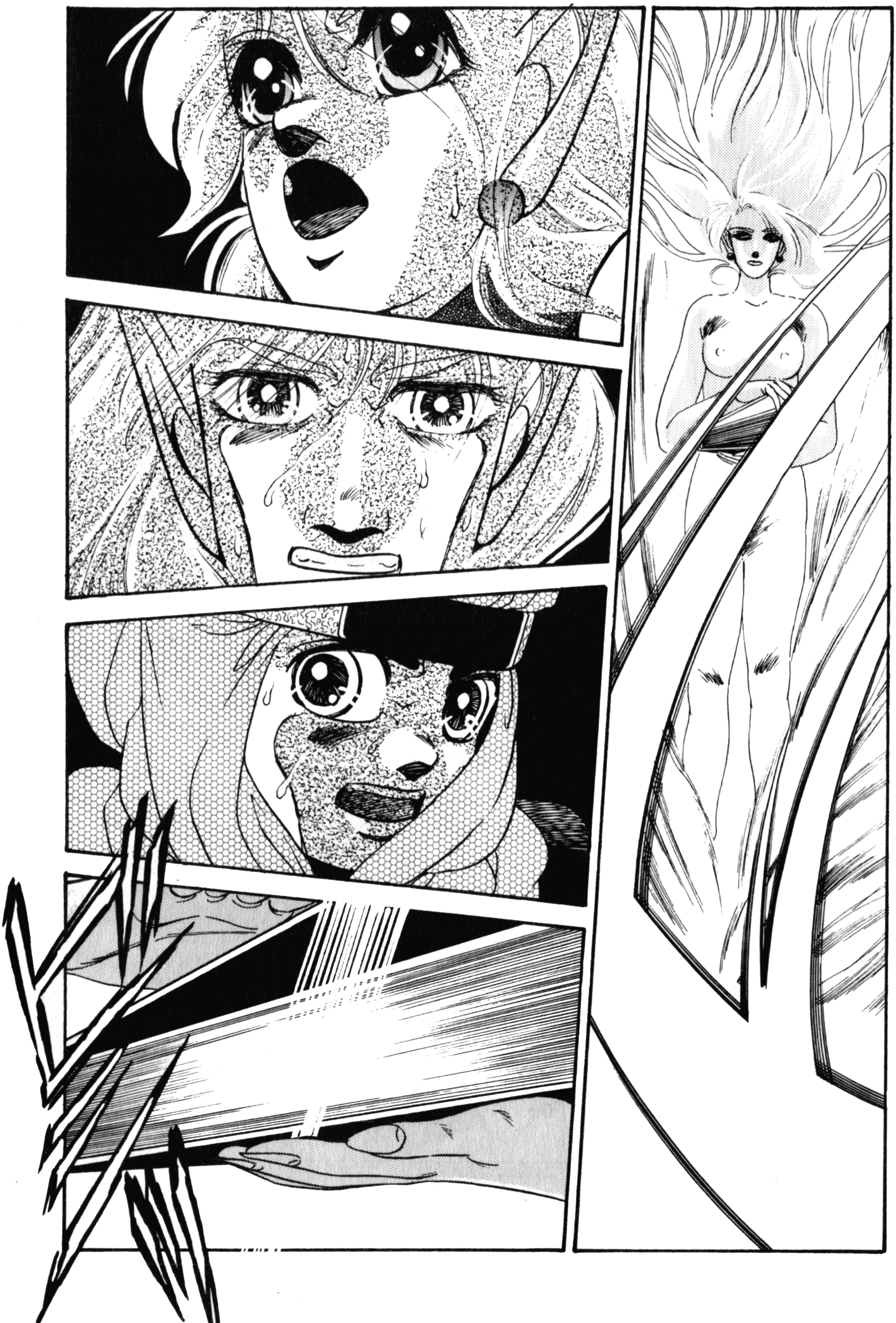

ギルは己が野望のため自分自身をこの世界を我らに委ねんとした
彼奴の心はまさに澱の集合体であったからだ――
貴様に敗れ――
貴様に対する復讐心で澱自体が増大しており――
あれはあれで非常に扱い易い部類の人であった
異空を彷徨する彼奴を拾い上げたのも
我々にとってもまだまだ利用価値が高かったからだ


しかし彼奴(ギル)の暴走は我らの予想すらも越えた
誤算であった—
そこで我らは新(あらた)な適格者を求め——
その娘(むすめ)と云うわけか—
その通りだが——
貴様のように守護者(ガーディアンズ)として覚醒していない者と云う条件を満たす必要となった——
ただ——貴様同様この娘も
澱が希薄なためにかなり手間取りはしたがな—
回廊(みち)は完成した—


分った——
姉さん！やめて!!
召喚の書それ自体が——
一族の能力そのような禍々しいことに——
・・・あちらに繋がる回廊——
そして彼女は異界の扉の鍵にあたる——
繰られているだけ——


ならば――
姉さん!


鳳龍虚空斬




バ、バカな——
ドサッ
我だけ葬り法る……か
無……駄な……こ……
人が……存……在……限……り……
我……
不……滅……
召喚呪——



呪縛が解けていないのか——
道が——開いて行く……
やむ得ぬ——
ま、待って
何故止めるこのままでは——
姉さ……ん


マ……ナ……
殺……し
なさ……
い……
私……を
掟で……
す……
この……
ような
……
道……
あ…ては
いけ……
今日
……ら
あなた……
継……
承者……
で……

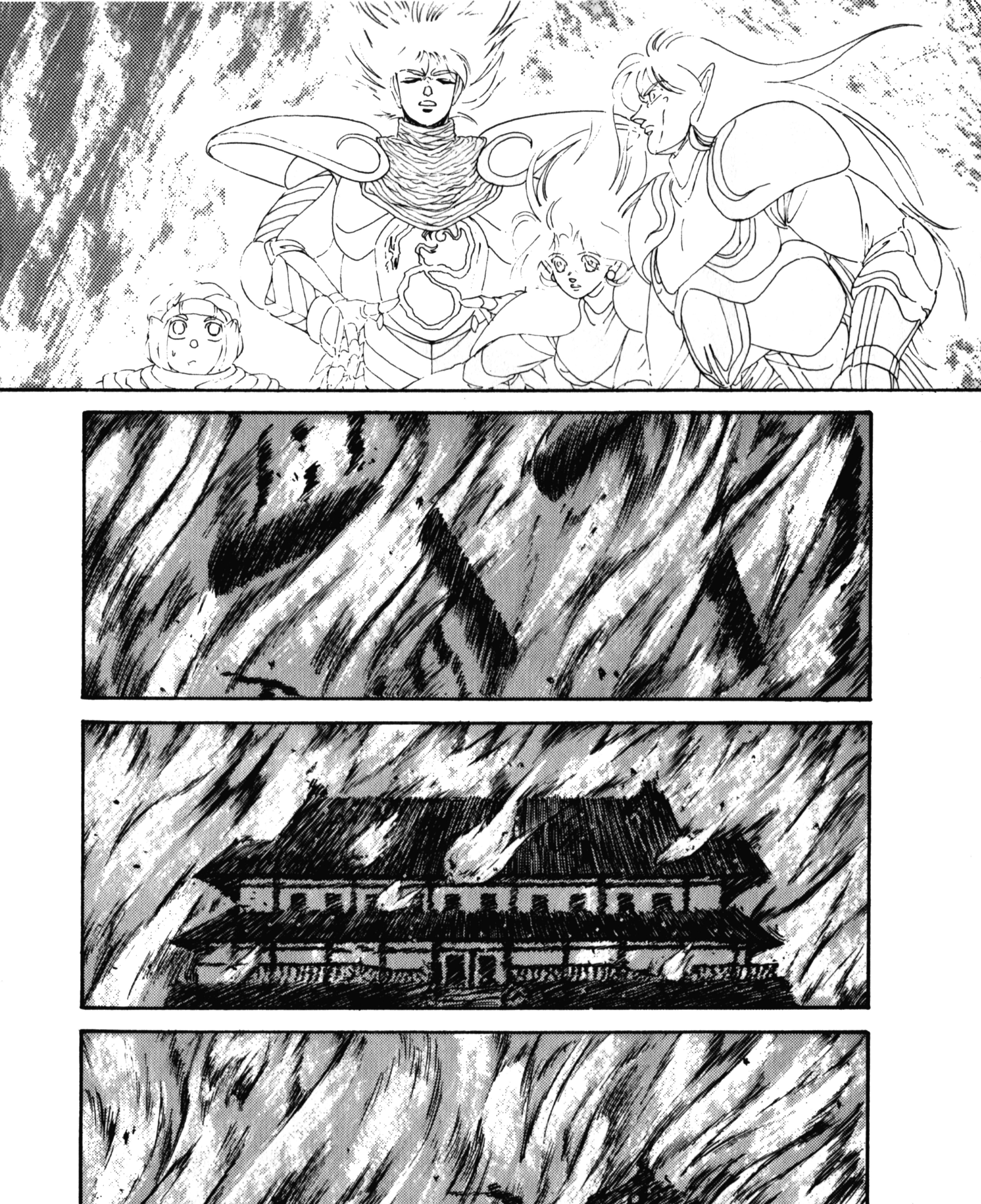

フィルさん
刀を――
え……
シ、ショウ様――
早く……
保……ち
ませ……






いかん！
フィル！
彼女を!!
い！
脱出する
ーー私
一人きり
ーー
荷がーー
ーー重過ぎ
ますーー


グッ
行くぞ！愚図愚図するな
もっと優しくしてやれよォ……
まったく不器用な性格だよ
来い！
よし転移するぞ！






作画スタッフ；富所和子，坂本かずみ，山口夏実，山口芳宣，畑野幸子，久保田ゆかり，みさき　のあ，石垣　環

◆姉サクヤを葬ったマナの傷は深い！しかし生きている限り魂が不滅の限り闘うのだ…




Wizardry Another Story vol. 4

"THE BOOK OF SUMMON" END


いつの時代か知らないが
ありふれた中世風の世界に
ありふれたモンスターがあらわれ
ありふれた冒険が始まったという……
ゲームを知りつくした男がRPGへの愛を込めて贈る……
ありがちRPGマンガ
鈴木みそ

◆ありふれた世界のありふれた冒険、今、ありふれないストーリーのはじまり、はじまり




いや その写真は ワシが昔 娘を写した もんじゃ
あんたの シュミ かい
ああ… 姫よ…
今ごろは どうなって おるのか ……
へんな かっこ させられ ては おるまいか
このオヤジ アブネー な……
こんなのが 王様だって ……
とにかく 急いだ方が いいわね
ほんじゃ さっそく いくか
おーー


ここら辺で
パーティーのメンバーを
紹介しておこう
正義を信じ戦う
正直バカの勇者
（名前は自分の名を
つけるとよいよい）
余談だが本当は
こういう同人誌風
の勇者でいく
つもりであったが
タッチがめんどう
なのでやめた
のだった
戦士
ありがちな
つっこみキャラクター
紅一点
魔法使い
実は勇者のこと
が好き
という設定が
一般的であろう


そしてこういうマンガには欠かせないキザでクールなキャラクター忍者
ふっ
……は個人的に好きでないのでパーティーからはずす
あれー
ほんでもって3日後
おっかしいなぁ——
村人の話によるとこの辺に王女が幽閉されてる洞窟があるはずなんだけど……
でもあいつら村から外へ出ないクセしていろんなこと知ってんのな
そゆこと言わない


あっ
見つけたか？
うんこ出る
してこいよ
さっさと!!
うんこつくといけないから武器と防具持っててね
ああ
ガサ
ガサ…
見るなよ
誰が見るかい
!!
戦闘時以外はホントガキだなあいつ
1人でだいじょうぶかしら……
おまえがいく時はオレついていってってやろうか？
殺すよ


プハーーッ
すっきり！
チャプ
チャプ
ゆらー
？


くっさ〜〜
どうして あいつの防具は こんなくせえんだ？
何10日も 洗ってないし ねえ…… あんただって 相当なものよ
それに その防具 いずれお古で あんたに まわってくる んじゃない？
ゲッ そうか…
いいよなぁ 魔法使いは 勇者のお古 がこなくて
ねぇ… ちょっと おそくない ？
そういや ずいぶん 時間くって やがんな
ベンピか ？
バカ
お———い
お———い いるかあ———


あ
ふいた葉っぱ
これは勇者のうんちだわ
よくわかるなそんなもん……
じゃあのうんちは誰のだ?
あれはモンスターのうんちだわ
たぶんストマックビースト
うんち評論家かこいつは…
まさか襲われたんじゃ……
あっこ…この骨は…



やっぱり食べられちゃったんだわ～～～～
うんこついてんぞそれ…
ゆうしゃ
びびー
まあまあおちついて
死んだって終わんないんだからこの世界は
ゴソゴソ…
ほれ世界樹の葉！
あ
ゆうしゃ
でもそれってドラクエの登録商標じゃ……
これは世界樹だからいーの！
こいつをちょこっとせんじて…死人に与えれば……
死人に……
ゆうしゃ
ゴリゴリ


どこに与えればいいんだろか……
パチッ
なすりつけちゃえばいいのよ!!
ごし
ごし
うわっ
あ——生き返った〜〜〜〜
カタカタカタカタ




✖観葉植物と生活を共にする鈴木みそさんにお便りを!!
あて先⬇〒102東京都千代田区麴町5ー5ー5
JICC ファンタジーランド編集部


もちょっと チンチンを 大きく しとこっと
ペタペタ
ええい!! やめい!!
……でもそれは いいアイディア かも……
あんた まで よしなさい!!
もう少し カリ高 に
カリダカール ラリー なんちって
ああ 話が 全然進まない!!
本当なら もう 最後の敵と 戦ってる 時間なのに……
まだ入口さえ 見つかって いないとは!!
じたばた じたばた
いいんじゃない ギャグマンガ なんだし
そーそー ギャグ なんだから
……
そーそー カタの力 ぬいてさ
ぬきすぎ なんだ おめーはよ!!


そんなこんなで
洞窟の中……
いきなり
最後の敵と
でっくわしたり
するわけよ
ひゃ――
でっか――い
つよそ――
やっと戦いの舞台が
そろったってわけだな
うでが
なるぜ
ボキボキ
ん



ゴオー
ブス ブス ブス‥
な…なに こいつ… マジじゃん
ギャグ なのに
もう一撃 くらったら 全滅だぜ!!
何言ってんだ おまえら!!
逃げよう
最後の敵から 逃げられるワケ あるか――




◆きたなくてごめん。でも笑えたでしょ。シリーズ化も近い(?)。応援よろしく!(みそ)


フオオオオオ
Q.01
ちっ
C.H.Q.01
C.H.Q.のくそが!
ん?
パァ
Chase Head Quarter




彼ラの名はC.H.Q.
只今、犯人追走中!!
ギャギャバッ
★チェイスH.Q.★
C.H.Q.
Chase Head Quarter
駒澤よしとし




◆その名は通称C.H.Q.追跡特捜本部のトニーとレイの迷コンビは、今日も追跡中！


なんぢゃこりゃあ
わっ
ゴリッ
おまえには黙秘する権利と…
んと…
電話する権利だろボケナス
……
ラルフ A級殺人容疑で逮捕する
口ごたえってのは抵抗だな…正当防衛でロッカー室にねかせてやる
にじにじ
ところで釈放カードはないの?
カチャ
バカモノ! モノポリーではないのだ!
監獄行きカードがあるのになぜ釈放カードがないんだ! 訴えてやるからな!
ハイハイ


カルフォルニア…ロス
ドラッグ、殺人、スパイ
etc…
多彩な犯罪が
起こりすぎる街である
このような犯罪を
撲滅するために
ここL.A.P.D.に
新たに特捜本部が
設けられた
追跡特捜本部
〈CHASE HEAD
QUARTER〉
通称C.H.Q.と呼ばれる
このチームは
車を使って逃亡する犯人達を
逮捕することを
目的としている
ふう
ハイ ナンシー
ハイ、トニー ラルフので 今月の逮捕数 トップになったわ

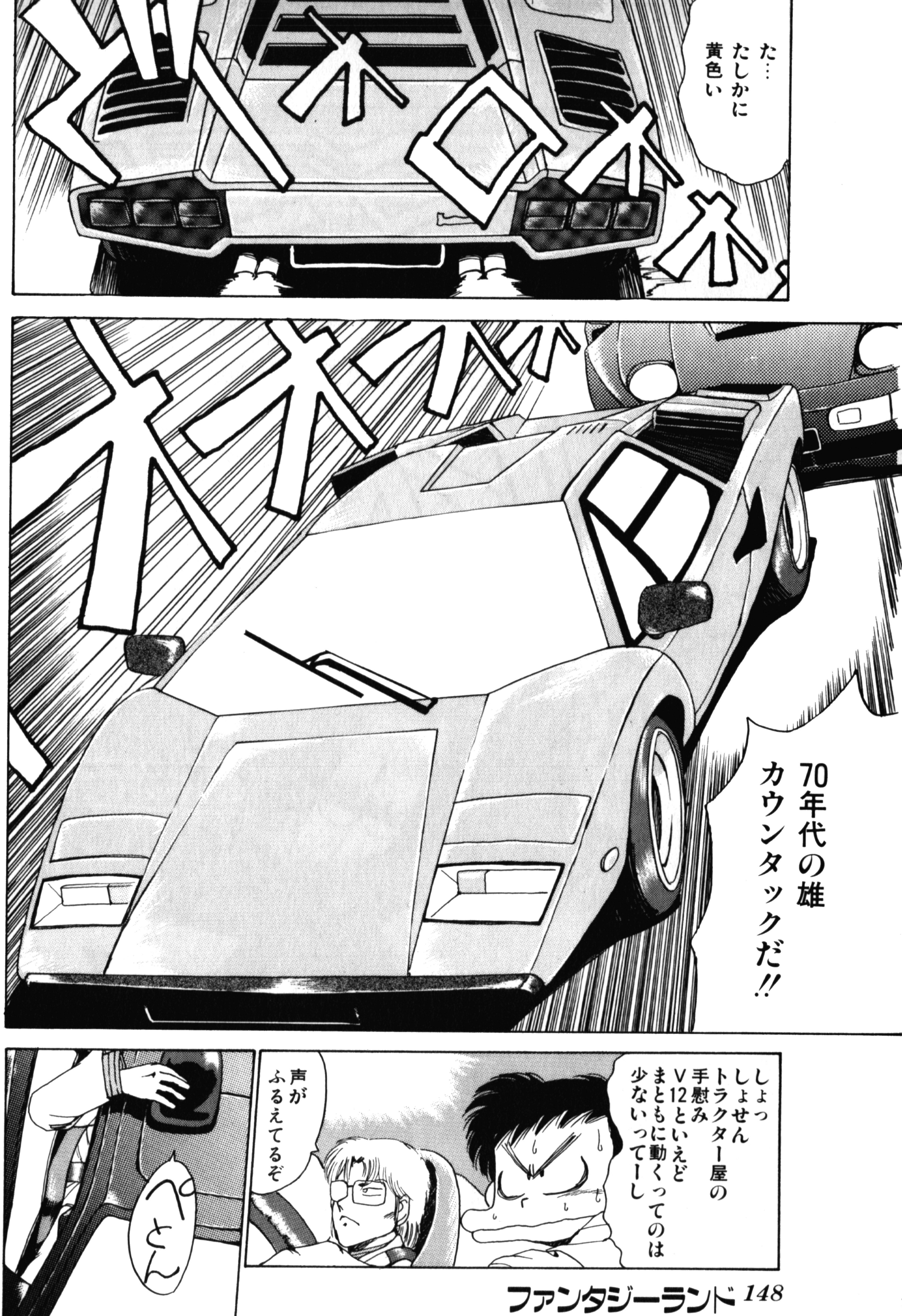

ハッピィ バースディ ナンシー
ん? なんだ?
?
ハッピィ バースディ ツーユー
ハッピィ バースディ ツーユー
ちょ ちょっと トニー
ハッピバースディ ディア ナンシー
ねえ トニーったら なに 感ちがい してるの?
いつもの事だろ
燃える様な バラは 君にこそ ふさわしい
トニーったら 本当のことが わかってるのよね――っ♡
かんちがい だろ
プレゼントだいっ


いやぁ
きっと気に入ると
思うよ
と、ところで
こ、こんど
オレの部屋へ
メシつくりに
こない？
ナンシー
君という
大輪の花
ハイハイ
なによ
これーーっ
ぱっぱっぱっ
ぱんつ
自分で
はいて
トーストでも
かじりな
ボケナス
ぶははは
あれ？
あうー
なっなぜ
おこったん
だーっ

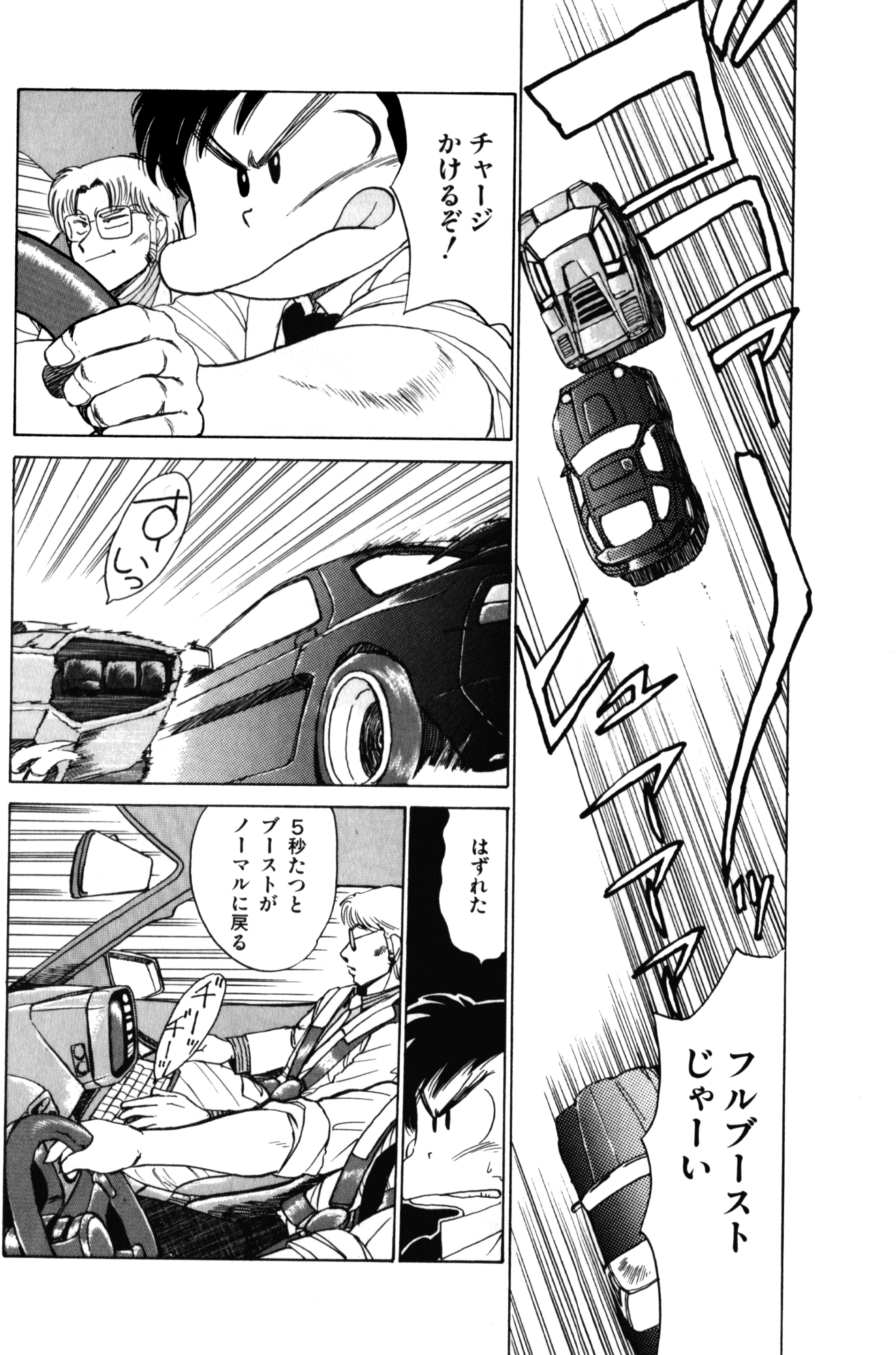

レイ お前のゆーとおりにしたらおこったゾ
こいつが元凶か……
ん? サイズがでかすぎたんだろ
ちがう——っ
第一今日は私の誕生日ではないのよ
ええっ しかしレイが……
あんただまされたんじゃないの?
ヘイファッキングキーズ
ふあああ
あい


いい天気
だねえ
昼寝
しちゃうぜ
かたい…
7.00 MAX
3.
ONE WAY
C.H.Q.01
ガピーーッ
ナンシーより
緊急連絡!!
銀行強盗のカルロス
ガチョ
チャカチャカ
黄色のスポーツカーで
ルート301を追走中
衛星システムは
役に立つなあ
リアルタイムで
我々と奴の位置が
地図上に表示される
トニー
いつもの道は
つまってる
R45の抜け道
を使え


しかし
黄色い
スポーツカー?
C.H.Q.01
イエロー
キャブかー?
もう
その先だ
いたぞ
わ!


た…たしかに黄色い
70年代の雄カウンタックだ!!
しょっしょせんトラクター屋の手慰みV12といえどまともに動くってのは少ないってーし
声がふるえてるぞ
ぺとん


パパ
お
C.H.Q.
じゃねえか
えっ
わ、わ、なんだ
完調の12気筒
だ――
ううくっ
維持費のために
強盗してんのかな
VVC
上げるぞ


フルブーストじゃーい
チャージかけるぞ！
すいっ
はずれた
5秒たつとブーストがノーマルに戻る


あの
カルロスってのは
盗んだ金の
ほとんどを
チェーンに
使ってんじゃ
ねーのか?
この928耐久レース
仕様で550ちょっと
フルブーストで600に足らない
奴のLP500
もタメにでてるって
それに伴う足まわりや
補強……
金がいくらあっても
たりんだろう
タメならターボで
馬力稼いでる
わしらの方が…
レスポンス
が…
んじゃ
ナンシーに言って
他のチームに
追わせるか?
あうーーっ


ん?
よく調べておくれい、ホモのおまわりさ~ん♪
おおっー
ヘイ
ファキン
カァップ
300


ギャ
ギョッ


うしっ くいついた!
じんっ
300での スピン2発!
オオオオオオアアアアアオ
たてなおして フル スロットル
あざやかー
ち ちびっ ちった
ヘイジョン あの気違い共は 何者だ…
多分 C・H・Q・の バカどもだ 討えてやる クリーニング 代も 請求だ!
トニー 2回目の フルブーストだ あと1回しか使えない
わかってるって くそっ 死にそーに なったんだ ちったぁ びびれ!
オオオ


わっ
C・H・Q・!!
事故ったんじゃ
なかったのか!
GO TO! JAIL
ふざけ
やがって


トニー
5キロ先左カーブ
道端はもろこし畑だ
オーライ
んじゃ
ぼちぼちとどめを…
ヒュアアァ
神の御名に
おいて…


わっ
GO TO JAIL!!


ギャ…
C.H.Q 01
アアアア
キュー
バザザザ
ヘーイ
大丈夫か?
シャァ
だせー
車がもえる
―だしてくれ!
うーん
でもこいつのドア
はね上げ式だから
あかねえよ


いま消火液をかけたけどまあ火が出たらあきらめなさい
あう〜〜〜
後丸ごともってかれてて
火なんてでねーよ
からからなって
なんでもしますなんでもすきにしてくれー
ドアこわすけどいい?
ハイナンシー
お前が奴と交渉したんだろ何とかしろ
ドアの請求書? なんでオレに?
おいレイあいつなんでもすきにしろっていってたよな
へっへー今夜オレんちで夕食作ってくれるんだ
え? そうなの?
そうなのあのプレゼントはあんたにだまされたってわかった以上ことわりきれないでしょ
ドアこわしたのもナンシーを危険な目にさらすのもオレのせい恐怖の悪運男
なにをいってんだーオレにとっちゃー天使だよー
頭にヘルズをつけてね



うわーっ
物のない
台所
ねー
道具もってきて
正解だわー
さっ
もう
できる
わよー
仕上げに
これを粉して
まぜる
ザラ
ザラ
がつがつ
きゃっ
オレは
オレは
ナンシー
がくっ
うっ
バカねー
こうなる
だろうから
睡眠薬
入れたのよー
おやすみ♡
ミスター
C.H.Q.
End

クインティ・キャラクターが総出演！

◆今日も元気なクインティ。カートンを囲んでジェニーと三角関係？　いえいえ……




いやー
ゴメンッ
ジェニーとも
約束しちゃって
さー
じりっ
お兄ちゃん
わりっ
また今度
なっ
ピュ〜〜〜
う〜〜〜…
遅いっ
ジェニーが
待ち合わせに
遅れるなんて…


なにかあったんじゃあ
ドキドキ
やっ
カートンのアニキなにやってんの?
ジェニー?さっきコテージ前で見たよ
え?それで…
クインティに連れられてどこかへ行っちゃった
そういえば二人ともなんかスゴイケンマクだったなあ
なんかあったのかい?
あら?
ダッ
なっなんてこった
クインティがジェニーを…
ジェニー!!
あんたねえ
いつもいつもあたしのお兄ちゃんとベタベタしてんじゃないわよっ
あんたなんかこうして
あっ
しゅ


パシィーン
こうしてやるわっ
パシィーン
ホーホホホホホ
きゃーー
まっまさか…
タタタタ
ジェニーだって？知らないなぁ
なんだとうとうフラれたかカートン
くっくっそー
イヒヒヒヒ
ニヒヒヒ
いーや見てないけど……
レストランにプラムたちがいたからきいてみたらどうです？
ジェニーー？
RESTAU
WELCOME



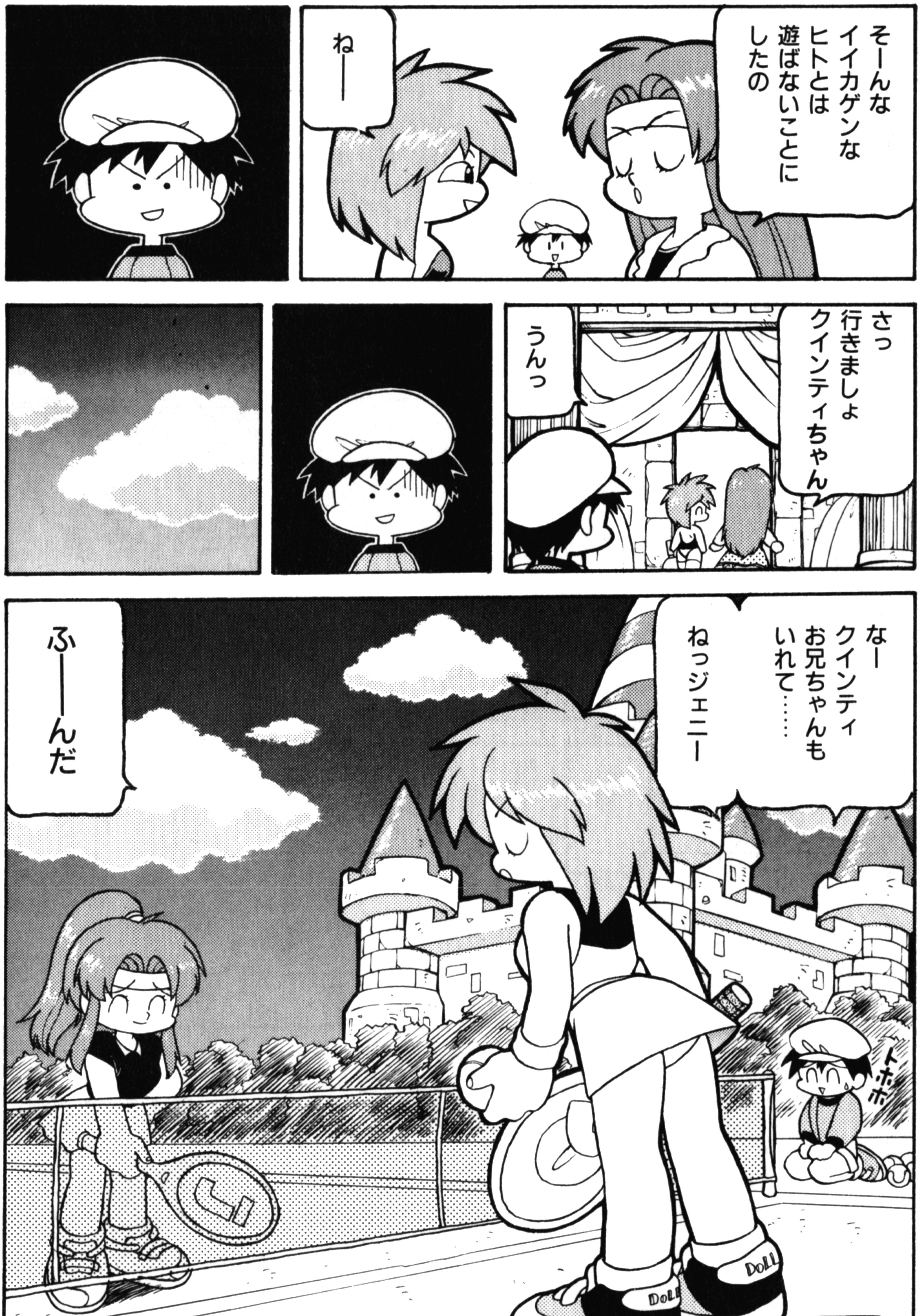

❖ゲーム作りに大忙しの杉森建さんにお便りを!!

あて先➡〒102東京都千代田区麴町5-5-5 JICC ファンタジーランド編集部



クインティ！
ザッ
ジェニーをどうしたっ
……
ベーー
！
タン
ふわ
まっまてっ
ガッ
きゃっ
ちょっと！はなしてよお兄ちゃん
いーやはなさん
……
……


ここだったのか!!
ダッ
ジェニー!!
あら
ジェニー無事だったかっ
ラケット持ってきた?クインティちゃん
え?
クインティちゃん?
ほーい
どっ
どういうコト…?
あら二人でテニスやるのよ
ぱん
ねっ
え
なんで
お兄ちゃんあたしとジェニーとで二股かけて約束したでしょ




◆ゲームのキャラクターが全員登場したのわかってくれたかな?んー、苦労したんだこれが!

~Silent Blue~

# 虚影の海

作／ベニー松山　イラスト／米田仁士




## 1

夜霧に煙る波止場に、ひとりの男が佇んでいた。

コートの襟を立て、帽子を目深に被ったその風体からは、男がどのような面相をしているのかは見て取れない。ただ、帽子のつばの下から覗く細い眼は、並の人間が持たぬ鋭い光を宿していた。今、この一瞬に生死を決める状況にあるかのように、一分の隙もない緊張を漲らせた眼光であった。

足下には数本の吸い殻が転がっている。くわえた煙草も半分以上が灰になり、ポトリと湿ったコンクリートに落ちた。

男は煙草を吐き捨てると、苛立たしげに腕時計を覗き込んだ。

密会の相手は、約束の時間からすでに十五分近く遅れている。普通ならばコンタクトを見送って早々に引きあげるところだったが、男が今回手に入れた情報は格が違った。一刻も早く相手に資料を渡し、確実に本国に届けさせなければならない。機会を次に延ばせば手遅れになる可能性が高かった。

遠くで霧笛が鳴った。霧が深まりつつある。

視界は数メートルほどしか見通せなくなっていた。海も、停泊中の船も見えぬ濃霧の中で、岸壁を洗う波の音が幽かに聴こえるのみである。

まるで霧深い故郷のようだ、と男は思った。いや、故国でさえこれほどの霧は珍しい。

乳白色の幕はいよいよ濃度を増し、見えるもの全てを覆い隠す。夢幻の中を彷徨うかの錯覚を起こさせる、尋常ならざる海霧であった。

男の眼光が鈍り始めていた。

現実味を欠いた白盲の世界——それは視覚ばかりか男の訓練された五感全てを、そして意識までも狂わせていた。いつしか波音も聴こえなくなり、潮と重油の匂いも嗅ぎ取れぬ。肌にじっとりとまとわりつく霧の触感もなく、張りつめていた精神は眠りに落ちる寸前のように弛緩しきっている。

自分は今、何をしているのか——その場に座り込んでしまいたい衝動と戦いながら、男はぼんやりとそれを思い出そうとした。

誰かを待っていた筈だが、そいつが姿を現さない。入手した機密を本国まで持ち出せる男。暗号名はルーク、闇に紛れた鴉のように秘密裏にこの国を抜け出せるA級の諜報員だ。

そんな男が、どうしてこんなにも時間に遅れるのだろう。機密情報の受け渡しは、わずかなタイムロスが命取りになりかねないと言うのに。

この国――日本の防諜機関は優秀だ。我々とは根本的に異質な技を使う。まさか奴等に殺られた？　いや、ルークには我が国の貴重な術者ふたりを犠牲にしてまで強力な魔法を施してある。敵を察知する予知の力と、己を傷つける者に対する致死の呪い。あの男を殺すには、奴等も腕利きの機関員の命を引き替えにせねばならん。

それにしても瞼が重い。このまま眠ってしまえればどんなにいいだろう。何故眠らない？　ルークが到着すればきっと起こしてくれる。このままじゃ任務に差し支える。

いや、待て。

おかしい。任務の最中に睡魔に襲われるとは。

男は綿を詰め込まれたような意識を急速に覚醒させた。諜報員としての訓練を受けた自分を忘我状態に引き込むなど、これは断じてただの霧ではない。

強靱な意志が五感を正常に引き戻す。幻の霧が薄れる中、鼻孔をくすぐる甘い香りと低く響く真言に男はようやく自分が術中に落ちていたことを悟った。

真言が止まった。

カツン！

背後の、予想外に近い位置で靴音がした。驚くより先に、男は振り向きざまに引き抜いた拳銃の引き金を絞っていた。銃口が火を吹き、銃声が夜気を引き裂く。

五メートルほど先に立つ人影に22口径弾が吸い込まれた。オートマチック機構で排出された薬夾が地面に落ちる前に、第二弾、第三弾が続けて発射される。

短い呻き声を漏らし、人影はその場に頽れた。初弾は肺を、続く二弾のうちのひとつが心臓を射抜いていた。油断していたのか、無防備のまま避けようともしなかった。破壊力に欠ける小口径とはいえ、即死は免れない。

常夜灯の光が、うつぶせに倒れた影の顔を照らした。

「ルーク！」

男は絶叫した。死者の濁った瞳に、恐怖に引き攣るスパイの顔が映る。

仲間を射殺してしまったのだ。死の呪いを持った男を。敵を看破する魔力も、敵意を抱かぬ仲間の発砲には無力であった。

男が自力で霧の幻術を破ったのではなかった。彼にルークを始末させるために、絶妙のタイミングで術が解かれたのだ。

自分の死が信じられぬと訴えるように見開いた目が、ぎろりと男を睨んだ。

ルークは絶命している。しかしその両眼は呪いを放つ相手を見定めるべく蠢いた。

男のコートがぶすぶすと焦げ始めた。右胸と、脇腹。そして心臓の真上。呪いは正確にルークの傷をなぞっている。

「あああ」

男は悲鳴をあげ、闇雲に走り出した。まるで、その場を遠ざかれば死から逃れられるとでもいうように。

凄まじい迅さだった。秒速三十メートル以上、時速にして百キロを超すスピードで男は疾走する。限られた時間なら常人の数倍の速度で行動できる――それが暗号名ビショップと呼ばれるこの男の能力であった。だからこそ、厳重な管理体制を敷かれた第一級の軍機をも盗み出すことができたのだ。

瞬く間に数百メートルを駆け抜けた。が、呪いはどこまでもビショップを追う。

なまじ時間感覚が早まっているのがビショップの不運だった。現実の数倍の緩慢さをもって、確実な死が近づいてくるのだ。

スーツが焦げ、シャツが燃え始めた。決して消えぬ呪咀の炎が皮膚を灼き、肉を焦がし、肺を、心臓を抉った。

時速百キロの風が炎を煽り、ビショップは全身を松明のように燃え上がらせて走りながら絶命した。

彼方に燃える屍を望み、いつしかルークの死体の傍にふたりの男が立っていた。どちらも夜目にも浮き立つ白いスーツを着込み、同じく純白の中折れ帽を被っている。

「哀れルークにビショップ。将棋で言えば飛車角か」

わずかに背が低く、代わりにがっちりした体軀の男が帽子を持ち上げた。低いと言っても百八十センチ近い身長はあろう。

「それにしても恐ろしい連中ですな。ただじゃ死なない。大英帝国諜報部ってのはあんなのがごろごろいるんですかね」

男はもうひとりを見た。

「もっとも自分はそいつらを同士討ちさせた局長のほうが怖いですがね」

局長と呼ばれた長身の男は、冷たくなりかけた屍を無言で見下ろしていた。カバーガラスの割れたルークの腕時計が、午後十一時五十九分を指して止まっている。

「もう局長ではない。零時を回った。常磐木中佐、本日をもって君が隠密局長だ」

「はっ」

常磐木は不動の姿勢をとった。そして、にやりと恰好を崩す。

「階級が上がって喜んだものかどうか。何せ局長――いえ、水無月大佐に代わってこんな連中を相手にしなければならんのですからな」

「君ならできるさ」

水無月は帽子のつばを弾き上げた。彫りの深い、鋼を思わせる相貌が灯下に浮かぶ。二十代の後半から、三十歳をわずかに出たかという顔つきである。

「この機密を入手した密偵は英国だけではないだろう。一月後の竣工に合わせて、どこかの海軍――あるいは列強の各国から海の殺し屋が送り込まれるだろうな」

遠く、暗い水平線を見やり、水無月は呟いた。「少なくとも、新しい任務は楽にはなりそうにないな」

濃い霧の塊が風に運ばれ、ふたりの周囲を覆う。

霧笛が遠く、死者の魂を悼むかに鳴り響いた。

## 2

「艦長。聴音室から報告です。本艦の右四十度から五十度方向にスクリュー音。距離は六千、低速回転でゆっくりと接近中……間違いなく潜水艦、それも我が国のものではないようです。随行艦はありません」

「単独行動か。いただきだな」

先任将校の伝達を聞き、鬼島十斎は薄い唇の両端を吊り上げた。く、く、く、と抑えた忍び笑いが、それでも発令所の全員の耳に届く。海軍内では死神の嘲笑と呼ばれ、評判の芳しくない鬼島の悪癖であったが、彼の部下たちにとっては戦闘を前にしてこれほど心安らぐものはなかった。

巡洋型潜水艦・伊一八潜は眠りから醒めた巨獣が身震いをするようにモーターを始動させ、懸吊――潜航したまま一定の深度を保って停止した状態――から微速前進を開始した。

「スクリューの特徴を報告しろ」

鬼島の指令に、伝声管の向こうから即座に応えがあった。聴音長の緊張した声が響く。わずかでも返答が遅れれば、どんな懲罰が用意されるか判ったものではない。

「聞き慣れない音です。スクリューは小型、二軸推進と思われます。羽根は……五枚のようです」

並の聴音員では判別できぬ細部までが報告される。伊一八潜には海軍でも屈指の耳を持つ男が配属されていた。

「海図だ」

低い呟きに、航海長がこの海域の細密な海図を抱えて飛んできた。卓上に広げられ、その一点に巡潜のミニチュアが置かれる。

伊一八潜の現在位置である。
　血色の悪い骨と皮ばかりの顔に酷薄な笑みを浮かべたまま、鬼島は懐から取りだした赤い小瓶を静かに傾けた。赤黒い砂がこぼれ、海図上の伊一八潜の右舷前方——捕捉した潜水艦が存在すると思われる位置に一つまみほどの小山を造る。
　満足そうに頷くと、鬼島は両掌を海図の上にかざし、耳障りな呪文を唱え始めた。
　伊一八潜を指揮する鬼島中佐は〝死神艦長〟の異名を取る、日本海軍の潜水艦長きっての撃沈トン数を誇る戦上手だった。いや、むしろ敵を嗅ぎつける天才と呼ぶべきかも知れない。敵性国家の、それも軍艦に遭遇する確率がそれほど高くない潜水艦の外洋哨戒任務にあって、この伊一八潜は異常なほど他国の偵察艦を頻繁に捕捉・撃沈している。まるで彼の哨戒する海域に敵艦が惹きつけられるかのようであった。一種の超能力と言える鬼島の勘である。
　そして何よりも、盲目同然に視界が閉ざされた水中戦において、切り札となる能力を鬼島は持っていた。
　呪文に呼応するように、海図に置かれた赤砂が震え始めた。円錐状の山が崩れ、次第に細長く形を変えていく。
　モーターの震動で砂が動いた、というようなものではなかった。赤黒い砂を全身にまぶした蛭の絶え間ない蠕動——そんな艶めかしさを秘めた動きである。
　同時に、砂は海図上を移動していた。意志を吹き込まれたかの如く、不気味な伸縮を繰り返して。何度かの転針後、砂は伊一八潜を示す模型の正面を横切る針路を取り、やがてスピードを上げ始めた。
　くっくっと声を漏らし、鬼島は呪文を止めた。
「魚雷発射管一番から八番まで全て注水しろ。本艦の深度は三十。針路、速力は現在のままでよい」
　先任将校が復唱した。バラストタンク内に圧搾空気が送り込まれ、艦は新たに得た浮力で海面下三十メートルまで浮上する。
　鬼島の命令によって、艦内にはすでに勝利感に似た安堵が流れていた。死神の笑みを浮かべた時、艦長の指示が間違ったことはない。的確に敵艦の位置を予測し、魚雷発射に絶好のポジションへと伊一八潜を導くのだ。潜水艦乗りが求めているのは部下思いで人格者の艦長などではない。死神と呼ばれ、懲罰に厳しくとも自分たちを生きて陸へと連れ帰ってくれる艦長だった。
　占術——自然現象や物体に現れた変化から吉凶を読み取る、最も古くから発達した呪術のひとつである。幼少時から非凡な才能に恵まれていた鬼島は、この占術を潜水艦戦に取り入れることによって敵艦の行動を予測し、そこに魚雷を撃ち込む戦術で驚異的な戦果をあげてきたのであった。
　占いの中でも未来予知は不確定要素が大きく、高位の術者であってさえある程度の確率以上は的中が難しいとされている。だが鬼島の占術はその予知の範囲を自分を中心とした半径五海里（約十キロメートル）、時間を三十分以内に限定することによってほぼ確実な未来予知を可能としていた。移動位置のみの予測であったが、耳だけに頼らねばならない水中戦にあって、自艦の位置を知らせることになる探信儀（アクティブソナー）を打たずに相手の位置を特定できるばかりか、その回避先にあらかじめ魚雷を発射しておけるまさに必殺の秘術であった。
　——浅く、岩礁が多いだけに待ちぶせもないと踏んだのだろうが、それが貴様らにとって操艦の妨げとなる。
　鬼島は赤砂が染みのように見える海図に目を落とした。
　平均深度百五十メートルほどの、ところどころに巨大な岩礁が存在する危険な浅海である。海図には林立する岩礁の位置が詳細に記録されており、自艦の座標を見失わない限り激突する心配はないが、深度を誤って船腹を擦ろうものなら二度と浮上できないかも知れない。覚えている筈の海底の起伏を、鬼島はもう一度確認した。
　魚雷発射予定位置で再び機関を停止し、伊一八潜は完全な無音潜航状態となった。相手が探信儀を打たない限り、これで待ち伏せを察知されることはない。敵潜は聴音能力が低いのか微速前進時のスクリュー音に気づいた様子もなく、砂が示した通りの航路を辿っていく。
「敵潜わずかに増速しました。距離四千」
　聴音室からの報告だけが、定期的に続けられる。
「艦首方向を斜めに横切る針路で……右舷十五度方向、距離三千、速力四ノット」
　占術は正確無比だった。国籍不明の潜水艦は、刻一刻と海図の赤い染みを目指して無防備に進む。
　鬼島は頭の中でカウントダウンを開始した。
　——この潜水艦も、一週間後に出港を控えた例の機密艦を討つために送られてきたのであろうな……ええい、腹立たしい。何故あの艦を私に任さぬ。予知の術がある限り私は無敵だ。私こそあの新造艦に相応しいと言うのに！　それをあのような得体の知れぬ輩にくれてやるなど、司令部は一体何を考えておるのだ。ふん、どのみちすぐにボロを出すに決まっておる。今は一隻でも多くの敵潜を撃沈し、誰があの艦を操るに適任かを海将殿に教えてやらねばな。
「動力始動。魚雷一番から三番まで一斉発射」
　鬼島の号令とともに、三本の魚雷が次々と発射された。
「発射角度を左へ十度。五秒間隔で四番から八番を発射しろ」
　艦が回頭し、断続的な衝撃を残して後発の魚雷を撃ち出す。水中での戦闘力を重視したこの型の巡潜は標準的な艦より魚雷発射管が二門多く、最大八本の魚雷を一息に射出することが可能であった。
「敵潜が魚雷を探知、回避行動に入りました。増速、右に転針」
　聴音長の報告に鬼島はほくそ笑んだ。その転針で敵は伊一八潜の艦首正面を直角に交差——即ち、最も表面積の大きい舷側を垂直方向に晒すことになる。
　最初の三本の魚雷は敵潜にこの回避をさせるための囮であった。そこに、もはや躱しようのない本命の魚雷を叩き込むのだ。
「十秒後に魚雷が到達します」
　時計を確認しながら先任将校が言った。全てが完璧なタイミングで行われている。発令所内の全員が魚雷の命中を信じて疑わず、息を潜めて炸裂音が届くのを待っていた。
　だが、聴こえてきたのは伝声管から響く聴音長の震え声だった。
「ぜ、全弾外れました。敵艦は本艦に向かい回頭中。距離二千五百、速力七ノット以上……魚雷発射管に注水音です！」
「何故だ！」
　鬼島は叫んでいた。魚雷と敵潜の深度は合っていた筈である。外れる訳がなかった。
「錯覚かも知れませんが——」
　聴音長がうわずった声で言った。「自分には魚雷の推進音が命中寸前に変調したように感じられました。勝手に、より深深度に潜って行ったような……」
「五本の魚雷がか？　馬鹿な——」
「敵艦魚雷発射！　二本向かって来ています」
　聴音員のひとりが割り込んだ。悲鳴に似た報告に鬼島は我に返る。そうだ、今は魚雷が外れたことよりも、敵の魚雷をどう躱すかを考えなければ——。
「急速潜航！　全速前進、ダウントリム十度。安全深度まで潜り込め」
　命令を発しながら、鬼島は周囲の海底をイメージしていた。巡潜の安全深度は百メートルとされているが、実際にはもう十メートルはいけるだろう。突き出た岩礁を避けるなら——。

「おも舵一杯。二百十度に針路を取れ」
鬼島の決定した方向には幾つかの岩礁があった。しかしいずれも頂点が水深百二十メートル地点以上にはなく、少なくとも艦が衝突する恐れはない。また、うまくすれば岩礁が敵の探信儀を混乱させ、魚雷の第二波を躱す助けになる。
「魚雷二本、上を通過します」
耐圧内殻を伝わる不気味なシュルシュルという音がにわかに大きくなり、すぐに遠ざかっていった。第一波の魚雷はうまく躱せたようだった。
カーン、と鋭い音が艦内に響いた。敵艦のアクティブ・ソナーである。強力な音波を発信し、その反射に要する時間から相手の正確な位置を割り出すのだ。
伊一八潜の位置を確認した以上、続いてより正確な魚雷攻撃の第二波が来るのは明白であった。
「現在の深度は?」
「八十です」深度計の前の航海長がもどかしげに答える。
潜舵の故障か、と鬼島は思った。そろそろ百メートルを越えてもいい頃なのに、これでは通常潜航と変わらない速度だ。が、艦の角度は指示通り艦尾を持ち上げたダウントリム十度を保っているように思える。
再びソナー音が鬼島の耳を打った。逆探知される危険があるため探信儀の多用は危険なのだが、敵は聴音員の腕が悪いのかほぼ立て続けに打ってくる。もっと深く岩礁を掠めるように航行すれば、音波を乱反射で混乱させ、反撃に転じるまでの時間、即ち消耗した予知の呪力が回復するだけの時間が稼げる――そう鬼島は思った。
鬼島は奇襲失敗の衝撃から平静を取り戻しつつあった。自分の占術が破れた訳ではない。たまたまおかしな海流でもあって、それで魚雷が逸れてしまったのだろう。あと二十分もすれば再び敵潜の位置予測が可能になる。
この海域は鬼島の庭のようなものであった。幾度となく航行し、潜航訓練も行ってきた。海図は伊一八潜自身があらゆる岩礁を調べ上げて作成した信頼性の高いものである。この海ならソナーで障害を探知することなく、海図上の計算だけで全速航行が可能であった。
アクティブ・ソナーを使用しなければ位置を知られる確率は低い。現状を切り抜けられれば、体勢を立て直して反撃に移ることができる。伊一八潜を追い立てるようにソナー音が響いたが、鬼島は余裕の笑みを浮かべていた。
――恐らく敵は死に物狂いに岩礁を探知し、神経をすり減らしながら我々を追っているのだ。魚雷の第二波を撃てないほどにな。これなら逃げきれる。
懸念は潜航速度の不調であったが、それも操艦に支障をきたすほどではなかった。
「深度百に達しました」
「よし、ツリム水平に戻せ。百十まで潜航を続ける」
安全深度を越える潜航命令に、乗組員の間に緊張が疾った。が、鬼島の陰気な嗤いがそれを和らげる。
安全深度を十メートル越えたところで、すぐに艦が圧潰する訳ではない。それに、死神艦長の笑みはこの危機を乗り切る自信に裏打ちされているのだ。
しかしその安堵も、聴音員の絶叫に脆くも消え去った。
「正面に岩礁と思われる反響あり! 距離……百五十を切っています!」
何を馬鹿な、深度百十メートルでそんな岩礁はない筈だ――そう叫ぶ代わりに、鬼島はあらん限りの大音声で怒鳴った。
「急速浮上! 全タンク排水、減速しろ!」
コースに誤りはない。それは確かだった。それでは、そこに新たな岩礁が隆起したとでも言うのか。余りに唐突に、巨大な障害物は伊一八潜の前に立ち塞がった。
「駄目です艦長! 衝突します――」
聴音員長が叫んでから、しばらくの間があった。五秒、六秒、七秒――その間に、乗組員たちは思った。間違いであってくれ。聴音員の冗談であってくれ。
ひょっとして、本当に冗談だったのではないか。そう鬼島が考えた瞬間に、凄まじい衝撃が船体を襲った。
伊一八潜の水中速力は最大八ノット、時速にして十五キロメートル程度である。長距離ランナーの平均速度にも満たないほどの速度でしかない。
だが、全長百十メートル、潜航排水量二千五百トンを越える伊一八潜が水圧下でその速力を維持するには、実に二千馬力にも達する動力を必要とした。とてつもない移動エネルギーが船体に作用しているのである。
そして今、圧倒的な質量を持つ岩塊に衝突することで、そのエネルギーは全て伊一八潜の船体を破壊する力に転化された。一瞬にして艦首から数十メートルが潰れ、船体は捻れ、折れ曲がり、裂ける。
あっという間の浸水だった。伊一八潜だった巨大な鉄の塊は大量の気泡を吐き出し、岩礁を擦りながら海底に沈んでいった。
生存者は皆無であった。鬼島十斎艦長以下、九十三名の乗組員のほとんどが溺死ではなく、衝突時に首の骨や頭蓋骨を砕かれての即死である。それほどまでに、彼らを襲った衝撃は想像を絶するものであった。
着底した残骸が舞い上げた泥土がおさまった時には、すでにその海域に謎の潜水艦の姿はなかった。



月のない夜であった。

瀬戸内海に浮かぶ島々の影も、漆黒の海に溶け込んで見てとることはできぬ。瞬く星々がかろうじて、海と夜空を水平線の彼方に分けていた。

呉。

沖合い数キロメートルに江田島を望み、周囲を灰ケ峰、休山などの低山に囲まれた風光明媚な土地柄で、古くから良港として発展してきた瀬戸内地方でも有数の港湾都市である。

そしてまた呉は、九州の佐世保や関東の横須賀などと並び、大規模な造船設備を有する海軍の重要拠点でもあった。

巨大な船渠が立ち並ぶ広大な軍港。そこには日々膨大な量の資材が運び込まれ、外部の目から遮断された工廠内では常に様々な軍艦が建造されていた。

数十キロの射程を誇る巨砲を持つ戦艦や巡洋艦、多数の戦闘爆撃機を搭載する航空母艦に、高速で海上を駆け回る駆逐艦、そして深海を自在に潜航する神出鬼没の潜水艦――これらの兵力増強に躍起になる海軍にとって、総司令部が頭脳であれば造船基地は心臓にも等しい要衝であった。それ故に警戒は極めて厳重であり、呉もまたその例外ではなかった。

広大な敷地を囲む塀や金網には昼夜を通して絶えず歩哨が立ち、何ケ所かの出入り口では二重三重の検問を行って部外者の侵入を防いでいた。さらに湾内の海上には数隻の巡視艇、岸壁にも五十メートルと間を置かずに見張りが配置され、まさに猫の子一匹見逃さぬ警戒網が敷かれていたのである。

それが通常であったために、この海軍基地に隣接した市街地の民間人のほとんどは、この数ケ月の間警戒がより徹底されていたことに気づいていなかった。目端の利く商人や、軍人が頻繁に出入りする料亭の女将、それに実際に基地内に物資を搬入し、いつもに増して厳しい検問を受けた者――そういった一部の人々を除いては、境界の向こうは相変わらず愛想の悪いことだと、その程度の感想しか持たなかった。

だが、並み外れて霊感が強い人間であれば、その警戒の凄まじさが手に取るように判ったであろう。一級の修験者や法力僧らよって敷地全域に張り巡らされた結界は、いかなる妖魅、物の怪の接近を阻み、遠隔念視の術をも遮断する強力な代物であった。

そして、人々の目から隠されてはいたが、呉ではこの一月余りの期間に軽く百人を越える他殺体が出ていた。その全てが民間人ではなく、日本に潜入した他国の間諜であり、日本の防諜機関に所属する特務員であった。

そうまでして守らねばならぬ機密――それがついに、この闇夜の中で動き出そうとしていた。

軍港内の工廠のひとつ――あらゆる窓が塞がれ、海へ通じる扉も固く閉ざされたまま半年間、秘密裏に何かを建造していたこのドックから低いディーゼル音が響き始めたのは、もはや午前となった深夜のことであった。

しばらくして、大きく重い鉄扉がゆっくりと開いた。水位差でドック内に海水が流れ込み、暗い海面に小さな渦を生じる。

ディーゼルエンジンの唸りがわずかに高くなり、やがて一隻の艦が夜の海に滑り出した。

闇よりもなお濃い、漆黒に塗られた船体を持つその艦は、明らかに水上艦ではなく潜水艦であった。が、それはまたこれまでに建造されたどの潜水艦とも異なるフォルムを持っていた。

潜水艦といえども常に水中を航行する訳ではない。主動力となるディーゼル機関は燃焼に大量の空気を必要とするため水上航行中にしか使用できず、潜航中は蓄電池によるモーター推進に切り替えることになる。このため水中での速力、航続力は水上に比べて大きく限られ、従って必要な時以外は水上を航行するのが潜水艦の常であった。言うなれば水中に没することのできる艦――可潜艦であり、その形状も凌波性を重視した極めて水上艦に近いものであったのだ。

しかし、その黒い潜水艦の形状は、水上を航行する艦船とは余りにもかけ離れていた。それまでの潜水艦を見慣れた者が見れば、それが潜水艦とは思えなかったかも知れない。

百メートル近い船体は、一般的な艦に比べてかなりスマートだった。このクラスの最大幅は八から九メートルが相場であったが七メートルにも達してはいない。

そして何より、艦橋の構造が奇異であった。魚の背びれを思わせる流線型で、緩やかな曲線を描きながら後方に伸びている。また、不思議なことに通常なら側面にペイントされる艦番号が空白となっていた。いずれにせよ、船体の細さと艦橋の形状は水中抵抗を減少させるためのものであることは確かである。

この艦こそ、軍部が数年をかけて極秘に計画を進めてきた水中高速潜――通称〝潜高大〟型潜水艦の実用一号艦であった。

それまでの水上排水量千トン以上の艦、即ち〝伊〟ナンバーに分類される潜水艦の水中速力は十ノット程度が限界であったが、この艦の基本計画はその倍以上、二十五ノットで潜航できる高速潜の開発を目標に定めていた。そのためには艦の構造はもとより従来にない大出力の発電能力を必要とし、同時に速力に見合った操艦システムの完成も不可欠とされた。

そして現時点での科学技術では、それらの条件を完全に満たすことは不可能であった。何隻か建造された試作艦でも、搭載個数二千以上の蓄電池の整備や電動機と推進器を結ぶ減速ギアの騒音などの問題点が山積みされ、一時は計画中止も噂されていた。

しかし列強に対する兵力の劣勢に頭を痛める海軍首脳部にとって、一隻で在来艦十隻――いや、数十隻に相当する戦力となる水中高速潜構想には捨て難い魅力があった。技術が追いつかぬのならそれに代わる何らかの手段を講じろと厳命が下り、苦心の末ようやく実戦に耐え得る実用艦が竣工するに至ったのである。

だがこの艦の青写真が完成した時点で、続く二番艦、三番艦の起工予定はなくなっていた。それは軍令部の要求する性能を実現するために開発部の提出した解答が、あまりにも突拍子もないものであったことに他ならなかった。

潜高大の実用のために、科学技術に代わるものとして考案された方法――それは、その特殊性故に同型艦の量産を不可能とした。そしてそれを軍令部が承認したのは、他に選択の余地がないとの判断が下されたからであった。

たった一隻とはいえ、一度動き出せば駆逐艦の鼻を明かすことすらできるこの水中高速潜の存在に、他国の関心が寄せられぬ訳はなかった。機密の隙を突くの列強のスパイと日本の防諜機関の暗闘は、その黒い船体を朱に染め上げるほどの大量の血を流す凄惨なものとなった。

生命を吹き込まれる前から、数知れぬ死者の魂を喰った黒き巨鯨。その存在を知る者の間では〝人喰い〟の名で通った新造潜水艦が今、その狩場となる大海に放たれようとしていた。

喫水線から上を波に洗われながら、潜高大は低速で呉湾の中央部に進み出た。

その時。

背びれ型の艦橋から側方に百メートルと離れていない海面が不気味に盛り上がった。そしてそこから、海面を割って別の潜水艦が浮上する。海水が流れ落ちる間ももどかしく、すぐさま上部ハッチが跳ね上げられ、ひとりの男が双眼鏡を手に上体を覗かせた。

司令塔の側面に白く描かれた艦番号は一八一。海軍式大型潜水艦――型式名新海大型こと伊一八一潜である。

潜高大を待っていたのは伊一八一潜だけではなかった。この艦を皮切りに、様々な型の潜水艦の艦橋が次々と海上に姿を現し始

めていた。巡潜III型やそれをベースにした巡潜甲型、乙型、丙型そして新旧の海大型数タイプ——現在主要な潜水戦力となっている大型潜水艦十隻余りが、そこにひしめくように集結していたのである。

　それぞれの艦のハッチから潜高大を窺っているのは、いずれも艦長以下の士官クラスの者たちであった。画期的な性能を持ちながら潜水艦乗りに任されなかった艦の姿をその目で見ようと、彼らは海中に潜んで出港を待ち構えていたのである。

　潜水艦長たちの注視を気にする風もなく、潜高大は静かに海面を裂いて進んでゆく。潜水艦群も並走を続けたが、やがて一隻、また一隻と潜航を開始し、穏やかな波間に没していった。

　呉港を塞ぐように浮かぶ江田島を迂回する航路に入った頃には、追走するのは伊百八十一潜のみとなっていた。

　二隻の潜水艦は次第に速力を上げ、短い航跡を残して深夜の瀬戸内海に消えていった。

## 4

「少佐、水上航行試験は予定通り終了しました」

　航海士の報告を受け、司令室の中央で黙想していた鷹見圭吾は軽く頷いた。

「御苦労。結果は?」

「水上での安定性はおおむね良好です。予測資料に沿った凌波性があるようですね」

　技術畑出身の榊航海士は縁の細い眼鏡を押し上げ、手にしたチェックシートのデータを読み上げた。

「……最大速力二十四ノットで十五分航行してみましたが、主機に懸念された過熱、震動などの異常は見られませんでした。性能的には新型の巡潜にひけを取らない機動性です」

「最新型のディーゼル機関が効いているな。試作艦ではその半分の速力で故障が続出したと聞いた」

「自分が乗っていました。酷いものでしたよ」

　榊は笑った。「いざ出発、となると不都合が見つかり、それを直せばまた他が動かなくなる。稼動時間より整備時間のほうが長かったと思いますよ」

　鷹見も、男ですらはっとする甘いマスクに微笑を浮かべた。

「それがここまでになったのだから大したものだ。あとは水中でどれだけの働きができるか、だな。技術部の主張通りの性能が出せればいいのだが」

「電動機による水中航行時に二十五ノット以上、ですか——」

　榊が眉を寄せた。「試作艦ではどうしても二十ノットの壁を破れませんでしたからね。この艦は兵装の充実のために一回り大きくなっていますから、電動機の出力もそれなりに増大していないと……六千——いえ、七千馬力は欲しいところでしょう」

「ディーゼルなしで七千か。難しいな」

　鷹見はつい先日まで指揮していた巡潜の仕様を思い浮かべた。水上こそディーゼル二基で一万馬力以上を得ることができたが、水中のモーター出力ではせいぜい二千馬力。その三倍以上の出力を要求するというのだから容易ではない。

「蓄電は?」

「充分です。いつでも水中試験に移れます」

「予定では日の出とともに潜航に入る。それまでは水上性能のデータを重ねて記録しておいてくれ」

「はい」

　敬礼し、持ち場に戻ろうと踵を返した榊は、思い直したように振り返った。「ところで、あのう……艦長は?」

　鷹見は肩をすくめた。

「士官室に閉じこもったままだ。潜航試験まで指揮は私に任せて下さるそうだ」

「この艦に鷹見少佐が乗艦すると聞いて、自分はてっきり少佐が艦長をなさるとばかり思っていましたが……」

　以前から顔見知りだった航海士は、出港間際にようやく乗り込んできたきり姿を見せようともしない艦長に対して、それとなく反感を抱いていることを示した。

　五十三名いる乗組員の大半が、大なり小なり同様の感情を持っているだろうと鷹見は思った。補佐役である自分でさえも、この艦に関する軍令部の人事に対して肯定的ではない。

　今年で二十五になる鷹見は、それまでは日本海軍で最も若い潜水艦長であった。異例ではあったが実力を伴ってのことであり、鷹見自身も己しか持たぬ能力によって受けた抜擢を誇りに思っていた。

　それが、高性能の最新鋭艦に転属とはいえ事実上格下げである先任将校となり、しかも艦長は潜水艦経験のない——一月前まで海軍軍人ですらなかった男に任せると言うのである。鷹見の立場であれば馬鹿にされたと取っても仕方のない辞令であった。

　沈黙に促され、榊はばつが悪そうに部署に戻っていった。

　鷹見は目を閉じ、閉塞した潜水艦の中から視点を移した。

　美しい夜空が眼前に出現した。新月の闇が、普段なら月の光に圧されて見ることのできぬ星々の輝きさえも際立たせる。夜明けはまだ遠く、東の水平線が細く白んでいるに過ぎない。

　眼下にはタールのように黒い海原に、これまた星の煌めきの如くに夜間航行中の船の灯りが浮かんでいる。定期的に見える強い光は、防予諸島に幾つか存在する灯台であろうか。

　艦の現在地である伊予灘の上空、標高約千メートルの地点に鷹見の視覚はあった。艦の航行に伴い、視点は時速十六ノットで移動し続ける。

　これが、若き佐官鷹見圭吾が先天的に体得していた能力であった。瞼を閉じた瞬間に、その視点は現実の位置からほぼ千メートル上方に移動するのである。

　隠密行動を宗とする潜水艦にとって、水上航行は最も無防備な状態である。甲板に海上戦用の十四センチ砲や機銃等が備えつけてはあるものの、これはあくまで通商破壊戦において兵装の貧弱な輸送船を攻撃するためのものであり、より強力な艦砲を持つ軍艦相手に水上で渡り合える武装は有していない。潜水艦の最大の武器はあくまで、死角となる水中からの魚雷による奇襲攻撃であった。

　しかし自らの視界も閉ざされる潜航時には、潜望鏡による海上の視認が必要不可欠となる。そして潜水艦狩りに手慣れた水上艦の哨戒員は、逆に潜望鏡を見つけ出して海中の敵の存在を察知する。

　鷹見の能力はその危険が全くないばかりか、高空から遙かに遠方、聴音の限界範囲を超えた位置の艦影や偵察飛行機までもが視認でき、さらに動力を切った無音状態で待ち伏せる駆逐艦も容易に迂回可能となる。潜水艦にとっては、これほど頼りになる水上艦の索敵方法は他に考えられなかった。最年少の艦長となったのも頷ける、鷹見の〝視覚飛翔〟能力である。

　鳥の視点で虚空の闇を見つめながら、鷹見は艦長について知り得た情報を考察していた。

　水無月流太。海軍勤務経験はなし。年齢二十八歳、階級は大佐。一月前に特務機関から海軍に移籍。軍歴十一年なれど詳細は不明——。

　この断片的なプロフィールからは、先刻ごく短時間に対面した大男の人物像は浮かんでこなかった。ただ、強固な精神力を思わせる風貌と、困難な任務で知られる特務機関に在籍していたという点が妙に納得できた。が、それももう何十回となく繰り返した思考である。

「少佐。伊一八一潜より入電です」

　通信員の声が、鷹見を星空から窮屈な司令室内に呼び戻した。

司令室は通信室も兼ねており、無電機の前に座った通信員がレシーバーを片耳に当てて指示を待っていた。
「代わろう」
レシーバーを受け取り、マイクに応答しようとした途端、割れ鐘のような蛮声が鷹見の耳を撃った。
『よう、馘首になった艦長さん。人喰い鮫の腹ん中の居心地はいかがかな』
「中佐。声は控えめにとお願いした筈ですが。レシーバーは部品を交換できますが、私の耳は――」
『判った判った。特務に艦長を取られて塞ぎ込んじゃあいないようだな……おっと、水無月艦長殿にはまさか聴かれちゃいないだろうな』
通信の相手は伊一八一潜の艦長、有馬中佐だった。鷹見が士官学校を卒業した直後に配属された艦の艦長であり、最初に実戦の駆け引きを叩き込まれた教官でもあった。勇猛果敢、かつ老獪な指揮で知られる古強者の潜水艦乗りで、今回の試験航海では聴音捕捉訓練の相手役と護衛を兼ねて随行していた。
「艦長は士官室です。日の出の潜航までは私が指揮を任されています」
『良かったじゃねえか。新型艦を操るってのはいつだって俺たち潜水艦乗りの憧れだぜ。しかしな、まだ艦番号が決まってないってのは困りもんだぜ。呼びかけようがない。今も〝鷹見君はいますか?〟って呼びかけたんだがよ』
鷹見は思わず噴き出した。現在のところこの艦を伊号として分類するかどうか軍令部で検討しているらしくナンバーを与えられていないのだが、それにしても子供が遊び相手をような口調で機密中の機密である潜水艦を呼び出すとは、いかにも豪放な有馬らしいコールだった。
『ところで、例の話だ』
レシーバーの向こうで有馬が声を潜めた。『死神鬼島の伊一八が行方不明になった件だがな。出港前になってようやく情報が入った。沈んでた伊十八が見つかったってよ』
「どこで、ですか」
定時連絡が途切れて一週間、絶望視されていながらも、あの鬼島十斎が死んだという事実はやはり信じ難かった。鷹見は鬼島を人格的に嫌悪していたが、それ以上に占術を駆使した操艦に対しては同じ潜水艦乗りとして少なからず畏敬を抱いていた。
『奴の狩場だ。あの岩だらけのな。よりによって正面から岩礁にぶつかって、あっという間にぺしゃんこになったらしい。上の連中は不幸な事故だなんて言ってやがるが、こいつは匂うぜ』
鷹見の目が細くなった。『敵艦がいた、と?』
『鬼島の奴があの海域で事故を起こすってことは、俺やお前がこの伊予灘や周防灘でヘマをやらかしてもおかしくないってこった。答えはひとつ、そいつはあり得ない』
確かにそうだ、と鷹見は思った。鬼島は占術だけに頼った呪術者ではない。高い操艦技術を備えた潜水艦長だったのだ。
そんな男が自ら海図を作成した海で、頭から無様に岩礁に突っ込むような操艦ミスを犯すだろうか。何らかの外因なしには考えられなかった。
「では、敵潜からの攻撃を回避して衝突コースに入ってしまったのでしょうか」
『それだけで自滅するとは思えんな。だが、俺もそれ以上は思いつかん。今言えるのはだ、わざわざうちが制海権を持ってる海域に侵入してくる敵潜が存在するなら、狙いは当然その潜高大だってことだ。鬼島以上の死神が、どこかに潜んでお前が近づくのを待ってるかも知れん』
「脅かさないで下さい。まだこの艦がまともに潜航できるのかどうかも判らないと言うのに。そんなお化けが出てきたら、その時こそ護衛艦の腕の見せどころですよ」
鷹見は明るい口調で言った。艦の性能チェックが済んでいない現時点で未知数の戦闘力に対する不安はあったが、鷹見の声は司令室の全員に聴こえている。深刻に構えて、いたずらに乗員の士気を下げることになっては目も当てられない。
『言うようになったじゃないか。わははははは――それでこそ先任将校だ。艦長の女房役のお前がその調子なら乗組員は安心できる』
冗談めかしながらも、有馬の口調には真剣味が漂っていた。『浮き足立った潜水艦は脆いもんだ。指揮官が優秀なだけじゃあ優秀な艦にはならないもんよ……おっと、いまさら説教もなかったか。じゃあな。潜航試験の前にまた交信する。艦長によろしくな』
ノイズを残して通信が切れた。
艦長を任される地位に就いた今でも、有馬は入隊当時と変わらぬ鷹見の教師であった。レシーバーを通信員に返し、鷹見は再び夜空に視覚を飛ばした。
今度は無心に、ただ星のみを眺めていた。鷹見の穏やかな表情は知らぬ間に、慣れぬ艦に神経を尖らせていた下士官たちの緊張をほぐしていった。
「水中速力二十五ノットに達しました!」
榊航海士の興奮した声に、司令室はわっと沸き返った。鷹見も軍帽を脱ぎ、手近な者たちと握手を交わす。先任将校としての肩の荷が降りた気分だった。
「二分経過。電圧に異常低下は見られません」
「よし。速力を徐々に巡航速度まで落とせ。深度二十五」
鷹見の命令を乗員たちが直ちに実行に移す。総員の半分近くが鷹見の指揮していた艦から転属になった者たちで、その他の乗員同様訓練は行き届いている。何よりも鷹見の実力を知っており、若いからと舐めてかかる者がいないのが強みである。訓練を兼ねての試験航海であったが、統制は極めて良く取れていた。
減速ギアの改良によって、最高速航行時のノイズはかなり抑えられている。また、最新の冶金技術によって製造された特殊合金製の大型スクリューは低速回転で高い推進力を生み出せるため、従来型に比べてキャビテーション――スクリューの高速回転で生じる大量の気泡が弾ける際のノイズや震動を大幅に軽減することに成功していた。
水中で二十五ノットを出すからには周囲数海里に自艦の位置を喧伝する羽目になるだろうと覚悟を決めていただけに、実用型と銘打たれたこの潜高大の静粛化対策は驚愕と賞賛に値するものであった。予想を遥かに上回る高性能艦であると、鷹見は改めて軍機扱いとなっていた意味を実感していた。
しかし、ごく最近就役した巡洋型の実に三倍以上の水中速力を有する代償として、幾つかの難点も存在していた。
まず、二十五ノットの速力に対応できるだけ旋回能力が不足していること。艦尾の縦舵がより大きく、より繊細な調節を可能としない限り岩礁の点在する浅海では最高速など出せるものではなかった。
また、通常の潜水艦は耐圧である内殻の外側にバラストタンクや燃料タンクを設け、その外側を非耐圧の外殻で囲ったいわゆる複殻式が主流であったが、潜高大は水中抵抗を減らすために単殻に近い構造を採用していた。結果として艦内のペイロードは少なくなり、居住性はお世辞にもいいとは言えなかった。魚雷搭載本数も詰め込んで十二本、初期計画より二本増やしてはいたがこれが限界であった。
そして現在、不調を訴えている箇所があった。気蓄器に貯えられた圧搾空気の圧力が充分ではないのか、バラストタンク内の海

水を排出する速度が遅いのである。
　それはつまり艦が浮力を得るまでに時間がかかり、浮上速度が遅くなるということであった。水平舵を利用して艦首を上げ、推進力によって浮上することもできるが、結局はタンク内の海水排出量に見合った深度にまで沈降してしまう。試験を終えて帰投したら、すぐにでも修理なり改良なりをしなければならない問題点であった。
　潜航試験が始まってからも、水無月艦長は艦長室から出てくる気配がなかった。伝声管によって、全て鷹見先任将校の指揮で行うと言い渡しただけである。
　昔からの部下の中には何のための艦長か、と不満をあからさまに口にする者もいたが、それは鷹見が厳しく禁じた。
　鷹見は自分に自信を持つことにしていた。肩書きだけの無能な艦長の尻拭いに使われるような鷹見圭吾ではない。自分を差し置いて艦長に任じられた以上、水無月流太という男は自分よりもこの艦を率いるに相応しい能力を持っているに違いない、と。
　開き直りや皮肉ではなく、艦長を頂点とした理想的な指揮系統を率先して確立させようとする鷹見の意志であった。
　鷹見は海上を視た。
　快晴であった。空は青く、彼方に聳える入道雲を除いては、鷹見の視界を妨げる低層雲は見当たらない。目を開けてしまいたくなるほどの強烈な日ざしが海面に降り注ぎ、凪いだ海を白く輝かせている。
　今休憩時間をもらっても、睡眠は取れそうにないと鷹見は思った。昼も夜もない潜水艦の中で、彼だけは常に太陽と月の運行を感じることができた。
　千メートルの上空からでは、真下の海面下二十メートルを潜航中のこの艦は視認できなかった。一回りして三百六十度、水上艦らしき影も見当たらない。
　太陽の高さから見て、そろそろ予定の時刻だと思われた。
　鷹見は目を開け、艦内灯の薄暗さに慣れるのを待って腕時計を確かめた。予想通り、伊一八一潜との聴音捕捉訓練を開始する頃合いだった。
　数時間前に別れた伊一八一潜は先に予定海域に到着し、できる限り捕捉されないよう懸吊状態で待機か、もしくは微速潜航を続けている筈である。
　潜高大は大きく迂回する航路を取り、最高速などの水中航行試験を行ってきていた。計算ではもうすぐ目的の海域に入る時間だった。

「これより伊一八一を敵潜に想定した捕捉追尾訓練を開始する。全員実戦のつもりで気を引き締めてかかれ。相手はあの有馬艦長だ。逆につけ回されて赤っ恥をかく恐れは充分にある。聴音室、言いふらされて呉のエスの笑いものなるのが厭だったら、くれぐれも油断するなよ」
　鷹見は艦内全てにつながる伝声管に大声で言った。すぐにあちこちから笑い声や野次が聴こえてくる。エスは海軍士官の隠語で芸者の意味だったが、この程度は下士官たちにも知れ渡っていた。陸に上がっても芸者連中に相手にされないのではたまらないと、聴音員を叱咤激励する声が飛び交った。
「よし、その意気だ。ひとつすぐさま古狸を見つけ出して、今度の上陸を楽しいものにしようじゃないか」
　言って、鷹見は口調を引き締めた。「深度二十まで潜航。速力四ノット、方位百五十に針路を取れ」
　タンクに注水する音が響き、艦はゆっくりと深みに潜っていく。全て指示通りに行われたことを確認して、鷹見はすでに広げてある演習海域の海図を眺めた。
　太平洋岸の大陸棚の一部であるため、深度は最大でも二百メートル程度である。
　だが、この深さの水圧は潜水艦にとって充分に致命的である。水圧は深度十メートルごとに一気圧ずつ増加していき、二百メートルなら二十一気圧、物体の一平方センチあたりにかかる圧力は約二十キログラムに達する。巨大な潜水艦の表面積に対する圧力は想像を絶するものになるのである。
　この艦の安全潜航深度は百二十メートルをめどに建造されており、先刻の試験で百メートルまで潜った時も船殻の軋みなどは感じられなかった。もし二百メートルの海底に沈むことになっても、艦の圧潰までは至らないであろう。
　しかし、バラストタンク内の排水に要する圧力も水圧に比例して高くなっていく。気蓄器が完全ではない現在の状態では、一平方センチに二十キロの重圧のかかる海水を排出できるとは思えなかった。そうなれば浮力を得られぬまま、艦は永遠に海底に鎮座することになる。
　そんな羽目にはなるまい、と鷹見は思った。今回の訓練では互いに八十メートル以上には潜らないと有馬と申し合わせてある。そもそも新海大型伊一八一潜の安全深度が八十なのだが、有馬は短時間だけそれ以上に潜るといった虚をついた操艦で、常識に囚われた潜水艦乗りに苦汁を舐めさせてきたのである。取り決めをしておかなければやりかねなかった。

それよりも注意すべきは点在する岩礁だった。海底が隆起している辺りでは海面下五十メートル付近まで頂を伸ばした海底の丘陵や岩礁がある。水上艦には無縁なこれらの地形も、潜水艦には重大な障害物であり、探信を逃れる貴重な遮蔽物であった。
　――有馬中佐は当然これらの岩礁を利用してくるだろう。訓練だからといって手は抜かない、実戦さながらに探信が困難な状況を造り出すに決まっている。
　――それをどう出し抜くか。中佐の裏をかくのは至難だが、この艦の足なら短時間に広範囲の探信が可能だ。それを活かした作戦を立てれば……。
「音響あり！」
　伝声管の声が鷹見の思考を破った。
「微かですが間違いなくスクリュー音です。位置は右五度、距離約三千五百」
　海上を視たがそれらしい船影はない。潜航中の潜水艦に間違いなかった。
「有馬中佐にしては甘いな。新造艦に祝儀のつもりか――」
　言いかけたところに再び報告が入る。
「針路変わりました。左旋回……音響途絶えました」
　現在位置を確かめ、海図を見るとその方向に音響遮蔽に充分な岩礁が存在している。艦は例の隆起地帯に近づきつつあった。
　――妙だな。まずこちらに探信させて、おびき寄せてから引っかける？　いや、違う。今のはむしろ同時に気がついて、岩礁の陰に回り込んだようだった。こちらが全聴音能力を傾けて探信に当たっているのが判っていて、どうして簡単に聴き取れるような潜航を行っていたのだろう？
　司令室で鷹見が訝っている頃、聴音室では最初にスクリュー音を捉えた聴音員も首を捻っていた。
　岩礁が音響を遮る寸前に、奇妙な音が聴こえた気がした。一瞬だったため断定できなかったが、それは確かに魚雷発射管に注水し、発射準備を整える音のようだった。
　――どうする。司令室に報告するか？　しかし馬鹿げている。伊一八一が魚雷を撃つとでも？　こんな報告をして俺の聴力を疑われたくない。
　その聴音員は優秀だったが、新造艦に配属されて少々緊張していた。さらに今回の試験航海には、聴音長を務める筈の男が乗っていなかった。乗り組んでいる艦が長期の作戦行動を取っていたため帰還が遅れ、着任が間に合わなかったのである。



その男なら確信を持って発射管注水の警報を出したであろうし、微弱なスクリュー音もすぐさま伊一八一潜の——いや友軍のものではないと判別しただろう。それだけの聴音能力を有する者は現在乗り組んでいなかった。

注水音を捉えた男には相談すべき格上の聴音員がいなかった。

それが致命的な判断ミスを生むことになった。

牙を剥いた狼が潜んだ岩陰に向かって、潜高大は何の手も打たずに進んでいく。針路も速度も変えぬ艦は、雷撃の恰好の的であった。

岩礁の陰に慎重に隠れながら、敵は潜高大をたっぷりと引きつけていた。そして再び可聴範囲に現れた瞬間に、目標の針路と速度を計算した二本の魚雷を発射した——。

その少し前、鷹見はその潜水艦を伊一八一潜ではなく、敵意を持った別の潜水艦であるとの判断を下していた。

判断材料はなかった。聴音員は結局己の耳を信じきれなかった。

鷹見がそう結論づけた理由は、直感であった。その艦の行動が有馬の指揮らしくなかったこともあったが、海図を睨んでいて背筋にぞくりときたのである。

前方に広がる起伏に富んだ海底と、同様の形状を持つ海域で起こった伊一八潜の謎の沈没。その類似が閃くと同時に、鷹見は弾かれたように叫んでいた。

「出力最大！　総員戦闘配置につけ！」

乗組員たちは突然の命令に驚きはしたが、質問を差し挟むような真似はせずにきびきびと動き出した。こんな時に指揮官の判断を疑っていては、二度と陸を踏めないと潜水艦乗りは肝に銘じていた。考えるのは命令を迅速にこなしてからであった。

「深度五十まで潜航。取り舵十度、全速力で正面の岩礁帯の上を抜ける」

鷹見は海図に記された岩礁の高さを確認して言った。敵艦が隠れているものが最も高くて海面下五十メートル、彼らが抜けようとしている左方の岩礁はせいぜい八十メートルである。

相当な危険はあったが、下手に旋回するよりも艦の高速力を利用して敵の背後に抜けてしまったほうが安全であった。相手が回頭に手間取っている間に、後手に回った態勢を立て直せると鷹見は踏んでいた。

深度を増したのは魚雷を躱すためであった。なるべく岩礁との深度差を取りたかったが、三十メートルあれば深度計に多少の誤差があっても接触はないと思われた。

聴音員たちが魚雷発射音を耳にした時点で潜高大は十二ノットまで増速し、なおも加速中であった。

「敵潜魚雷二本発射！」

「現在の深度は？」

鷹見は尋ねた。潜り過ぎてはならない。しかし魚雷を避けるだけの潜航もしなければならない。できる限り正確に深度五十で安定させなくてはならないのだ。タンクの排水が本調子ではない現在、注水を止めるタイミングを誤れば予定深度を越えて潜航してしまう恐れがあった。

「三十三……四、まだ三十四です」

「遅過ぎるぞ！　注水弁はちゃんと開いているのか」

「はい。バラストタンクには正常に注水しています」

確かに、これまで通りタンク内に海水の流れ込む音が聴こえてくる。が、それにしては潜航速度がやけに遅かった。

鷹見は腹を括った。このままでは深度三十前後を狙った魚雷が命中してしまう。

「トリム下げろ。急速潜航」

潜舵の角度を調節して艦首を下げ、推進力で潜航を早める。しかしこの手段は、岩礁が正面に控えている現状では極めて危険であった。潜航の勢いを殺せなければ、深度五十などすぐに越えてしまうのだ。

魚雷との遭遇ポイントを過ぎれば、岩礁はもう目の前である。深度、針路ともほとんど調整できない距離であった。

額の汗が流れ込んできて、鷹見は思わず目を閉じた。

海中の修羅場とは無縁な、どこまでも広い海面。視界の数十メートル前方を、一羽の鳥が羽ばたいていた。視点の移動と同じ方向に、同じ程度の速さで飛んでいる。

——はぐれた渡り鳥か。ずいぶん高く飛ぶものだ。

迫る魚雷と危険な潜航に極度に緊張しながらも、鷹見は目を閉じたまま鳥に思いを馳せた。無論司令室にある耳は、遅々とした深度のカウントに神経を集中させている。

「四十二……四十三……」

読み上げる航海士の声に合わせて、鳥の姿は次第に視界の上方に昇っていく。艦の潜航によって鷹見の視点も下に移動しているからだった。鳥は水平に飛んでいるだけである。

はっと鷹見は目を開け、急いで目を閉じた。鳥は潜水カウントよりもずっと早く視界を移動している。錯覚ではない。と、言うことは——。

「潜水停止！　バラストタンク排水、急速浮上だ！　減速しろっ！」

「魚雷通過します」

鷹見の叫びと、艦の遙か上方を通り抜ける魚雷の航走音はほぼ同時だった。予想よりかなり遠いその音が、鷹見に自分の推測の正しさを認識させた。

「探信儀打て！　正面岩礁の反響ないか」

気圧され、アクティブソナーを発信した聴音員は顔色を変えた。

「前方二百メートルに岩礁あり！　海底までの距離も近い！」

深度計の数値はでたらめだった。実際の深度は八十メートルを割り込み、なおも急速潜航の勢いは止まりきっていない。速度は慣性で二十ノットを保っており、このままでは三十秒余りで激突は必至であった。

「空気圧足りません。回避に充分な浮力は——」

「減速しきれません——」

あちこちから悲鳴に似た報告が届く。回避不可能。鷹見は目を閉じ、青空を振り仰いだ。眩い太陽が視界を真っ白に染める。

「諦めるな。潜水艦乗りの意地を見せてみろ」

すぐ後ろで歯を食いしばったような声がした。振り返るが、何も見えない。太陽の残像が目に焼きついていた。

船体に衝撃があった。岩礁に衝突した——鷹見がそう思ったのは一瞬であった。それほどの衝撃ではない。第一、艦はまだ潰れていなかった。

「何とか間に合った。君がいち早く潜航と推進を止めてくれたお陰だ」

目の前の人物が何を言っているのか鷹見には理解できなかった。視覚は徐々に回復しつつあったが、まだ黒い影にしか見えない。声に聞き覚えがあるような気がした。

それにしても長い二十秒だった。いい加減衝突して、潜高大が海の藻屑になっている頃合いである。実はもうあの世にいるのではないかと鷹見が思った時——。

「た、助かりましたあ！　岩礁を抜けて浮上しています」

「何だって——」

「後方で衝撃音。空気が大量に流出する音がします。敵艦が岩礁に衝突、沈没したものと思われます」

何が起こったのか皆目見当がつかぬ鷹見だったが、死を免れたことだけは実感していた。艦が急激に向きを変え、眼前に迫っていた岩礁をすり抜けたのだ。

そればかりか、敵艦は勝手に潰れてくれたという。奇跡——そうとしか考えられなかった。

その時ようやく、鷹見に視力が戻ってきた。同時に、あの声が誰のものであったのかが記憶に蘇る。

「水無月艦長！」

「任せっきりで悪かった。躰がまだ海に馴染んでなくてな、流れを掴むのに手間どった」

そこに、逞しい上半身を剥き出しにした水無月がいた。無数の傷が刻まれた肉体からは、気のせいか陽炎が立ち上っているように見える。

「何が——何が起こったんですか」

「艦のコースを水流でずらした。少々無理をしたから、潜舵あたりが破損しているかも知れん」

「水流？」

「そいつが俺の能力だ。君が視覚を飛ばすようにな」

下士官が持ってきたシャツを着込み、水無月は言った。「だが、耐圧船殻の中から外の高圧水を操るとなると勝手が違う。君に指揮を任せていた間に訓練をさせてもらっていた」

鷹見は言葉を失っていた。

潜航排水量二千トン以上の潜水艦を岩礁への衝突コースから強引に弾きとばす水流——想像しただけで寒気のする凄まじさである。しかもそれを、生身の人間が操ると言うのだ。

だからこそ、水無月は水中高速潜の計画に必要であった。科学技術の限界を越えたスピードの制御に、海軍首脳部は水無月の妖術を用いようとしたのである。

「結局、敵潜の残留物は見つからなかったか」

潜高大はその黒い姿を、穏やかな夕暮れの海に浮かべていた。歪んだ潜舵の応急修理が今しがた終わったばかりである。

水無月と鷹見は艦橋に出ていた。オレンジ色の夕陽が、少しずつ水平線に没していく。

水無月は少し憔悴した表情で太陽を見ていた。瞬間的に二千トンを押し流した水流は、彼の水術の中でも最難の部類に属する。それを密閉された潜水艦内から行ったのだ。消耗しない訳がなかった。

「どこの潜水艦だったんでしょうか？」

煙草をくゆらせながら鷹見が訊いた。悪夢に似た戦いを切り抜けたせいか、これまでのどんな煙草よりも旨く感じられる。

「さあな。この国が力をつけるのを恐れている国は幾らでもある。ただ、ヨーロッパ中央部にあの手の術を使う奴は多い」

「あの、深度計の異常ですか」

「いいや、深度計は狂っていなかった。奴は水圧を軽減したんだ。圧力増加は無理だろうがね」

巨大な潜水艦にかかる水圧を軽減させるということは、恐ろしく強大な負の力場を形成しなければならない。耐圧強度を一気圧上げるだけでも、船殻全体ではとてつもない強度の向上が要求されるのだ。そして術者はその力場の荷重を精神、あるいは精神と肉体で支えなければならない。

「三気圧減らせば三十メートルの誤差が出るからな、恐らく鬼島中佐もこいつでやられたんだろう。うまく使えば魚雷の軌道も狂わすことができる」

「でもあなたは、そいつごと敵潜水艦を葬ったんでしょう」

「あれは偶然だ。この艦を包んでいた敵の力場が水流に作用して、水圧から解き放たれた流れが暴走して敵艦を巻き込んだ。言わば自分の術で首を絞めたようなものだ。自力で同じ真似をやろうとしたら俺もくたばるだろうな」

妖術は絶対ではない。術者は常にリスクを背負いながら行使している。そういうものか、と鷹見は思い、そして自分もかつて、瞼を閉じても暗闇が得られぬ恐怖と戦ったことを思い出した。

「艦長に負担をかけない操艦を心がけますよ」

「頼りにするよ」

鋼の貌に微笑が浮かんだ。水無月の力に恐怖すら覚えた鷹見だったが、今会話を交わしているのはその力故に戦い、休息を求める戦友であった。

「なあ」

水無月が眠そうに目を閉じ、片目だけを開けて鷹見を見た。「俺は海軍大佐にされたが、海軍のことは良く知らん。エスってのは何のことなんだ？」

鷹見は一瞬きょとんとしたが、すぐに腹を抱えて爆笑した。そう言えばあの時使用した伝声管は、当然艦長室にも伝わっているのだった。

涙を拭きながら、鷹見は水無月の肩を叩いた。

「呉に帰ったら教えてあげますよ。実地教育ありでね」

笑いながら見えた千メートル上空からの視界に、合流地点に航行してくる伊一八一潜の姿があった。

# COLUMN 1

BY 山下章

## 一冊のノートから――インベーダーゲームと先生の思い出――

COLUMN コラム

久しぶりに押し入れの奥を整理していると、表紙の角がよれよれになった、一冊のバインダーがでてきた。見るからに黄ばんだ紙が数十枚、中に雑然とファイルされている。

表紙には、まだ幼い文字で「平間中学三年一組・班ノート」。

ああ、懐かしい。

中三の時に、班のメンバーが毎日順番に書いていた、僕らの生活の記録帳だ。確か卒業の時に、担任の先生が「お前らが大人になった時にもう一回読み直してみろよ」と言って、一人一人に手渡してくれたんだっけ。

だから、僕の手元にあるのは、僕自身が書いた分だけ。

くすくす。あの頃は、こんなことを考えていたんだなあ。

当時は当時なりに、さまざまな機微を感じ取っていたことが思い返される。

パラパラとページをめくっていくうちに、僕の目は、ひときわ手垢にまみれたページのところで止まった。

そこに記されているのは、鉛筆で書かれたエイリアンの絵柄と幾つかの図表、それに解説するように添えられた文章。

冒頭に、赤いボールペンで、大きくタイトルが書かれている。

☆「インベーダーゲーム攻略法」――。

三年一組担任の相原先生は、中学の教師としては実に型破りな先生だった。体育を受け持っており、その異常にガッシリとした体格だけでも人目を引くのだが、やることなすことも、すべて豪快なのである。

毎朝、でかいバイクで学校へ乗り付け、ブォンブォンとエンジン音を校庭に響かせる。で、暇さえあれば、そのバイクを磨いている。ときどき先生が学校を休む日があったのだが、それはいずれも雨の日で、「相原はバイクを汚したくないから休むんだ」との噂が校内をまことしやかに流れたこともある。

校則に反抗したくて、ワイシャツをわざと着くずしている女性徒へ注意するときも演出家だ。胸元をのぞき込むようにしてから、「おい、あんまり俺をどきどきさせるんじゃないよ」。

それに、怒らせると、とにかく恐い。うちの中学は当時、川崎市内でも一、二を争うくらいワルで有名で、実際周囲の中学と喧嘩をしても負けることはなかったのだが、その不良連中も先生には、決して逆らわない。

たとえば、朝礼で風紀係の先生が、ワルの中でも幹部クラスの生徒に、服装違反だから前にでてきなさいと言ったことがある。しかし、生徒はまるっきり無視している。風紀の先生が、しゃにむにマイクで怒鳴ろうと、どこ吹く風、である。

そこで、仕方ねぇなぁという表情で、頭を掻きながら相原先生が立ち上がる。すると、それを見た生徒は、半ば駆け足で前にでていく。「相原を怒らせちゃいけない」。それは、不良たちの間で暗黙の了解となっていたのだ。

一度だけ、先生が本気で怒ったことがあった。まるで熊が吠えるかのように叫び、恐ろしく痛そうな拳が風を切る。それを見ていた生徒たちがつけたあだ名が「ひぐま」。

そんな破天荒な先生ではあったが、生徒たちから限りなく厚い信望を得ていたことも確かである。

困ったことがあれば、親身になって相談に乗ってくれる。それこそ当時オンエアされていた『金八先生』のように、夜中だろうと生徒のために駆けずり回ってくれるのだ。

そして、問題が解決すると、「ひぐま」は何とも言えない優しい顔で、にこにこと笑う。

生徒の多くは、相原先生を慕い、あることを争うように成就しようとした。

それは、先生のバイクの後ろに乗せてもらうこと――。

ある生徒は、黙って先生のバイクを磨いたし、ある女性徒は教壇に花を飾ったりした。そして、その甲斐あって見事に乗せてもらった者は、あたかも一つのステータスを得たかのように、教室で自慢話を演説するのだ。

誰もが、千CCのバイクに乗せてもらいたいと思っていた。

もちろん僕も。

でも、僕はそのために汗を流すほど、まめではなかった。

そんなある放課後、先生は僕にこんなことを言った。

「山下、お前インベーダーゲームがうまいんだってな。今度、教えろよ」

当時の僕は、学校の周囲のゲームセンターで開催されたインベーダーゲーム大会でことごとく優勝し、多くの店で名前が張りだされていた。おそらく、そのあたりから噂を耳にしたのだろう。

先生の話を聞いた瞬間、僕はピンと閃いた。

班ノートだ！

こういうことなら、僕は好きなんだ。

インベーダーたちをどういう順序で消していくのが一番いいのか、わかりやすく書こう。

UFOが三百点になる法則も書いておかなくちゃいけないな。

もちろん、名古屋撃ちやレインボーなんかの秘技だって。

夜遅くまでかかって書き上げて、翌日、眠い目をこすりながら朝の学活で班ノートを提出した。なんだか、不思議に充実した気分だった。

その日の帰り。先生は優しいときの「ひぐま」になっていた。

「山下ぁ、文章だけじゃわかんねぇから、実地指導してくれよ」

僕は先生のバイクの後ろに乗っていた。

ゲームセンターへの行きも。そこから家までの帰りの道のりも。

「よーし、山下と勝負できるくらい俺もうまくなるからな」

分厚い背中越しに、先生の無邪気な笑い声が聞こえた。

「一年は特訓しないとだめですよ」

僕も笑った。

多摩川の土手の上には、インベーダーのレインボーなど比べものにもならない、美しい夕焼けが広がっていた。

僕はこの体験を、クラスメートの誰にも話さず、自分だけの胸にしまっておこうと思った。

PROFILE やましたあきら…ライター、評論家、TV解説者などコンピュータのことならなんでもこなすマルチプレイヤー。最近の著書に「電脳遊技考」(電波新聞社刊）がある。

# COLUMN ❷

BY　とみさわ昭仁

COLUMN コラム

# 仮空の世界でもすべてに答えが用意されてこそ現実と言える！

思えば僕がコンピュータゲームと出会ったのは、高校一年の終わり頃でした。堀切菖蒲園の休憩所に置かれていたインベーダーゲームは、なにか今までに見たことのない強烈な衝撃となって、僕の眼に飛び込んできたのです。以来、多くのゲームフリークがそうであったように僕もまた「パックランドでつかまえ」られたかのごとく、ゲームセンター通いをするようになりました。

それから19年。常に最高の趣味としてゲームを楽しんでいた僕が、ゲームで飯を喰うことになるだなんて、高校一年のときにはとても想像のつかないことでした。よく〝仕事と趣味は別だ〟と言う人がいますが、僕の場合はやはり好きなことをして生活していけたら最高だと思っています。だから、たとえクソゲームの記事でも、締切りに追われても、原稿料が安くても、楽しくて幸せな気持ちが持てるのです。

さて、ゲームの仕事に関わる人の多くは「いつか自分でゲームを作りたい」と思ったり、あるいは作り始めたりしているようです。かくいう僕自身も、去年の夏あたりから仕事仲間数人と組んで、ファミコンゲームを作り始めました。すでに知っている人もいるでしょう『メタルマックス』というRPGです。本当はこのコラムを利用して、メタルマックスの宣伝も兼ねた制作日記みたいなものを書こうと思ったのですが、それよりむしろ、僕がゲームを作るときにいつも考えていることを書こうと思います。

僕はバーチャル・リアリティ（仮想現実）としてのゲームを考えた場合に、仮想であっても現実を作ることには変わりがないのだから、そのゲームにプレイヤーが抱いた疑問には〝必ず答えを用意しておかなければならない〟と思っています。逆に言うと、ゲームをしていてプレイヤーがある部分に疑問を持ったとき、そこに明確な答えが用意されているゲームほど、仮想の現実としての完成度が高いというわけです。

『ドラゴンクエスト』シリーズを例にしてみましょう。このゲームでは敵の攻撃を受けプレイヤーが死に至ると、文字を表示するウインドーが白から赤に変わります。これはなぜでしょう。単に危険信号の赤をあらわしているのでしょうか?一緒にメタルマックスを作っていて、ドラクエの制作スタッフでもあった宮岡寛さんに答えを聞いて驚きました。

あれは「眼に血が滲んでいる」のだそうです。〝こじつけ〟と言ってしまえばそれまでですが、普通はそのこじつけすら考えないものです。

他にもドラクエでは、プレイヤーがその世界で自由に生活できるようにと、あらゆるものに対して答えが用意されています。例えば勇者であるあなたがタンスの中を調べてみたくなれば〝引き出しの中〟を見ることができるし、ツボの中を調べることも、船から飛び降りて潜ることも、カジノで遊ぶことも出来るのです。

「したいと思ったことがちゃんと出来る」。

なぜドラクエは売れたのか、という問題がいろんなところで語られましたが、おそらく最大の理由はそれでしょう。

ところで、僕はゲームと同じくらいに映画が好きです。ゲームを作るときにもかなり映画の方法論を参考にしたりするのですが、今、世界でいちばん好きで追いかけているのがジョン・マクティアナン監督の作品。あの『ダイ・ハード』を撮った人だといえばわかりますね。で、どうしてこの人の作品が好きなのかというと、それが先程に述べた〝作品中のあらゆる疑問に答えを用意してある〟からです。一連のマクティアナン作品が異常な完成度の高さに包まれているのは、すべてそこに由来しているのです。

ゲームとまったく関係ない話になりますが、最近マクティアナン監督の全作品を通して観ていて、あることに気がつきました。彼の撮る映画には全部に共通するテーマがあったのです。それは〝見えないモノへの恐怖〟ということ。せっかくだからそれぞれ例をあげていきましょう。

まずデビュー作の『ノーマッズ』。ここでは一般の人の眼には映らない〝ノーマッズ〟と呼ばれる放浪の地霊を目撃し、その存在を知ってしまった文化人類学者が、ノーマッズたちに追われる恐怖を描いています。映画という虚構の中で、さらに虚構と現実が入り組んでいく様は見事と言うしかありません。

二作目がA・シュワルツネッガー主演の『プレデター』。シュワルツネッガーの他に、この映画でのもうひとりの主役とも言えるのが、遠い惑星から地球へ人間狩りにやって来たエイリアン。そいつは森と同化して姿を消してしまう能力を持っていました。シュワルツネッガー率いる米軍特殊部隊は〝見えない敵〟に恐怖します。

そして三作目『ダイ・ハード』では高層ビルに立て籠もったテロリストたちが、犯行計画では〝存在しなかった〟はずの見えない敵、ジョン・マクレーン刑事に追い詰められてゆく状況を描いています。凶悪犯罪者でさえも、見えない何者かに追われ、恐怖するのです。

最新作『レッド・オクトーバーを追え！』での見えないモノとはなにか？　もうわかりますよね。レッド・オクトーバーそのモノのことです。通常は見ることのできない海底に、核ミサイルを搭載した原子力潜水艦が徘徊することによって世界中が恐怖感に襲われます。しかもその潜水艦にはソナーではキャッチできない磁気水力推進装置が装備されていて、レッド・オクトーバーをよりいっそう〝見えないモノ〟にしていました。

恐怖感というテーマは別にして、こういう何かひとつのことを徹底的に追求してゆく姿勢や、それを表現するためのディテールへのこだわりが大好きです。ゲームや映画にかぎらず、エンターティメントとしてお金をとって他人に見せる作品は、すべからずこうあるべきだと、僕は思います。

これはファンタジーの本ですが、読者の大半はゲーム好きだと思います。だから、優秀なゲームプレイヤーである皆さんも、作り手に遠慮などしないでもっと贅沢を言ってください。もっと、もっと完成度の高いゲームで遊ばせろ！　と。それにキチンと応えられるのがプロのゲームデザイナーなのです。そして近い将来、ゲームは映画を越えるメディアになるでしょう。

**PROFILE** とみさわあきひと…世界的に有名なドリフターズ研究の第一人者。ゲームも作れば製図も引く。最近、田尻智のゲームフリークに出入り。

THE story of Death-Whisper

# 死を叫ぶ者




高橋政輝


力ある刻印を
体に刻み
すごい！マイロウ
その力をもちて
彼らは自らを
トッ
異界との門を護る者
マイロウ あとはまかせて さがっていなさい
刻印を持つ者と呼ぶ
まだやれます
なんという力だ——
ゴオオオォ
くるぞ！

◆異界との門を護り、刻印を持つ者、マイロウは真の強さを求めて修業を続けていたが…





さし突らぬく
鋭き者どもよ
……
効かない!?
奴め
結界を——
いけない!
マイロウ
心を
閉ざして!!
う……
……あ


おまえを
待っていた
ずっと――
あらがわ
なければ
苦痛も
恐怖もない
永遠の
やすらぎを
与えよう
この世界に
ありて
最も
我らに
近き者よ
――
もう
苦しみ続ける
ことはない
暗く――
静かで
安らかな
おい！


!!
これは
刻印を持つ者——
それも子供!?
刻印を持つ者にも
効果があるかどうか
——
——
出血を
止めなくては


まてよー!
…
ギィ
あのー
ハルバ様
水を……
ああ
すまない
そのまま
そこへ
?


コツ
コツ
見よ――
醜いその体を
見よ――
血にまみれた両の手を
ばっ
おっと
驚かせてしまったね
すまない
気分は悪くないかな
痛みはまだあるだろうが
――
あ……
ここは
――?


——で 運よく この村へくる 途中で 君を見つけた ってわけさ
その醜き体を
よし おしまい!
私は村人を 看てこなくては
ゆっくり してなさい
あの
ん?
その服は 私のだけれど よかったら 使ってくれ あまりきれい とはいえないが
ありがとう…


癒師(セナジー)
癒しの手と
技を持つ者
村々をまわり
その手で
人々に救いを
その身に
尊敬と感謝を
!
あれ？
ほとんど
ぴったりだ
私のだけれど


熱がさがらないようならまた呼びなさい
はい
ずっとこの村にいてくれたらいいのに——
ん~~~ それは……
言ってみただけですよ——
おやすみなさい
おやすみ 君のうちのわんぱく小僧にもね
……
まだ起きてたのかい
もしかして足の傷が痛くて?
あ… いいえ 大丈夫です
ホ
……

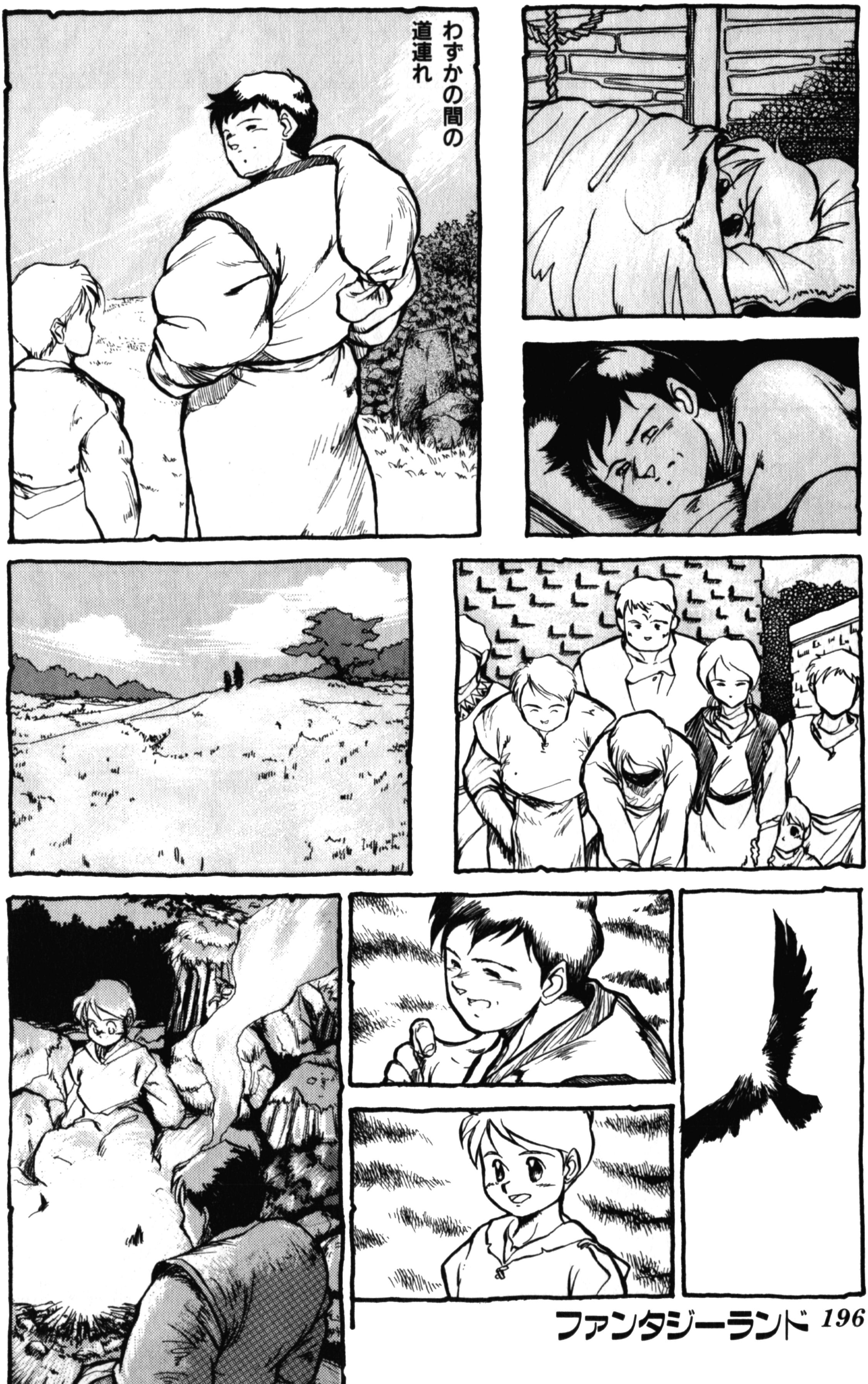

とうとう
あなたが
遣わされ
ましたか
我が教え子
マイロウ――
いや
それとも
……


裁く者よ
我が師よ―あなたまで
異界の力に屈するなんて
屈したわけではない受け入れたのです
あなたの兄がわりだったサラムとともに―
冷たく大いなるやすらぎを―
もう苦しみはありません
ザッ


むさぼりつくす
卑しき者どもよ
薄き刃もちて
切り裂く者よ
宿りて
為せ!
トッ



打ち砕く
者よ!!
肉が裂け
骨の砕ける感触
血の臭い
幾人も
幾人も


わずかの間の道連れ


自分がただの子供のような——
錯覚しそうに
ん？


あの――
もしか
して――
ザッ
確かに
私の息子が
着ていた
ものだよ
……
ちょうど
君ぐらいの
齢のときにね
これ 形見
なんでしょう
やっぱり
――
いいんだ
……
私が
持っていても
しょうがない
そんな……


!!
疲れただろう
マイロウ
助かったよ
!


近い！
このまま
さよならするね
――
ごめんなさい
すぐ
そこまで
来ている―


追われるのは性にあわなくてね
こちらから出向いてきたよ
サラ…ム…兄さ
歴史上 もっとも幼くして 刻印を体に刻んだ者だけのことはあるな――
その齢で師を超えるか………


マイロウ!
薄き刃もちて
切り裂く者よ
おまえにこの私が殺れるのか
姿に宿りてその形態(かたち)を護る者よ


ゼイゼイ
グッ
血を糧に
還れ——
薄き刃もちて
切り裂く者よ
いるんでしょう
——
ハルバ
おぞましいでしょう
こんなになってしまうんだ
あはっ
マイロウ！
肉体に直接宿らせたから
……
ボクはね
この人といっしょに育てられたんだ
ずっといっしょで
いつも——
マイロウ！
この傷あとは
狼からボクを守ろうとして
——それで
さっき——
最期に


『おまえなんか見殺しにすればよかった』って――
クスッ
マイロウ
傷を――
ポッ
ジャリッ
ビュッ
触れるな!
もういいよ ハルバ
アハッ
ガッ
ザク
バッ
マイロウ!
ブシュ
ウ…あ
ザッ


傷に触れた癒しの手は熱く――
生命を感じた


それから――
何人も何人も殺した――好きだった人達まで
もう…いやだ
わかるよ
癒師(セナジ)のあなたになんか
わかるはずがない


わかるさ
ハルバ？
自分の息子を殺した――
ギイッ
バサッ
私には――
癒師になろうと村を出たのはいつだったろう
愛する女性(ひと)もいたがためらいはしなかった
彼女が私の子を宿しているとは知らなかったからだ


村へ癒師(セナジー)として戻ったのは9年後——
彼女はすでに亡く
そして村は
ゴオッ
パチ
何人かはもう
すでに
手遅れで
その中に
私の息子もいた
安らかな 死を——
パチ
パチ
なぜボクに
そんな
話を——


死を与えるために
息子に触れたとき
同じ
だったんだ!
そして
君に"癒しの手"で
触れたとき
私が感じ
そして
見たもの——
絶望と苦痛の
闇の中で
魂は救いを求めて
死を叫んでいた
——ウ
——イロウ
マイロウ!!


絶望に身を
まかせてはいけない
いけない
マイロウ
たとえ闇の中でも
瞳を見開き
捜すんだ


ヒューッ
グ
灯を見つけるんだ
生きろ——
生きるんだ

◆ありがとうハルバ。真の強さを知ったマイロウは瞳を見開き、第一歩を歩み出す……




End

# COLUMN 3

講師・古矢 徹

# 今回のテーマは「女神転生II」、「ドラクエ」に見る音楽の影響です

COLUMN コラム

こんばんわ、私が『広辞苑』を編纂した新村です。冗談はこれくらいにして、さっそく本題に入りましょう。

今回、私にあたえられた使命は、「ロールプレイングゲームについて言語学および社会学的立場から論じる」というものである。もうとにかくどんどん本題に入っていくのだが、次のテーマから論じていくことにしよう。

〝『女神転生II』に見る、ロックムーブメントの影響〟

誰でも気づくところから挙げていくと、まずはモンスターの名前にみるロックの影響である。

ロンブー（本名／ロンドンブーツ）をはいたモンスター「メタル」、そして髪をおっ立てた「パンクス」。このあたりは、誰でもわかる初級編と言えよう。さらに、音楽分類学的命名という点でいえば、意外なところに「メロウ」というモンスターも存在することに、読者諸君は気づいたか。

もちろんこれは、ひところ我々を「一億総わたせ」な気分にさせた、ソフト&メロウから来ていることは明白である。

流行をすばやくキャッチし、かくし味的に使用した名前もある。「ダンバラ」だ。

ダンバラダンバラと口に出してくりかえしてみるとわかる。ダンバラダンバラダンバラランダバランダバ……そう、ランバダ！

いいところに気づいたじゃないか。

また、同じくモンスターの名前のそこここに、ロックの名曲タイトルがかくされているのを、みなさんはご存知か。

まずは、♪ノーバディゴナテイクマイカー、芝のフィールドに出現する「ハイウェイスター」。若年層読者のために一応説明しておくが、これは1970年代、高校の文化祭といえば必ず聞こえてきたディープパープルの名曲である。

「マンイーター」は当然、日本で言えばさくらと一郎みたいなグループ名ホール&オーツのヒット曲から。

ロックとは少々離れるが、日本のフォーク系歌謡曲から来たモンスター名もある。

地獄に住む鳥人、「フリアイ」だ。

あえて歌うまでもないとは思うが、念のため歌っておこう。ギターは3カポのAm、もちろんアルペジオで。

♪悲しみに〜出会うたび〜

……。

これをくだらない駄洒落ととるか、言語学的立場から見た鋭い考察ととるかはみなさんの自由だが、『女神転生II』の作者は、100%確実に『われら青春！』を見ていたであろうと、私は信ずる。

歴史に残るロック系有名人の名前も登場する。フィル・「スペクター」、ピーター・「ガブリエル」、そしてサイモン&「ガーバンクル」。

それはサイモン&ガーファンクルだって！　と、誰かツッコミを入れてくれ。

もう自分で入れてしまった。

と考えていくと、有明、銀座のフィールドに出現するモンスター「クラベビ」は、昔なつかしいエフェクター、クライベイビーから来ているのではないか、などという大胆な仮説も立ててみたくなる。

また、この『女神転生II』には、映画の影響も色濃く漂っていたりする。

「ディーバ教」、「ガープ」（の世界）などがその例だが、これはまた詳しく研究してから発表したい。

そのほか、「バロン」吉元――「ボルボ」13など、気になる符合も存在することを示唆しておく。

次に、近頃チマタを騒がせている、〝ドラクエに見るアイドル歌謡の影響〟説について、検証してみよう。

あ、ちまった！　なんつって。

こんばんわ、私が『広辞苑』を編纂した新村です。

冗談は2度くらいにして、ドラクエとアイドル歌謡の関係について、話をすすめる。

これは、1985年にスタンフォード大学言語生物科学研究所のダルベッコが唱えた説であるが、私は、この説については少々疑問をいだいている。

彼はドラクエに登場するキャラクター「ネネ」「リンダ」「シンシア」の三者について、「ネネ」＝じゅん&ネネ、「リンダ」＝山本リンダ、シンシア」＝南沙織語源説を提起した。「

そして、それを追った私の研究でさらに、日吉「ミミック」、「オーガー」知子、「コーミズ」今日子、久保田「ザキ」の存在が、ドラクエにおいて確認されたのである。（「オーガー」については、「オーガー」知子か「オーガー」ローザかという点で、論の分かれるところである）

それはともかく、ダルベッコの説の弱点は、じゅん&ネネ、あるいは山本リンダ、そしてさらに日吉ミミ、小川知子がはたしてアイドル歌謡であるかというポイントである。

これは、アイドル歌謡というよりも、昭和女性歌謡とくくった方がよいのではないか。

と考えるとさらにマギー・「ミネア」ンコ、三東「ルーシア」の存在も浮かび上がってくる。

つけ加えておけば、ドラクエの音楽を担当するすぎやまこういち氏は、「僕のマリー」「君だけに愛を」「銀河のロマンス」、あるいは「花の首飾り」などタイガースの名曲で有名な、昭和歌謡の大立て者的作曲家である。

楽しい講義も、あと五行だ。なんだか『カノッサの屈辱』のような展開になってしまったが、こうした講義は必勝本の本誌『ファミコンバラエティ劇場』健在時から、私は展開してきたつもりである。最後に、呪文の「ヒャド――ヒャダルコ」は、トアルコトラジャコーヒーから来ていると指摘して、終わりにする。

PROFILE ふるやとおる…上智大学文学部新聞学科卒。独身。ゲーム業界のソクラテスと言われた知性と破壊的な言葉の暴力を武器に夜な夜な麹町界隈を徘徊する。最近ジェニファー伊藤とできたらしい。

COLUMN ④

BY 田尻智

# スーパーファミコンの新作「ジェリービーン」の開発悲話

COLUMN コラム

最近、僕は苦労している。前向きな苦労ならいい。

たとえば、原稿を書いたり、ゲームを作ったりしているときの苦労は、快感と表裏一体になっている。それは、むしろ心に体にいいことだ。ところが、僕がいま、している苦労というのは、そういうものではないので、ただつらいだけ。もう、ストレスたまりまくりで、一日イライラしているのだ。

いま、僕は「クインティ」に続く新作を作っている。じつは、何本かやっているのだけれど、そのうちの一本が、スーパーファミコンの「The Adventure Of Jelly Bean」。メーカーは、EPICソニーというところで、僕は、ゲームデザインだけを引き受けた。プログラムは、パソコンソフトを作っているシステム○○○というところがやっている。

つまり、今回はメーカー側の希望もあって制作の半分以上を、外部スタッフに任せた。前作の「クインティ」では、制作スタッフたちを自分で集めて、長い時間をかけて作ったから、自分でも結構納得のいくものに仕上がったと思う。しかし、ほかにもいいゲームを作っていく方法はあるはず。自分と違うタイプの人と仕事をするのは、刺激にもなるだろう。今度はパソコン大好き少年と組んで、ゲームを作るということで、かなり不安もあったけれども、そう思って作り始めた。

だが、不安は、ときに見事に的中する。

僕は、基本的にパソコンゲームには、そんなに詳しくないし、好きでもない。そこで長い間生きてきた人たちと、一緒に仕事をするのは、はっきりいって難しい！　つまり、パソコンソフトとは、マニア向けの分衆商品。ファミコンやスーパーファミコンのソフトは、コンシューマー向け。大衆を対象にした商品なのだ。

そして、そこに大きな溝がある。同じコンピューターゲームでありながら、制作のポリシーやノウハウがまったく違うのだ。

だから、制作を始めたのはいいが、とにかく！　ぜんぜん、こっちの言うことが、理解されてない。キャラクターのデザインから、僕の出すアイデアの評価、プログラムのやり方。

こっちで書いたイメージイラストと全然違うドット絵が上がってきたり、やたらコンピューター専門用語を使って、「プロトコルがアルゴリズムで、プライオリティーですよ」みたいなコミュニケーションの取り方をしてきたり。

もう、すべてが、僕の考えているものからは、程遠くて、へぼい。いくら言ってもそれが改善されない。

「このアイデアはプログラムできません」

「これはできません」

「それは、すごくめんどくさい」

「じかんがかかります」

彼らの会話のなかに、なんと否定形の多いこと。もっと前向きの苦労をしたらどうだ、若いんだろ！　まったく、といいたくなる。

田尻智最大のピンチだ。

でも、グチってばかりいてもしょうがない。けっきょく、うち（ゲームフリーク）は、ゲームデザインだけやるはずだったのが、キャラクターデザイン、ディレクターも、やることにした。もう、タクショー（おたくの凶悪形）には、まかせておけない！

そして、僕という人間を支持してくれる人たちが、何人いてくれるのかわからないけれど、その人たちには、とりあえず、安心してほしい。僕は、自分で納得のいかない新作を、発売するつもりはない。やるからには、時間かかっても、苦労しても、いいものに仕上げる。くじけないよう、応援してほしい。

では、開発非話（？）のほうは、これくらいにして、肝腎の「The Adventure Of Jelly Bean」。この新作について、少し解説しよう。

これは、ひとつのジェリービーンが、人間性を取り戻すために旅をする物語だ。ジェリービーンといえば、レーガン元大統領が好きなお菓子だけれど、ここでは、むしろ変形自在なスライム状の生きもの。

これが縦にビヨーンと伸びたり、横にフニヤーと潰れたりと、自由に操作できる。ここが、一番の特長。ジェリービーンを十字キーとボタン操作だけで、どれだけバリエーション豊かな躍動感あふれる動きを表現できるか、が大きなテーマになっている。操作すること自体が楽しくなるようなものを作りたかった。

そして、もうひとつのテーマは、ストーリー。「Adventure Of Jelly Bean　」では、そのストーリーがとても重要だ。しかし、僕は、もともとアクションゲームにストーリーはいらないと思っていた。誤解のないように言うと、ストーリー性を文字で説明するのではなく、映像を中心に語れればいいな、と。文字とは、ペーパーメディアのために発明された道具であり、テレビゲームでストーリーを語るのには、もっと適切なレトリックがある気がしていた。

たとえば「ドラクエ」は、テレビゲームそのものというよりも、テレビゲームと小説のメディアミックスといったほうがいいのではないか。では、テレビゲームとして小説のレトリックを借りずにストーリーを語ることは、可能か。

そのことをここ二年くらい、考え続けていたんだけれど、最近になって、映像メディアの先輩として、映画がすばらしいヒントをくれた。字幕の存在だ。字幕は、文字情報でありながら、その存在を誇示することがない。字幕は、銀幕の人の声そのものとして、存在する。読んだ人は、それを読んだと自覚しない。つまりあれは文章ではなく、声なのだ。

だとしたら、テレビゲームでも登場する人々の声を文章で伝えることができるかもしれない。読んでいることを自覚させずに、聞こえないデジタル言語を翻訳して伝えるようなことが。今回の新作は、そのあたりを考えながら、文字とストーリーを乗せる作業をしている。

こんな感じで作ってる新作「The Adventure Of Jelly Bean」。完成までは、まだ少し時間がいると思うけれど、待っていてほしい。応援のおたより下さい。

PROFILE　たじりさとし…一般ユーザー、ゲームジャーナリスト、ゲーム制作者。ゲームをとりまく３大要素すべての顔をもつ男。設立した㈱ゲームフリークも順風満帆である。

拝啓、『ファンタジーランド』の読者の皆さま、『ファミコン必勝本』の
名前が『HIPPON SUPER!』に変わります。



# HIPPON SUPER!



かつては「映画」や「漫画」、
そう「テレビ」もそうだった。
新しくて、
突然人気の出たものは、
どうしたって……

➡この広告216ページに続きます。

# 通信販売フェア実施中！

コミック版
## 最後の竜に捧げる歌
外薗昌也・著／手塚一郎・原案／定価900円




生きながら石と化す竜。街を喰らい広がり続ける砂漠。神となることを夢見る男たち。襲いかかる魔獣の群れ。アモンとヴィジルの運命は。

コミック版
## 最後の竜に捧げる歌II
外薗昌也・著／手塚一郎・原案／定価980円




世界を飲み込まんとする"大喰らい"を止める旅にでた魔法使いグレイと妖精族のシーマ。行く手に待ちうける幾多の試練。大好評第２弾!!

小説
## 最後の竜に捧げる歌
手塚一郎・著／定価980円




少年アモンは竜を追っていた。竜はアモンのみている前で近くの森へ降り立った。ヴィジルとの出会い。それが全ての始まりだったのだ。

コミック版
## サーガ・オブ・ドラゴン
増田晴彦・著／定価900円




今国中を荒し回っているドラゴン"ギムヴェルク"を倒すべくシグルズ＝オルム侯の御息女フェーンと剣のヴォードたちが繰り広げる冒険譚！

コミック版
## ゼルダの伝説
未将崎雄・著／定価900円




魔を封じているといわれるトライフォースを守護するゼルダ一族。その一族の姫ゼルダとリンクが魔族最強の王ガノンとの死闘をくり広げる。

コミック版
## ファイナルファンタジー
海明寺裕・著／定価900円




世界は今、暗黒に包まれていた。醜怪なモンスターが人々を襲い、風は止み、海は荒れ、大地は腐ってゆく。今、伝説の光の戦士たちが行く。

## アリスの電脳遊園地
●品川るみイラスト作品集●
品川るみ・作／定価1000円




壊れた機械の夢。混沌の沼。時間を紡ぐ塔。機械に蝕まれてゆく森。狂える女王の世界をアリスは救えるか!?電脳世代のファンタジーアート。

## イラストレイテッド ファンタジー・ブック・ガイド
長谷川並一・監修／ファミコン必勝本編集部・編
定価1000円




世界の傑作ファンタジー小説を超美麗イラストレーションとともに紹介します！TVゲーム世代に贈るファンタジー小説入門ガイドの決定版。

## パックランドでつかまえて
●テレビゲームの青春物語●
田尻 智・著／定価900円




テレビゲームが大好きな人たちへ。ゲームセンターは、放課後の快感。青春の風景。ゲームセンターでキラキラ輝いていた青春時代!!

## 通　信　販　売　受　付　中　!!

**書店に買いにいきたいが暇がない………。買いにいってもいつも売り切れ………。そんな人のための通信販売フェア**

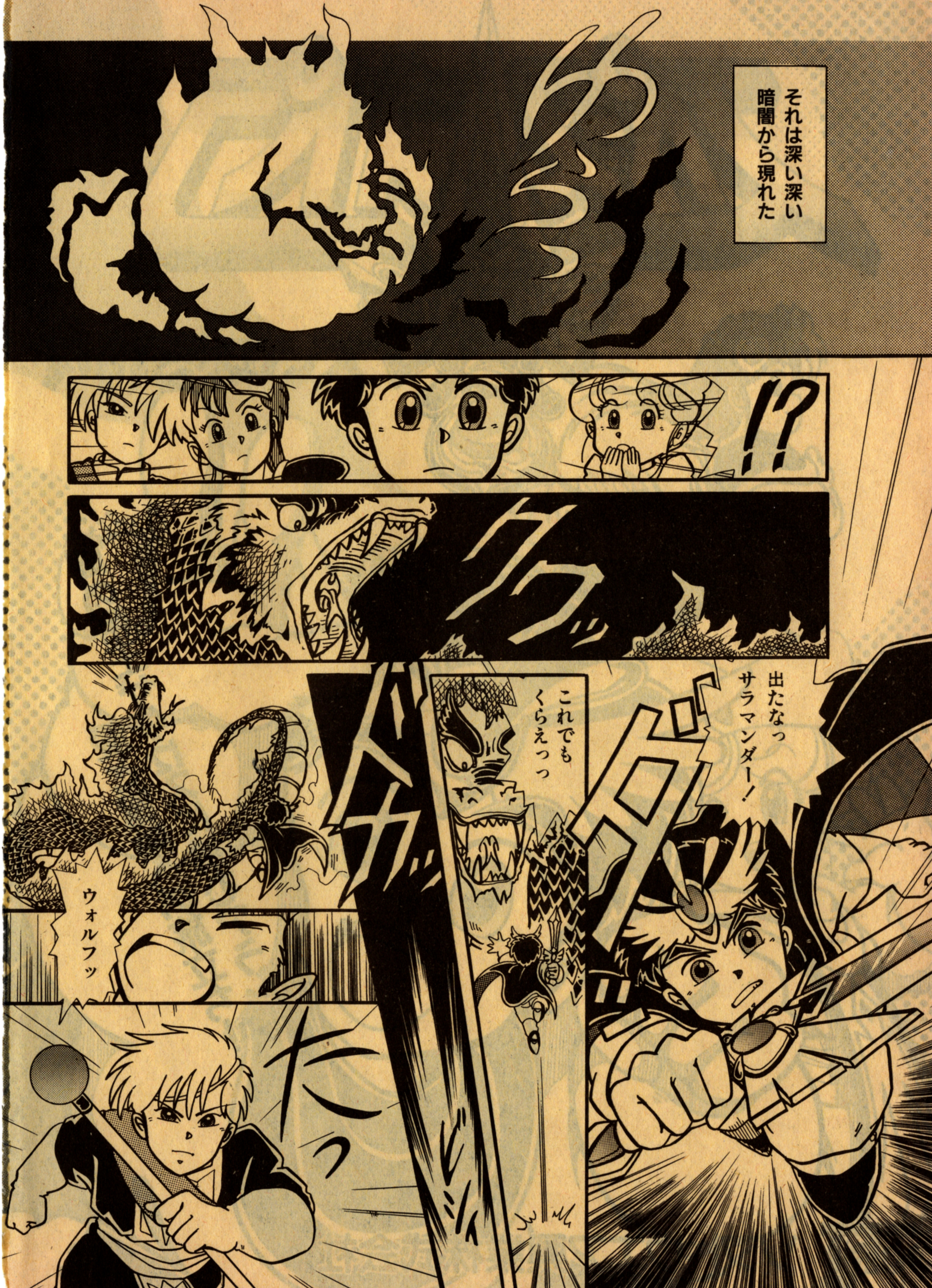
当コーナーで紹介した書籍を御希望の方は、小社まで直接お申込みください。お申込の方法は、御希望の書名、冊数、送り先を明記の上、現金書留か郵便振替にて、定価＋送料（１冊で¥310、２冊で¥360）を当社までお送りください。

〔宛先〕〒102 東京都千代田区麴町5-5-5 JICC出版局 通信販売係 ☎03－234－4621 振替＝東京7－170829 ㈱ジック

※価格はすべて税込みです。注文書名、御住所、宛先等間違いないよう御確認のうえ、お申込みください。



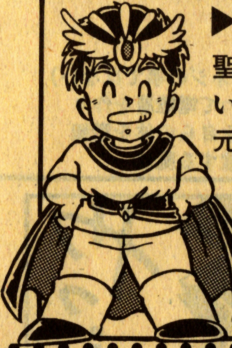
大いなる神々
闇の帝王ザグワスに挑むアーラン！
愛と冒険への旅立ち！
ソフトウエア興業株式会社


それは深い深い暗闇から現れた
ゆらっ
!?
クワッ
出たなっサラマンダー！
ダッ
これでもくらえっっ
ドカッ
ウォルフッ
たっ



ボルトッ
大丈夫?
あらら…私の出る幕なかったわ…
ボロ ボロ…
や…
やった!
!
やった〜っ やった〜っっ やったったっ♪
▶ボルト◀(けっしてネジの事ではない)
急激な気温変化によって電離層を作り
そこにたまる静電気を自らの体を電極
にかえて敵全体に放電する魔法
やっ…
ずきいっ
大丈夫か おまえ?
うっ…
しむ〜 イリヤぁ…
はい はい
スタミン
ぽうっ
▶スタミン◀
大地の豊饒な力を抽出
して味方のパワーを回
復させる健康によい魔法
これが不足すると口内炎に
なる…かどうかはわからない
そりゃビタミンだ♭♭
元気
おーっ パチパチ

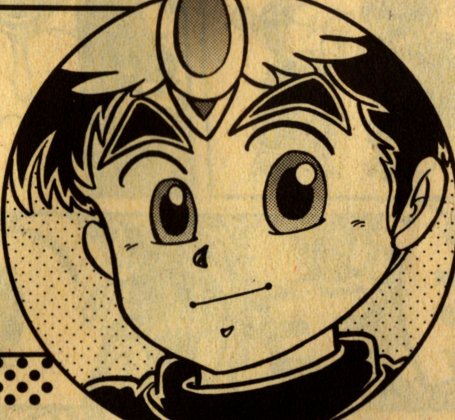


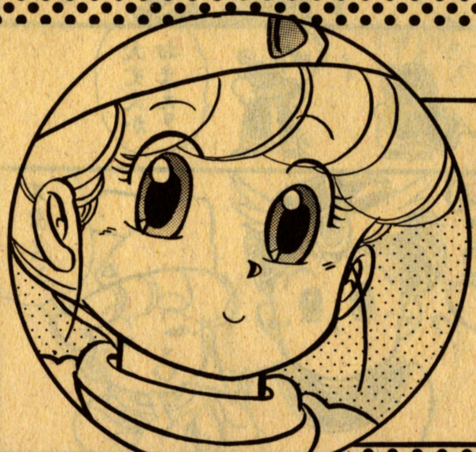



**▶アラン◀**

聖なる力をもつ勇者。どっちかっていうと魔法より剣の方が得意!
元気で明るい16才!

ローリア村出身
血液型はおおらかで
活発なO型。





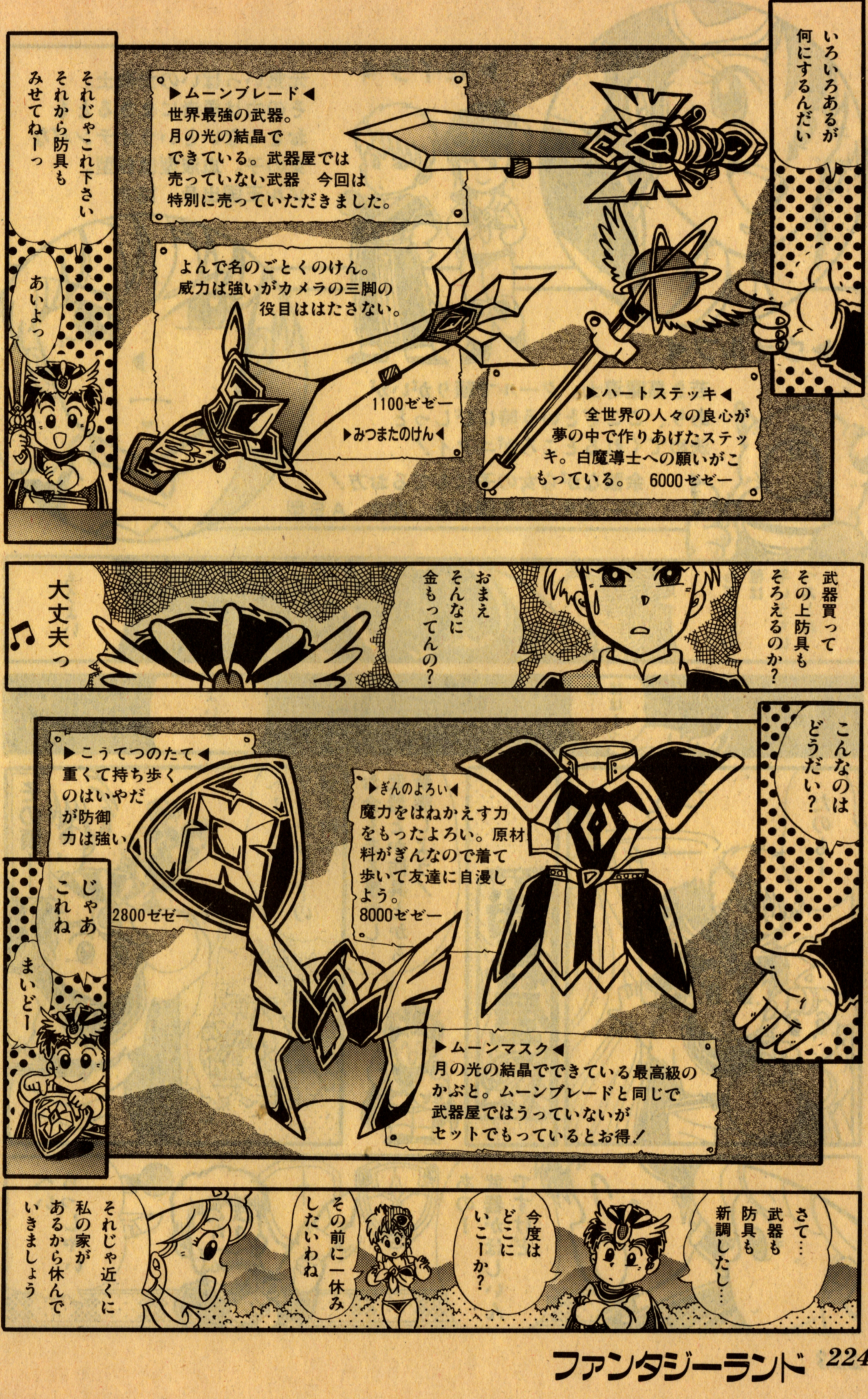
**▶イリヤ◀**

回復を司どる心優しい白魔導士。
and アークランド王国のお姫様。
アランを心配して一緒に旅をしているけなげな少女。かわゆい

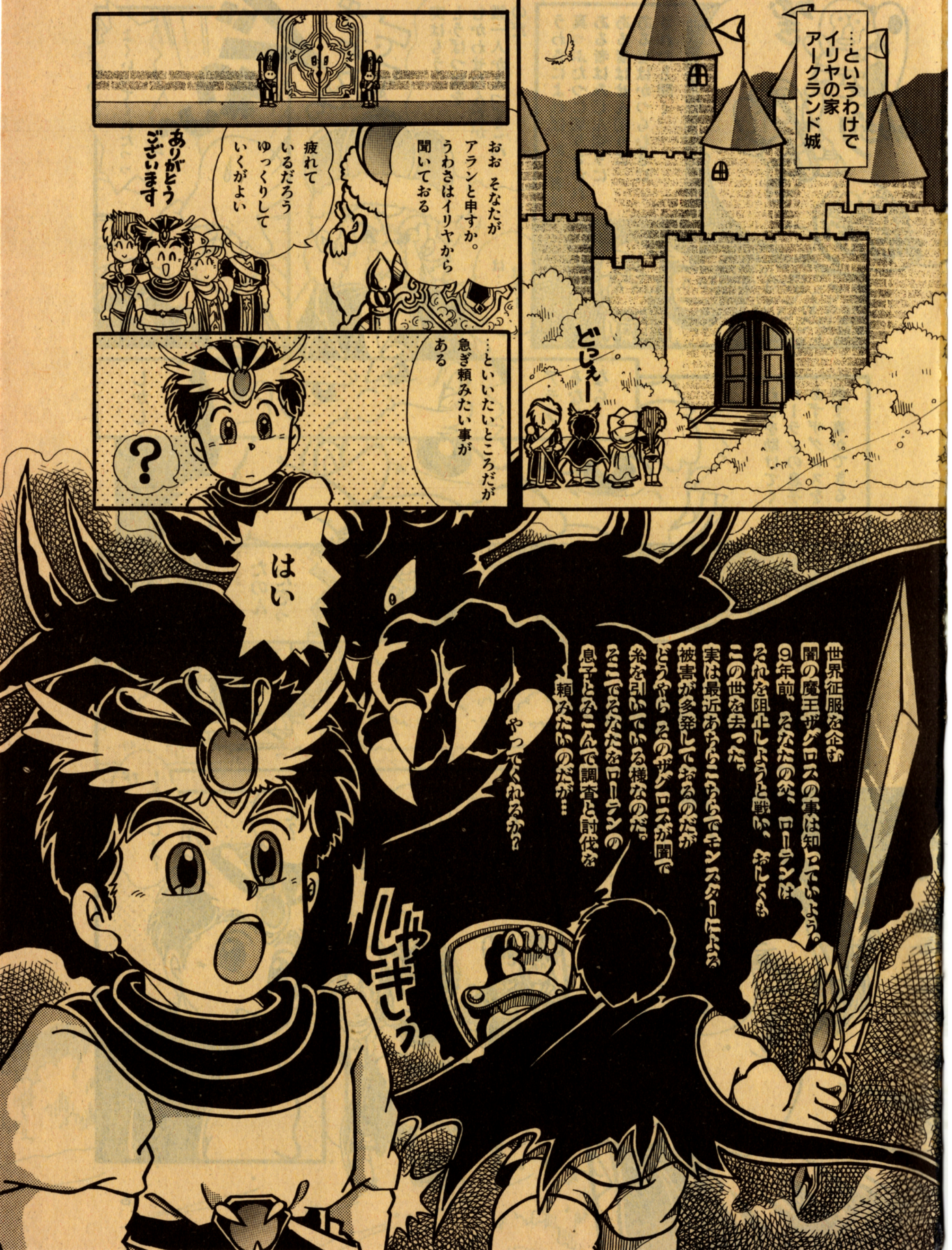
血液型は貴重面で真面目なA型。
15才。




▶セイラ◀
元気いっぱいの女戦士。
その力は勇者にまさるとも
おとらないというオテンバな
女の子。血液型はB型。
ゾル王国出身。18才
▶ウォルフ◀
それから
それから
若き黒魔導士。クールで頼りがいが
あり、ここぞという時にぴしっと
決めてくれるところがニクイ！
余談ながら女の子にもてるお方！
アークランド王国出身　20才　AB型
もうよい
わざわいの種は早いうちにつみとれ
よいな
は…ははーっ
その頃――
へーここがアークランドの城下町か…
お金もある事だし…武器とか防具とかも新調しよう！
あぜ
武器屋
きいっ
たのもー
へいらっしゃい
あのー武器がほしいんですけど



いろいろあるが何にするんだい
▶ムーンブレード◀
世界最強の武器。月の光の結晶でできている。武器屋では売っていない武器　今回は特別に売っていただきました。
▶ハートステッキ◀
全世界の人々の良心が夢の中で作りあげたステッキ。白魔導士への願いがこもっている。　6000ゼゼー
よんで名のごとくのけん。威力は強いがカメラの三脚の役目ははたさない。
1100ゼゼー
▶みつまたのけん◀
それじゃこれ下さい　それから防具もみせてねーっ
あいよっ
武器買ってその上防具もそろえるのか？
おまえそんなに金もってんの？
大丈夫っ
こんなのはどうだい？
▶ぎんのよろい◀
魔力をはねかえす力をもったよろい。原材料がぎんなので着て歩いて友達に自漫しよう。
8000ゼゼー
▶こうてつのたて◀
重くて持ち歩くのはいやだが防御力は強い
2800ゼゼー
▶ムーンマスク◀
月の光の結晶でできている最高級のかぶと。ムーンブレードと同じで武器屋ではうっていないがセットでもっているとお得！
じゃあこれね
まいどー
さて…武器も防具も新調したし…
今度はどこにいこーか？
その前に一休みしたいわね
それじゃ近くに私の家があるから休んでいきましょう


…というわけで
イリヤの家
アークランド城
どっしぇー
おお そなたがアランと申すか。
うわさはイリヤから聞いておる
疲れているだろう
ゆっくりしていくがよい
ありがとうございます
…といいたいところだが
急ぎ頼みたい事がある
?
世界征服を企む
闇の魔王ザグロスの事は知っていよう。
9年前、そなたの父、ローランは
それを阻止しようと戦い、おしくも
この世を去った。
実は最近あちらこちらでモンスターによる
被害が多発しておるのだが
どうやら そのザグロスが闇で
糸を引いている様なのだ。
そこでそなたをローランの
息子とみこんで調査と討伐を
頼みたいのだが…
やってくれるか?
はい
しゃきっ



ぐわしっ
よくいってくれたっっ
ずずんっ
実はもう とうばつ隊を むかわせたんだが 誰一人かえってこん のだ
じょー
は…… はあー
うわさによれば ある者は 真っぷたつに切りさかれ ある者はみじん切りに ある者はせん切りに ある者はかつらむきに されたと聞く
かつらむき
せんぎり
みじんぎり
ずい分 詳しい うわさ ですね。
しかし
アラン そなた なら
わしを助けてくれた ローランの息子なら 必ずザグロスを 倒す事ができるっ
たのん だぞっ
は はい…
びっくり したでしょ?
え?
私のお父さん かわってて
そ… そうかなぁ
そうだよ。。。
イリヤはきっと 母親似ね
そういえば アランのお父さんの 話はきいたけど お母さんは どうしているの?



元気だと思う…
…思うってお前……
い…家に帰ればいるんでしょ?
今どこにいるのか生きているのかもわからない…
しーん
ご…ごめんなさい私…私
い…いいよ気にしてないから
ほらほらほ…
!!



サラマンダーだっ
この前のかり・は返す
加勢するぜ
GO!


てぃっ
ボルトッ
ボロ
ボロ
やった…


どうしても
いきなさる
のか？
はい
この先にはもっと強い
モンスターがうようよ
しとるだよ…
子供ばっかじゃ
あぶねー
わかってます
でも一刻も早く
世の中を平和に
したいし……
行方不明の母も
探さなきゃ
ならないんで…
おお
えらいのお
じ〜ん
てれっ
いやぁ
そんなあ
照れるなあ
あはははは…
それじゃ
つらく きびしい
討伐の旅
4人で力をあわせて
打倒ザグロス!!
アラン達の旅は
これから始まる――
▶PUSH START◀



ファミリーコンピュータ・ファミコン は任天堂の商標です
FAMICOM FAMILY
夜が宇宙を支配し、その暗闇に一筋の光が走った。
青白く輝く生命。水の神が生命を育み、大地の神
は生命に力を吹きこんだ。風の神は進化を司り、
火の神は建設と破壊を大胆に押し進めた。
スペースオペラ
大いなる神々
平成3年3月発売予定
SoFT ソフトウエア興業株式会社
本社 〒101 東京都千代田区神田須田町2-9-2 第一テキスタイルビル ☎ 03-258-0231代

ファミコン必勝本
11月30日増刊号
FANTASY LAND ファンタジーランド
編集人 井上裕務
発行人 蓮見清一
〒102東京都千代田区麴町5-5-5
電話
編集部03(239)0237
営業部03(234)4621
JICC




雑誌27806-11/30 定価680円(本体660円)